

R. I. 第2670・2680地区



17 TH

# RYLA

S E M I N A R

Rotary  
Youth  
Leadership  
Awards  
Seminar

1994～'95 国際ロータリーテーマ

Be a friend 友達になろう



## もくじ

---

### 開講式

ロータリーの用語について

安平和彦 ..... 1

ごあいさつ

須之内淳二 ..... 2

計馬忠 ..... 3

今井鎮雄 ..... 4

7

### セミナープログラム

#### 講義

ロータリーの役割と若者の責任 今井鎮雄 ..... 9

21世紀における青年の役割 新野幸次郎 ..... 20

福祉社会とボランティア 野尻武敏 ..... 35

フォーラム

深川純一 ..... 51

まとめ

今井鎮雄 ..... 72

### 閉講式

ごあいさつ

須之内淳二 ..... 77

計馬忠

森滋郎

安平和彦

### 参加者感想文

A班 ..... 80

B班 ..... 89

C班 ..... 96

D班 ..... 103

参加者名簿 ..... 112

第17回RYLAセミナー運営委員会



CAMP  
**YOSHIMA**





## 開講式



### ロータリーの用語について

第17回 R Y L A セミナー  
ディーン 安平 和彦

ディーンというのは大学院、大学などの学部長とか、学生部長とかをディーンというようですが、私はこの R Y L A セミナーを塾だという風に言っておりますので、塾長とか、塾頭というように、皆さん方受講生と一緒にになって、そのお世話役とか、まとめ役とかをさせて頂きたいなと思っております。

ロータリーというのはロータリーの独特的な用語がございますが、R Y L A の始まる前にそのへんの解説をさせて頂いていた方が皆さんにお分かりいただきやすいのではないかということで前座を努めさせていただきます。

先ずロータリーというのは1905年に、経済恐慌で人心が荒れておりました、シカゴの町でポール・ハリスという青年弁護士が3人の友達と合い語らって、第1回の会合を持ったのがロータリーの起源でございます。ロータリーという名称は、始めはメンバー夫々の事業所や事務所で交代交代にやりましょう、いわゆるローテーションという言葉をもじってロータリーと名付けられたと言われております。現在ロータリークラブは150の国家と34の地理的地域に、合計で27100を越えるクラブ、約120万人の会員がおります。日本では1920年、大正9年に当時三井銀行の重役でありました、米山梅吉さんという方が最初に東京ロータリークラブを創設されました。そして翌1921年に世界で855番目のクラブとして認証を受けたということでございます。現在日本には2140を越えるクラブ、そして128000人を越える会員がおります。ところでそういった世界中のロータリークラブの連合体、いわゆるロータリークラブの連絡調整機関として、国際ロータリーというものがあります。ロータリーインターナショナル、略して R I という風に呼んでおります。本部はアメリカのイリノイ、エバンストンにございます。国際ロータリーの管理主体として、理事会、R I 理事会がございます。そしてその理事のことを R I 理事と呼んでおります。今井先生は今年の7月から国際ロータリーの理事としてご就任なさいます。今は既に決まった R I 理事ということで、R I 理事エレクトと呼ばれておられます。ロータリー年度は毎年7月1日から翌年の6月30日迄でございまして、今井先生は7月1日から2年の任期でご活躍していただくわけです。ところで国際ロータリーは全世界のロータリークラブをいくつかの纏まりに分けて管理をしております。その纏まりのことを District、地区と呼んでおります。日本には34の地区がございまして、今日おいでになっている四国4県は2670地区、そして兵庫県の方は2680地区と呼ばれております。1地区には約70前後のクラブがある所が多く、それが一つの纏まりとして地区を作っているわけでございます。地区には国際ロータリーの役員として、ガバナーがおかれ、その地区を管理しております。今日両地区から夫々ガバナーがお越しになっておられます。そういうガバナーを既に経験され

た方をパストガバナーという風に呼んでおります。地区大会で次年度のガバナーとして認められた方をガバナーノミニーと呼んでおります。ガバナーノミニーは毎年5月頃に行われます国際協議会というところに出席して、研修を受けた上で、今度はガバナーエレクトとなり、7月1日からガバナーに就任します。従いまして例えば、今日お越しになっている、須之内先生はR I 第2670地区ガバナー須之内先生という風な呼び方になります。国際ロータリーの第2670地区を管理されているガバナーという、国際ロータリーの役員でございます。又地区には地区委員会というものがございまして、ガバナーの諸活動を助けたり、色々な諮詢に対して調査の上回答する等の働きを致します。青少年奉仕委員会、RYLA委員会も地区委員会の一つで、委員のことを地区委員と申します。このRYLAセミナーでは両地区でRYLA運営委員会というものを作り、両地区的青少年奉仕委員、RYLA委員が一緒になって、委員会を構成し、企画、運営をしております。この運営委員会の方にはアドバイザーそして又RYLAセミナー・アドバイザーという名称がありますが、アドバイザーは地区的青少年奉仕の活動について全般的なアドバイスとか、指導をしていただくパストガバナーの方でございます。RYLAセミナー・アドバイザーというのはこのRYLAセミナーについて色々ご助言をいただく方ということでございます。簡単でございますが、用語の説明をさせていただきました。これからのお話にもそういう言葉が出てくるかと思いますのでご参考にしていただければ幸いです。

### ごあいさつ



国際ロータリー第2670地区  
ガバナー 須之内 淳二

一昨日日本列島で先ず最初に花便りが愛媛県宇和島より届いたそうでございますが、毎年この花便りを待ちかねるよう開かれるのがこのRYLAでございます。日本の国では昔から花といえば桜を指しますが、この花の季節は一番希望に溢れ、未来に向かって心に色々なことを誓いあう季節でもございます。この時期にRYLAが行われることは大変素晴らしいことだと思います。先般の大震災では兵庫の地区の方々は本当に大変な目にあわれましたが、こうして四国地区の人達とご一緒に、痛みがあれば分かち合っていけるようなものになれば大変素晴らしいなと思います。

一つのことが催されるには「天地人」ということがございますが、このRYLAもその通りだと思います。四国は「青い国、四国」と言われておりますが、瀬戸内海の青さと木々の青さ、その青に一番恵まれているのがこの余島だろうと思います。全ての文化は海によって始まるとNHKの生命の誕生でも紹介されましたが、海を見ると母なるものを思います。今を生きる私達は将来の人達に何をしなければいけないか、豊かな未来、きれいな自然そこに思いをはせ、その為に色々な努力をしていかなければならぬと心から思っております。先程ディーンから、簡潔で大変適確なロータリーについてのご説明を頂きました

たが、ロータリーの心もよく知って頂いて、ロータリーの心を理念として、皆様方と共に学び、共に考えて、将来に向かってのきれいな自然を残していきたいなど、そんな風に思います。この素晴らしい島で自然に出会い、人と出会い、一期一会を大切にお互いに素晴らしい友達になって頂きたいと思います。



国際ロータリー第2680地区  
ガバナー 計馬 忠

ご存じのように2680地区では大震災がありました。ロータリーの活動について、色々なクラブ、色々な方から色々なご意見がございました。一番最初に決断を致しましたのは、私の地区でやる今年の地区大会は中止する。しかしRYLAは止めないぞと思いました。今、若い皆さんのお顔を拝見して、止めなくてよかったなとしみじみ思い、今井先生ともお話をしたことでした。

皆さんは未来という荷物を背負っていく若い人達のリーダーです。そして皆さん方の後ろに100人の人がいるとすれば、×100の日本の未来があります。私はそういうことの期待をRYLAに持っております。現在、震災の跡も少し落ち着いて、次の段階に入る時期に来ております。「災い転じて福となる」ということわざがございますが、これから何をすべきか、皆さん方にもよく考えて頂いて、四国の方々と一緒にになってがんばって頂きたいと思います。

私は関東大震災の大正13年に生まれました。そしてたまたま、ガバナーの年に阪神淡路大震災に会いました。関東大震災の時に東京の市長をされておられた方が淡路島の出身で、大震災復興につくされました。私はそんな力はありませんが、復興に何かお役にたてればと思っております。そのことを思うにつけ、何か不思議な因縁を感じます。私は1945年22歳で戦争から帰ってきましたが、丁度震災で倒壊した今の神戸のように、日本国中の大都市がみんな焼けて何もありませんでした。それに遭遇したのが22歳、丁度今の皆さんのような年でした。その時私は何をするにも、何をしてよいか分からぬ。言えることは今と違って日本国中が飢えている時代でした。今度の震災は非常な災害は受けましたが、幸いにして物は豊富でした。あちこちから救援物資が送られて来ております。これから後、どんな風に復興の対策を講じ、努力をしていかなければならないか、これから課題だと思います。ここには四国の方と兵庫の方がいらっしゃいますが、大震災に自分が何を考えたか、何を実行したか、ということについてじっくりと考えて頂きたいと思います。若い方がボランティアにどんどん行っておられることを聞き、また見まして、復興は大丈夫だなという気持ちになったわけでございますが、「災い転じて福となす」ということでこの阪神淡路大震災というものを考えて頂ければ、大変有り難いと思います。先日も東京の地区大会でお話をしたことですが、自分は安全な位置にいての奉仕ということの考え方と、

今度のように兵庫の方々は自分も災いにあってはいる、その中でどんなことをしたらいいのかという奉仕の考え方があるわけです。このR Y L Aの中でそのようなこともお考え頂ければ、この時期R Y L Aをしたいと考えた目的の大きな一つが達成されるのではないかと思います。



国際ロータリー理事エレクト  
今井 鎮雄

R Y L Aセミナーの意義についてということでございますが、最初に皆さんにお詫びを申し上げます。実はこのR Y L Aは最初、全体のテーマを国連の「国際寛容年」の方針に従って、そのことをみんなで考えようではないかということになっており、関西学院の院長の宮田先生、神戸大学の名誉教授になられ、今高齢化社会研究機構の野尻先生に来て頂き、最後の日に私がそれを少しまとめる、ということにしようということになっておりました。ところが、関西学院はこの大震災で大きくやられ、院長としての責任上、神戸を離れられないということで、急遽変えさせて頂いて、宮田先生の代わりには前の神戸大学の学長、今兵庫県と神戸市との復興の為に色々な計画をしている委員会の委員長もしておられる新野先生にご無理をお願い致しました。

先程、須之内ガバナーからR Y L Aの産みの親とお褒めを頂きましたが、産むということは一人で出来ることではなく、四国の方々とご相談をし、ここにおられる深川パストガバナーと相談を致しまして、R Y L Aを産み、育ててまいりました。何故ロータリーがリーダーシップのトレーニングをするのか、それは今、青少年のリーダーというものが或る種のパターンにはまってしまって、世界的視野を持ったり、歴史的視野を持って、物を考えるということをあまりしていないのではないか、色々な問題を抱えている今の時代、若い人達が世界的視野や歴史的な視野を持ってリーダーになってもらわなければならない。青少年のリーダーだけだったらボーイスカウトはボーイスカウト、子供会は子供会で立派な勉強をされていると思います。しかし違った視野でのものを考えるには相当違った形のものを考えなければならないなど深川さんとそんな話をしながら、ロータリーがこのことをやろうじゃないかと決心したのが、17年前で毎年続けてまいりました。ご存じだと思いますが、皆さんがここに来られる往復の旅費や参加費を夫々のロータリークラブが出してくれます。ご存じのように神戸は今回大きな震災に会いました。1月17日でした。その4日後カラカスで国際ロータリーの規定審議会という、ロータリーにとって大変大事な会議が開催されました。その会議の前に国際ロータリーの理事会が開かれておりましたが、丁度その時に未曾有の大震災が日本の神戸という大都市の中で起こったというニュースが伝わりました。震災によって神戸を中心とする所が大きな打撃を受けるならば、世界の今の経済のあり方にも非常に大きな関係がある、なんとかしてそれを助ける為にロータリー

はこれを助けようじゃないかと、515ヶ国の代表者達の集まる規定審議会に決議案を出そうじゃないかと理事会で決まり、規定審議会で、国際ロータリーの会長から真っ先にこの案が提出されました。世界中の方々がそれに賛同して下さいました。早速、計馬ガバナーの所に義援金を受ける窓口を作つて頂き、世界からも日本各地からも義援金を頂き、私達は復興の為に努力をすることを決心致しました。

こんな時でありますから被災を受けたロータリークラブの人達の中から、今災害を受け、困っている人達に沢山のお金が必要な時なのに何故RYLAをして使うのかと批判する声があったということも事実です。ガバナーや青少年委員長、RYLA委員長のご決断で、私達はRYLAだけはやろう。そして長く広い視野で考えた時、こんなに皆が困っている時に、どうすればよいのか、新しい展望を考えていく青年達を育てる方が震災の少し落ち着いた今は大事なのではないかと結論を出しました。だからRYLAをやる以上は他の誰からも将来あの時RYLAをやってよかったと思って頂けるような、またRYLAを受講された皆さんにはこの時期何をおいてもRYLAに参加してよかったと思われるようなものを得て帰つて頂けるようなものにしなければ私達はみんなの笑いものになるという覚悟でこのRYLAを実施したことでもあります。

今度の災害の時には色々なことがありました。例えば外国から駆けつけてくれたお医者さん達が沢山ありました。しかし日本の政府はその申し出に「日本では日本の医師法の免許を持っている人でなければ医療行為は出来ません」と言いました。外国から立派な専門医が来てくださっても、日本の医師法の免許など持っていないません。折角来てくださった人達にお手伝いをして頂くことが出来ませんでした。或いはイギリスからのベテランのレスキュー隊にも、日本の消防署は消防署の許可なしには崩れている建物の中に入つてはいけないということで折角駆けつけて下さったその人達は働くことが出来ませんでした。彼らは日本は援助を受けとらないと怒りました。外国からの援助物資もしかりです。隣人の為にという暖かい気持ちを受け入れないということはどういうことなのでしょうか？それは今まで私達が自分達の国のことばかりを考えて法律を作つて来ました。その法律に縛られ、現場の人達も苦しむという結果になつてしましました。最終的には厚生省や外務省に度々働きかけて、日本のお医者さんがいる場所では外国のお医者さんに働いてもらつてもよいということになりましたので何人かの人達は働いて下さることが出来ました。ロータリーでもタイから来られたお医者さんは日本のロータリアンのお医者さんといっしょに働いて下さることが出来ました。しかしそれはほんの僅かのエピソードに過ぎません。でもそのエピソードの中から何を感じられるかというならば、世界の中の日本になろうとしている時に、日本はもっと世界的な視野で物を考えなければならない時代になったということを痛切に感じるのであります。そして次の時代を考える時に、やはり長い歴史的視野と、世界的に広がりをもつた視野を持った若者が育つていかないと難づかしいということをつくづく感じました。

やはりRYLAをやろう。そしてRYLAで若い諸君達とそのことについて語り合おう、これから時代を背負うには何が大事かということを考えよう。そのことを訴え、今年のRYLAはそういうことに焦点を持ちながら、私達が次の時代、21世紀に生きる為にはどういう視野を持ちながら我々の地域社会に生きていくべきなのか、地域社会を更生させ、創成していくとするならば、若者はどんな役割を持てばよいのかということを皆と語り

合って頂きたいと思います。この4日間に若いあなた方に、こういう社会の中で責任を果たす一人の者として、日本を背負っていくような青年になってほしいという願いを我々が持っているということを分かって帰ってほしいと思います。私は「先生、なんでこんな時にRYLAなんかやるんですか。そんな人達がいるなら1日でも神戸で震災のボランティアとして働いてもらった方が大切ですよ」と言わされました。確かにそれも大切でしょう。神戸の町では崩壊した家々の前に、花束が置かれています。そこで亡くなつた人達への供養の花束です。立派な住宅地では点々と、住宅の密集した地域では重なりあって花束は置かれています。私は昨日もそれを見ながら、どうしたらこういう時代に、新しい社会の為には何を大事にしなければならないのか、またそういう視野で考えた時、新しい社会、国を作る為に何が必要なのかとつくづく考えました。今の時代、どこかが間違っているのではないか、バーツラック・ハベルというチェコの大統領は「諸君、正氣にもどろう」と言いました。「私達はいつの間にか、物が沢山あることや素晴らしい便利さがあることが豊かだと思ってしまっていたけれども、この震災によって物に執着がなくなった」と震災を経験した多くの人は言っています。彼らはまた人間として生きるには何を大切に生きるのか、価値観の変更を迫られているとも言っています。私は皆さんにそのような思いを伝え、これから新しい時代を担う皆さん達が新しい価値観をここから作っていってほしいと願っています。このRYLAが済んだら私は急いで神戸に帰ります。というのは国際ロータリーの本部から世界中のロータリーに援助の協力を求める為に震災の跡を見せてほしいと神戸にこられるからです。私は災害の跡だけを見せるのではなく、ここで若者やロータリアンがどんな仕事をし、どんな風にしてコミュニティを造ろうとしているかということを見せたいと思っています。日本中から色々なロータリアンが駆けつけて避難所で豚汁を作ってくれたりとか、ゲームをしたりとか、歌を唄ったりとか、避難所の人達を激励しておられます。しかし本当はこれからです。カッタとなつた中でやっている仕事と、これから落ち着いて来た時には、本当に復興する為に息長くしなければならない仕事があります。それは唯單なる災害の為のお手伝いではなくて、新しい時代をもう一度創成していくという仕事が必要なのです。そういう長い視野を持つのがこのRYLAセミナーだと考えて頂ければありがたいと思います。4日間という短い間です。先生方の話も聞いて下さい。また人生の先輩であるロータリアン達から何故私がロータリアンになっているのか、何故時間を割いて皆さんと一緒にやっているかということを語ってもらって、そのことから世界というものはまだ見捨てたものじゃない、もっともっと豊かになる為に、もっともっと立派な世界を作る為にはこんな気持ちをもった人達が沢山集まることが大事なんだな、そう思つて頂ければ、この17回のRYLAは成功だと思います。この青年達があるから私達の未来があるのだと自信を持って帰れるようなそういう4日間を皆さんと一緒に過ごしたい、これが私の気持ちでございます。そのことを改めて皆さん方にお願いをし、どうぞその意を含んでください、この4日間のRYLAセミナー自分で受け止めて頂き、新しい時代につないで頂きたいと願っております。

## プログラムのねらいと内容

RYLA セミナープログラムのねらいは、受講生に五つの特色を味わって貰うことにあります。

- 1) 高レベルの講義と討論
- 2) キャビンタイム（親睦の熟成）
- 3) 自由と規律
- 4) 余島の自然
- 5) カウンセラーシステム

恵まれた自然に囲まれたなかで講義・キャビンタイム・思索の時間・バズセッション・フォーラムなどを通して徹底的に学び、語り合い、考えていただきたいと思います。

## セミナースケジュール

	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
3月30日(木)									開講式 オリエンテー ション		セレモニ ィング			キャビンタイム			
3月31日(金)	朝食	今井鎮雄氏 (講 義)	昼食	・植樹 ・レクリエーション (ヨット・テニス・ソフト ボール・アーチェリー、他)				夕食				夕食	キャンプファイヤー	キャビンタイム			
4月1日(土)	朝食	新野幸次郎氏 (講 義)	昼食	思索の時間	バズセッション			夕食				夕食	フォーラム	キャビンタイム			
4月2日(日)	朝食	野尻武敏氏 (講 義)		閉講式 昼食 離島													

## 17回RYLAセミナー講師



ロータリーの責任と若者の責任  
今井 鎮雄



21世紀における青年の役割  
新野 幸次郎



福祉社会とボランティア  
野尻 武敏

## ロータリーの役割と若者の責任

国際ロータリー理事エレクト  
第2680地区パストガバナー  
今井 鎮雄

今、安平先生からご丁寧なご紹介を頂きましたが、人のタイトルとか経歴とかは価値判断の役にたつものではなく、大事なことは私の気持ちとあなた方の気持ちとを通わせて、私が何を君らに言いたいのか、君らが何をそこから受け取ってくれるのかという事だと思います。講義の中で諸君達が「あの事なら大事だな、あの事をもう一度考えてみよう」と探し出してくれる事が大事な事なのです。どうぞこの事を覚えて大切にして下さい。

### ロータリーの歴史と仕組

最初にロータリーの成立の歴史を少しお話します。ロータリーは丁度日露戦争等で世界的にも混乱期にあった1905年（明治38年）アメリカのシカゴに生まれました。当時は自分達が自由に物を考え、自分達の信念に従って生活をしたいという理想を求めてヨーロッパの人達がアメリカに移住して行った時代、メイフラワー号に乗ったピュリタンがボストン近くにニューイングランドを作った時代であります。ロータリーは正に我々と共に丁度20世紀を生き、2005年に100年を迎えます。これを記念して、世界中からボリオを無くそうという運動をしております。言い換えればロータリーは産業社会の生きて来た20世紀を生きて来た事になります。当時シカゴは言葉の違う色々な国の人達が入って来て、モザイクのような町となり、お互いどうしの交流の少ない荒涼とした都市社会がありました。こうした中でポール・ハリスという若い弁護士さんがロータリーを作ったのですが、ポール・ハリスのおじいさん、おばあさんはイギリスからニューイングランドに移住して來た人達です。お父さんは仕事に失敗をし、失業をしてしまいました。それでポールハリスをおじいさんの所に預けられました。ポール・ハリスを育てたおじいさんはイギリスから自分の理想を持ち、自分の夢、自分の信念を持って移住して來た人です。殊にキリスト教の精神の中からこういう国を作りたいと思ってやって來た人達ですから、大変ピュリタンであり、理想主義者がありました。もう一つポール・ハリスにとってよい経験は、ニュイングランドではみんながお互いの事を思い、助け合って生きるという生活をしていた事でした。ポール・ハリスは大学までをニュイングランドで過ごし、弁護士となって一人でシカゴにやって來ました。シカゴの町とニュイングランドでは全く違い、ここでは誰とも本当の友達にはなれない、お互い同士が足を引っ張り合う、厳しい社会でした。急激に発展したシカゴは資本主義社会の先兵として効率「どの位儲けるか」を中心でありましたから人々の心はバラバラで、戦いに負けた者は社会から脱落して行く社会でした。ジーン・アダムスという女性が初めてシカゴにハルハウスというセツルメントを作ったのも1905年であります。同じ頃ドイツのマックスウェーバーが「資本主義の精神とプロテスタンティズムの倫理」という本を書き、資本主義社会が健全に育っていく為には自分達の職業を神様から頂いた天職だと思って、職業を通して他の人に仕えるのが資本主義の精神であると述べました。言い換えれば1905年というのはシカゴの町が経済発展の途上にまっ唯中であります。そんなシカゴに一人でやって來たポール・ハリスは心を

通わせる友達もなく、淋しくて仕方がありませんでした。ニュイングランドのような暖かい地域社会が作れないだろうか、これはポール・ハリスの自分の淋しさから出てくる実感であります。そしてポール・ハリスは心の通い合う仲間を集めたいなと思いました。このモザイクのようにはばらばらで、お互いが足を引っ張り合うような社会の中でお互いが助け合える社会を作ろうと声をかけました。集まった人達が相談をし、みんながお互いに親しくなるにはファーストネームで呼び合うような仲間になろうと作ったのがロータリークラブであります。ポール・ハリスは一つの面白いルールを作りました。それは1人1業、一つの職種からは1人しか仲間に入れない、何故なら同じ職業の人達が入ればその人達は競争するだろう。職業が違っていればそのような形の競争はないだろう、即ち一つの職業からの代表者をとって仲間作りをしょうというのが彼らの考え方でした。それはお互いが自分の職業を通して助け合う、相互扶助でもありました。だから原型だけ見ますと、ロータリーというのは親睦団体であり、お互いがお互いを助け合う相互扶助の団体であったのです。その証拠にドナルド・カーターという男に少しづつ会員の増え始めたロータリークラブの会員にならないかと薦めに行った時、カーターは「ロータリーの会員はいいかもしれないけれども、社会の他の人々に対しては大変エゴイティックな団体じゃないか、そんなエゴイティックな団体に俺は入らない」と入会を断わりました。ポール・ハリスはそれを聞いてびっくりし、「なるほど自分達は友達同士お互いに助け合って、楽しい良いクラブだと思っているけれども、他から見れば集団で助け合っているだけのグループにすぎない、これは僕達の考えが浅かった」と反省をし、僕達は助け合いをコミュニティに広げるようになくてはいけない。お互い同士の助け合いグループから他の人達をも助けていくというグループに発展をしていくわけです。これは大変重要な事だった思います。彼らはまず最初にシカゴの町が今何に困っているかと調べたところ、シカゴの町にはお手洗いがなくて困っていることに気付き、他の団体にも呼びかけて公衆便所を作ったのがロータリーの最初の地域奉仕の仕事であります。もう一つは障害者の為の何かをしょうという事で障害者の為のプログラムが生まれました。今ではそれがリハビリテーション、インターナショナルとして大変立派に育っております。ロータリーが20世紀の始めに、19世紀の変動する経済状況の中で真面目にその時代を考えて来た人達が集まって作った団体であることです。ロータリーというのは最初は自分達の集まる会場を会員のところを持ち回るということからロータリークラブという名前をつけたのです。又彼らは自分達は何を持って回るのかと考えた時、我々は文明を発展させるということをやろうじゃないかと話し合いました。現在ロータリーのマークは歯車になっていますが、最初は馬車の車輪だったのです。ロータリーは文明を運ぶ馬車の車輪だと申しました。だんだん時代がたつに従って馬車の車輪では空回りすることもあるぞということできざぎざをつけました。その内に鍵穴がなければうまく咬み合わないだろうということで鍵穴をつけました。このようにして、ロータリーは文明を運んで来る新しい時代を作っていくという使命を表そうじゃないかという、ロータリー（廻るという意味）という名前とマークが出来上りました。1905年にポール・ハリスが仲間と一緒に作ったロータリーはそれを作らなければならなかった社会的背景があったという事です。そしてその社会的な状況の中でコミュニティに何をしなければならないかという事を考え、当時はまだ青年だったポール・ハリス達は文明の歯車を次の時代に引き継ごうという役割を担ったということを覚えておいて頂きたいと思

ます。コミュニティというのは社会学的な概念ですが、普通は我々お互いが、人間と人間が相互に係わりあいをもっている関係のあつまりをコミュニティと呼んでいます。コミュニティというのは最初は小さな単位でしたが現在世界と関わりを持つ場合はworld communityという言葉が使われるようになり、ロータリーでもworld community serviceが盛んに行われるようになりました。ポール・ハリスがロータリーの偉大な産みの親だと言われるのは、ポール・ハリスが最初は今のロータリーが持っているような哲学や思想を持っていなかったかもしれないけれども、その時代の中の一番大事な社会のニーズであるとか、地域社会に生きている人々の事を大事にしょうということを考えたこと、そしてその時代に生きる人々の苦悩を支え合うような団体として道を示したという所にポール・ハリスの偉大さがあると言うことが出来ます。ロータリーはその哲学や思想を根底に、社会のニーズに従って変わっていかなければなりませんが、その為には若い人達の力が必要です。社会のニーズが変われば変わるほど、又ロータリーの持つプログラムが変われば変わるほどロータリーは若い人で運営されることが必要となって来ます。ロータリーはロータリーの命を生かす為に、組織をいつでもそれに対応出来るようにしておかなければならないと考えました。ロータリーの会長は毎年変わります。プログラムを実施する上で1年というのは短か過ぎるのではないかと思われますが、それ以上に変わることが大切とされています。ガバナーも国際ロータリーの会長も変わります。今年はビル・ハントレー (BILL HUNTLEY) というイギリスの人が国際ロータリーの会長であり、来年(今年の7月から)はハーバート・ブラウン (HERBERT G BROWN) というアメリカ人、次はルイス・ジアイ (LUIS VICENTA GIAY) というアルゼンチンの人というように世界の国の人達がみんな交替で会長になるというのはそういう意味があります。持ち回りで責任を負うという事であります。執行の機関ではなく、決議したり、物を考える理事の任期だけは2年であります。ロータリーは新しいロータリークラブを作る時、その町はどんな職業の人によって構成されているかを調べ、その職業の中から最も人間的に信頼の出来る人を集めてクラブを作ればその人達を通して地域社会がもっといいものになるだろうと会員の資格をそういう形で考えました。ですから夫々の町では職業分類表が全部違います。ロータリーはその地域社会がより良い地域社会になる為に責任を負うような姿勢を作ろうではないかという概念的な努力をいつもしているわけです。ベルギーのブラッセルでは町の中央の広場にギルドの組合の古い建物が残っています。その近くの公園には町の職業の一つ一つを表す銅像がいっぱい建っています。この職業を代表する人達によってブラッセルの最初の市会が出来たのです。このアイディアとロータリーのアイディアは同じだと言えます。この町に役立つ職業の人を入れようというのがロータリーの考え方であります。この地域に必要な職業というのは時代によって変わって来ます。例えば昔はコンピューター等を扱う職業はありませんでした。時代に応じて地域社会の問題を担っていけるようなグループを作ろうというのがロータリーであります。ロータリーの会員がだんだん年をとってくると地域社会の現役ではなくって来ます。その場合も規定は色々ありますが、シニアアクティブという制度があり、シニアアクティブとなった会員の後には若い現役の職業人が新しく入会することが出来ます。こういう風にロータリーの中で会員の層をどんどん若返させていく必要があるという事を我々の課題の一つと考えています。ロータリーは時代に対して敏感に、この時代の問題は何か、どうすればプログラムとしてとり組むことが出来るかと考えているという事を皆さ

んに申し上げておきたいと思います。

## 2 1世紀の展望

では我々の時代はどんな風に今変わりつつあるのか考えてみたいと思います。アービン・トフラーというアメリカの新聞記者であった人で未来学者としても有名であります、彼が未来予測をし、本を沢山書きました。トフラーは1980年に「第3の波」という本を書きました。そして彼は1960年には「アメリカンショック」1970年には「ヒューチャーショック」そして1990年には「パワーシフト」という本を書いています。第3の波では人類がある種の文化を持つようになってから、我々は3回の劇的な大きな変化を迎えたと言っています。彼がいう第1の波というのは農耕文明社会であります。人間が猿から分離したのは500万年前と言われています。人類の祖先はアフリカで生まれました。その頃人間は人類ではあったけれどもまだ人間ではなかった。文化を持たない、まだ動物と同じような生活をしていた人が多かったわけです。彼らは植物の種を植えておけば同じものが出て来るという事を発見し、農耕文明を産み出しました。今から6000年前位からだと言われています。こうして産み出された文化をチグレス、ユーフラテスの文化であるとか、ナイルの文化であるとか、又古代中国は最も古い人間の文化の発祥地の一つでありますが、黄河文明の流域の文化であるとかが言われています。西安にある半坡遺跡は6000年前のものと言われていますが、土城と一緒に黒く焼けた麦の穂が残っており、農耕文明社会があったことを表していると言えます。農耕文明の社会は今でもアジアを始めほとんどのところに続いています。さて17世紀の終わりから19世紀にかけてヨーロッパを中心として色んな機械が発明されました。殊に蒸気機関車のように力を利用するという事が発明され、産業革命といわれる革命が起こりまして、農業を中心とする経済構造から工業や商業を中心とする経済構造に変わる時代がまいりました。おおざっぱに言えば約250年前であり、それを産業社会と申します。この産業社会をより効果のあるものにする為にはどうしたらいいかと考えたものが資本主義社会といわれるものであります。資本と労働力と原材料を集めて物を生産するというシステムを作っています。こうして250年前から始まった資本主義社会は新しいものを次ぎ次ぎ作って発展してまいりました。ところがアービン・トフラーはこういう資本主義社会が突然に第3の波といわれるような新しい変化を遂げたと言っております。トフラーはこれを脱工業化社会と呼んでいます。脱工業化社会というより高度技術社会という方がよいのではないかと言われておりますが普段我々がいう情報化社会であります。人類という長い歴史から考えれば三番目の社会生活の形態の変化であるというのがトフラーの言い方であります。トフラーは1980年にこの本を書いた時「今や我々は新しい時代の波のしぶきを浴びる時代に入って来た。我々の社会がやがて新しい波の中で新しい時代を作っていくであろう」ということを予言的に書いております。案の上この高度技術社会の変化が私達の社会を全く違ったものに変えました。1989年、皆さんの記憶に新しい象徴的な出来事がありました。曾て我々の社会には二つの形態の社会が存在していました。マルクスやエンゲルスが提唱した資本主義社会が持っている矛盾を追及した社会主义社会、そして世界を平和にみんなが平等に生きていけるような社会を作るのだと賛同したのがソビエトを始めとした共産主義社会であります。それに対してみんなの自由を守りながらよりよいものにしていこうと考えた

のが資本主義社会、自由社会であり、その旗頭はアメリカでありました。こうして大きな二つのスーパーパワーが産まれました。産業社会の終わりの頃にはその二つが鋭く対立していた事が当時の社会の構造でありました。ところがこの構造が1989年に現象としては壊れてまいりました。1989年の春に天安門事件が起こりました。中国の中で大勢の自由を求める学生達に対してその頃の中国の政府はこの人達を封殺し、学生達を沢山殺し、弾圧をしました。その頃の中国の政府は共産主義社会によってコントロールしなければ新しい時代は来ないと押さえつけたのです。中国の青年達が反乱を起こしたのが1989年の天安門事件であり、これは後を引いております。その秋に起こったベルリンの壁があります。東西を隔てたベルリンの壁が崩れたと同時に私達には思いもよらない事が起こりました。あれだけスーパーパワーと言われた共産主義社会があっという間に崩れてしまったのです。ソビエト連邦共和国というものがなくなって、生まれたのはロシヤと言う国であります。ソビエトは瓦解しました。いったい瓦解した理由は何なのか、いろんな事が言えると思いますが、一つの理由はそれ迄ソビエトと自由主義国家の間には鉄のカーテンが引かれていました。言い換ればそこは目隠しをして、中で何が行われているのか判らない社会だったということです。鉄のカーテンの中の人達はその社会の中でしか自分達の判断をすることが出来なかったのです。今の北朝鮮民主主義共和国も鉄のカーテンを引いていて、なるべく資本主義社会の状況を写さないようにしょうという努力をしてきました。ソビエトも同じです。ところがこの鉄のカーテンを壊したものは何か、それは人工衛星であります。どんどん私達の社会が変わってまいりますと、コンピューター、衛星放送は全ての状況を全ての人に知らせるようになります。ソビエトはソビエトで韓国は韓国で独自性を保っていたものが、情報が進んで来るに従って、鉄のカーテンを引く事が出来なくなったり。ソビエトの人達も西欧諸国の繁栄を知る事が出来るようになりました。世界の色んな共通の知識を持つ事が出来るようになった時、今までのようない様な状況の中で生きなければならない時代に突入したという事実は高度技術社会、情報化社会と言われる社会に入ったということです。ですから長い人類の歴史から見ますと、1989から1993年位までの間は大きな変化の時代であり、この事実をもう一度考え直さなければならぬ時代であります。言い換れば君達が住んでいる時代というのはこういう時代です。高度技術社会というのはどんな社会になるのか、何がいいのか、何が悪いのか判らないわけです。しかし、社会がこうして変わって来た時に我々の持っていた価値の体系だと、我々が大事だと思っているものは何かということです。色々な事がみんな変わって来る時代になりました。同時に世界的にあらゆるものがあらゆるものがもう自分の国だけでは済まなくなってしまった。普遍的な人間という事を考えないとならなくなってしまったという事です。これが21世紀に向かって私達が考えておかなければならぬ大きな問題なのです。しかもその21世紀に私達はもうロータリーの歯車のように担っていくわけにはいかないのです。それを担っていくのは若者でないとならない。しかしロータリーはそう言う時代を予測しながら新しい時代に於ける人間の幸福を考えた時に何を追及していくかを課題として考えています。ロータリーは世界を普遍的な人間が住んでいるコミュニティだと考え、そこではどういう事に価値があって、どういう事が私達の役割かと考え始めたのです。基本的にロータリーが文明を運ぶ歯車として移行していくならば、必ずしも今の人

材では十分ではないし、必ずしも今の考え方だけでは十分でないという時代に入っています。ロータリーにとってこの歯車をどういう形で次ぎに回すのかこれが私達の問題になって来ているという事です。最近N H K のテレビで40代の社長さんばかりを集めた番組がありました。或る有名なコンピューターのソフトを作っている会社では、社員の平均年齢が20代だそうでそのリーダーとなっている人達は子供の頃からのファミコンボーイだったということです。羽生さんという青年は将棋の名人として有名ですが、彼の思考構造はかっての名人と全く違っているということです。これは考えると、若者が持たなければならぬ能力とか、訓練とかいうものが今までの時代とは全く質的に違ったものであると言えましょう。そして自ずから今までと質的に違った社会の中でそれを支えなければならぬのです。

### ロータリーの役割

さてこんな時代に尚且つロータリーがサービスをすることが可能でしょうか、又その意義をもう一度考えてみたいと思います。ピーター・ドラッガーという経済学者が書いた「ポスト資本主義社会」という本が数年前に出版されました。この本には「産業社会がようやく終わりかけている。後に続く社会の中ではどんな問題が起るだろうか、産業社会の中で組み上げた社会の構造や知識等は役に立つのだろうか」と彼はこの本の中で分析しています。例えはその中には政治の問題などが取り上げられています。今政治は国益を大事に考えていいっているけれども、政治は国家中心の方向でいいのかどうか、考えるべきだと述べています。日本の国連常任理事国問題でも、今度の震災に於ける外国からの医療従事者の受け入れ問題にしても色々な問題がありました。日本は新しい社会を想定していないシステムの中に存在しているとドラッガーは言っています。ドラッガーは政治の問題についても教育の問題についても基本的に思考のベースを考えなければならないと言っています。また変化に伴って、人間性が崩壊して来るでしょう。非人間化、人間が歯車の一部となって私達が本当の人間とは何かという事を忘れてしまうような状況が沢山起こって来ます。この状況に対応する事が新しい時代の一番大きな問題だと言います。全てがコンピューターで出来るようになった時代、私達はますます人間としての命とか、人間性の問題とかを大切に考えなくなって来ます。1990年にポートランド、オレゴンで開かれたロータリーの国際大会で二つの劇的な現象が起こりました。それは今まで社会主义国と言っていた東欧諸国でロータリーが復活したことです。モスクワやポーランドの人達もメンバーとしてこの大会に参加しました。今まで資本主義社会の人達ばかりしかいなかった国際大会の中で新しい体制社会の人達が入ってきました。みんなは手に手にロシヤの旗やチエッコ旗を持って入場しました。その時会長がやっと世界全体の平和について考える事が出来るようになったと言い、みんなは感激に涙を流して旗をふりました。もう一つはバーツラック・ハベルというチェッコの大統領がロータリーの国際理解賞をもらいました。国際理解賞というのは1981年に初めて創設されたものでその第1回の受賞者は日本の岩村昇さんというネパールで働いていたお医者さんであります。その後ローマ法王も受賞されました。ハベルはソビエトの弾圧を受けながらチェッコスロバキヤが大変苦難な中で尚且つチェッコは自由を得たい、人間はみんな自由を得るべきだ。だから決して共産主義の平等という名の下に圧政をひかれる事には反対だ。我々は小さくても自由を得ようじゃ

ないか、自分達は自分達の言葉で喋ろうではないかと宣言しました。バーツラック・ハベルは政治家ではありませんでした。一劇作家にすぎなかった彼はチェッコスロバキヤが解放されると同時にみんなの要望で大統領になりました。バーツラック・ハベルは世界のロータリーからあなたこそロータリーが理想とするところの世界を一つにする、世界を平和にする為の貢献があった人の一人だと世界理解賞をもらったのです。その彼は「諸君正気に戻ろう」というのです。「私達の社会は人間を忘れて物が豊かになることだと、機械が素晴らしい事だとかだけを追及して、どこかに人間を忘れてしまっているじゃないか。人間とはいったいなんなのだろう。人間が滅びても機械を作る事が進歩なのか、人間が自然を壊し、壊した自然によって我々が太陽光線で焼き尽くされ、死んでしまうような世界を作るのが進歩なのか。諸君正気に戻ろう。人間として豊かに生きるという事はどういう事か考えよう。自然と人間との関係とはどういうものか考えよう」といったのがバーツラック・ハベルであります。彼が言った「諸君正気に戻ろう」と言った言葉は今や世界の人達の或る意味の合言葉となりました。経済の世界においても学者の中では大分前から人間として大きくなるという事はどういう事なのか、私達はその事を大事に考えようと言われております。エーリッヒ・フロムという学者は“ To have or to be ”「持つ事か、在ることか」という本を書きました。そして私達がものを持つ事ではなく、人間としてどうある事が大事かという事を問い合わせました。又シュマッハーというイギリスの経済学者は“ Small is beautiful ”という事を申しました。この言葉は流行しまして、色々な言葉に置き換えて使われましたが、それは物が豊かになる事がいい事ではなく、自分の身にあったもので十分だという事に考えを変えようという事の問い合わせをしているわけですがこう言う事を言っている人は沢山おります。ドランガーは「人間の非人間化を回復する事こそ、私達の最も大きな仕事である」と言う事を申しました。そしてこの非人間化を回復する時にはあらゆる組織はみんな自分達のあり方を考え直そうと言っております。彼はN P Oという概念を持ちだしました。これはNGOよりもう少し広く“ Non profit organization ” 利益を追及しない団体、これを大事にしようという事です。追及しないという事はその人達の必要な経費を出さないという事ではないのです。利益を追及する事を目的としないで自分のやっている仕事を人間の為にサービスするという団体にしよう。病院というのはお金儲けの為に作っているのでしょうか？ そうではなく、病院を作るのは病人を救う為です。基本的には利益を追及する所ではなく、人の命を救う所です。学校はいったいどうでしょうか？ 学校はお金儲けの為に作るのではなく、若い人達を教育する為に作るのです。それならば学校は利益の追及団体ではないはずです。本来的に経費は必要かもしれないけれど、目的は若者を教育する所であるから、これは Non profit organization であります。こういう風にして Non profit organization をだんだん広げていくのです。ではそもそも病院が病院として成り立って、人々の命を救ったり、痛みから解放する為に働くならば、その為に必要なものは何んだろうか？ 一つは専門職です。その専門職というのは医者と看護婦でしょう。お医者さんと看護婦さん以外は専門職以外でも出来るかもしれない。専門職以外の人達が加わって患者さんの病を癒すという目的を達成させるのはそれはボランティアです。アメリカの病院では沢山のボランティアがおられます。そのボランティアの人達はお薬を配ったり、患者さんの話相手になったり、専門職以外の仕事をしておられます。ボランティアの協力によって病院は経費が安くなり、利益の追及をしなくて

も済むようになります。そして利益を追及している病院や学校が失敗をして、ボランティアの協力で利益を追及しない所の方が社会的に安定しているという事を指摘したのがピーター・ドラッガーであります。又ドラッガーはその中で二つの事を言っております。サービスというものは二つ必要で、その一つは救済的サービス、もう一つは社会的サービスであります。彼は救済的サービスは変化の時代においては大きな役割を果たさなければならぬけれども、本質的に大事なものは非人間化していく新しい時代の中で、もう一度人間が人間らしさをどこかで取り戻していくという事の為に人間的なごく当たり前のサービスこそがもっと大事になって来るに違いないと言っています。

### 青年の役割

最後に青年の問題を少し考えてみましょう。ロータリーというのは外から見た時にはどこにもここにある団体の一つに過ぎないと思います。そればかりではなく、お金持ちの人達が集まって昼飯を食べ楽しんでいる団体と思っている方も多いと思います。そうじゃないですよと言っても実際は心掛けの問題で何ともいいようがありません。しかし私はここでロータリーとはその発生の段階から時代と一緒に時代の歯車を回しながら、人間としての立場からこの事を言い続けて来た事を申し上げたいと思います。資本主義社会は経済とか、効率とかが大きくクローズアップされて、人間そのものは今までの社会の中ではどこかに押しやられていました。しかし新しい時代、情報化社会になればなるほど人間の視点、世界的な視野で物を考える事が大事になってきました。従ってロータリーの役割も内実的には大変大事なものになりました。しかもそれらを遂行していく責任は若者でなくてはならないのです。ロータリーの中にも若者のグループを沢山作りまして、仲間作りをしようと致しました。ローターアクトであるとか、村落共同隊であるとか、ロータリーボランティアーズであるとか、インターラクトであるとか、ロータリー財団の学友、或いはRYLAというようにロータリーの意識を持った若い人々を支え、発展させていくという事を協力をしながらやっているわけです。あなた方はロータリーから見れば地域社会の最も優れた指導者であります。その皆さんに勉強をし、新しい世界をロータリーの側から見てくださいと言おうとしている事はお分かりになったと思います。

次に青年にどういう責任があるのだろうかと言う事を考えて頂きたいと思います。既に私は時代の認識をどうとらえるかという事。あなた方で作っていく新しい時代ですから青年達は敏感でないといけないよと言う事等を申しました。「赤信号みんなで渡れば恐くない」と言う考えではなくて、「赤信号か、何故止まらなければならないのか」と判断をするという事が時代を認識するということです。難しい事を言っているのではなく、自分で判断をせよと言っているだけの事です。飽食の時代、何もしなくても食べる事が出来、着る事が出来、フリーターというのが流行っているようですが、定職につかなくても結構小遣いがある。大学を卒業して勇んで社会に出て行くのではなくて、成績はいいけれども社会に出て行く自信がなく、わざと留年をする。モラトリアと言われる現象、精神医学的に見るとそのような精神構造は必ずしも健全ではないという現象、これには社会的、精神的背景があるのでという発表を日本の精神医学者が学会で発表し、評判になりました。しかし飽食の時代の無気力とか、無責任さというものがそういうまでも続くわけにはいかない。その事がよく分かったのは今度の地震であります。私達が物によって生きていたものがすっ

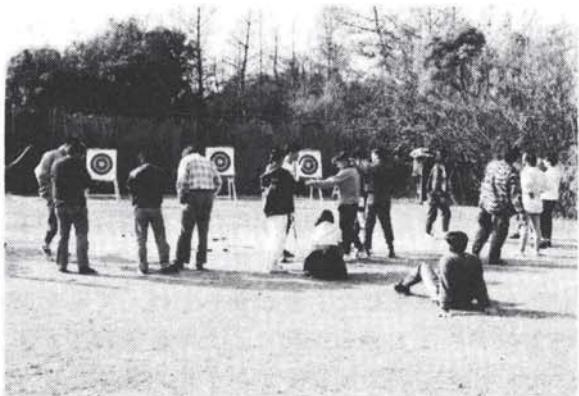
かり崩れてしまいました。人間にとって一番大事なものは物ではなかったという事がよく分かりました。物よりももっと大事な人間性というものをどうしたら私達は自分の心に取り戻せるかという事を深く考える事がもっと大事だと分かりました。「正気にもどろう」というハベルの言葉はそれを表す時代認識であり、その経験を生かすという事が若者に問われている役割の一つであり、責任の一つであります。君達はその事を十分に答えた時代認識をしてほしいというが一つであります。

もう一つは私達は国際的視野の中で物を判断し、行動しているでしょうか？私達はどうしても私達の文化のルールの中や価値観の中で物を判断してしまいます。しかしそう言う事は出来なくなつて來たという事であります。作家の大江健三郎さんがノーベル文学賞の受賞記念講演で「あいまいな日本の私」という題で講演を致しました。26年前ノーベル文学賞を受賞した川端康成さんの記念講演は「美しい日本の私」という題であります。その題の中にはのが入っています。日本と私ではなく、日本の私であります。川端康成さんの「美しい日本の私」というのはわびとかさびとか、日本の古い伝統的な文化の中にある或る種のもの、それは虚無という物ではなく、その中にある人間の実存というものの中で、私は私の文学を成長させましたというのが川端康成さんの言葉であります。これは伝統的価値の中で培われた私の文学でございますという形で記念講演をしたのです。ところが大江健三郎さんは全く違った形で「あいまいな日本の私」という題で記念講演をしましたが、彼はあいまいという言葉を *ambiguous*と言っております。両義性とか双存性と言う意味を持っていますが、こちらもいい、あちらもいい、その間に私はいつも引きさかれているという事です。それがあいまいなのです。日本は歴史的には資本主義的近代社会の中に突入しました。西欧近代社会の中に身を投じた日本というものは西欧近代を具現する近代社会の中の国なのだ、と日本を捨てた、脱走したように思うけれども、必ずしもそうではなく、アジアにありながら西欧化をしていく事の矛盾はアジアが持っている問題性と西欧社会の持っている問題性とを日本は共存させながら、その間で二つに裂かれている。そういう中で日本という国のあいまいさがあるのだという事であります。彼は日本の近代文化の非世界性。日本が持っている太鼓、能、茶道、などは確かに伝統的な文化ではありますが、西欧近代とは違う、しかしもしも近代的な解釈をするならばそれはどうなるのか？日本的な解釈をするならそれはどうなるのか？この二つの双存の中で私達はその時その時引き裂かれているという状況を生み出している。私達はこの新しい日本の中でどう生きていかなければならぬかという事を問いかける事が私の文学の中心になったのです。というのが彼の記念講演でした。私達がどの立場をとるかという事で悩み苦しみながら生きているところに日本の現状があるのでという事を言っております。両義性の中で日本がもし西欧の論理の中で政策をたてるとするならばどうなるのだろうか？西欧の論理に立って物を考えるか、或いはまた不戦の誓いをした論理の中で世界を考えるのか、いったん崩壊した産業社会の論理、近代化の廃墟の中で普遍的人間、人間とは何かという事を問いかけながら日本人は日本人として生きて來た。この普遍的人間という事を目指した私達のある意味の祈りというものは空しくなってしまうのだ。私達はいつも人間よりも物を大切にするのではなくて、人間そのものを大事にしよう、そして人間こそが大事なんだという事を世界に訴えようとした時代にふさわしい生き様が大事であって、そういう形で世界に貢献するという事が日本の文学なのだと思っているというのです。あいまいな日本の私はそ

いうあいまいな中にあってもなおかつ人間の普遍性という事を大事にしながらやろうとしているのです。私はこのメッセージがあなた方にお願いをしたいメッセージの一つであります。それは何故か？先程から私はくどいように言ってきました「時代は変化しますよ。それは誰もあなた方に教える事は出来ないですよ」と。あなた方が真っ先に進んでいるのです。トップで走ろうとするあなた方がどちらに走ったらいいかをあなたが判断しなくてはならない。あなた方が判断をしながら新しい時代を作っていく時の基準は何か？世界の平和であるとか、世界の理解とかを考えた時に、日本人がそういう普遍的な人間性というものを夢に描きながら伝統であるとか、時代の変化をどうとらえるかとか、国際的な変化の中でどうなのかという事を考える。これはあなた方の責任として今あるのですよと皆さん方に訴えたいのです。これは誰も今まで担った事がないことです。

最後のお願いはあなた方はこういう時代の中でボランティアという事をどう認識しているかという事です。ボランティアという事が大変流行ってまいりました。猫もしゃくしもボランティアであります。新聞を見ると、この震災で90%の人がボランティアをしたと書いてありました。しかし本当にボランティアとはなんなのだろうか？イベントに来てくれたり、炊き出しのご飯を食べさせてくれたのもボランティアでした。子供達の事をじっくり考えてくれるのもボランティアです。私達はみんなボランティアになろうと言っているけれども、ボランティアの本質は自分達の収入になるかならないか等は全然関係がなく、私達が明日を目指して作る世界の為に、お互いが協力しあって、自分の労力とか、時間とか、自分が出来るものを自分自らが捧げる事であります。或る人は往復の旅費を貰っているからボランティアでないとは言えません。或る人は必要な経費だけを貰って時間と知恵だけは出さして下さいという場合もあります。ボランティアというものは個人がどのように判断するかによって決まります。私はフェスピックやユニバーシヤードのような国際的なイベントのボランティアの責任者をした事があります。ユニバーシヤードの時にも例えば通訳のボランティアが沢山来て頂きました。それと同時にボランティアばかりでは心もとないというので通訳の仕事として来て貰った人もありました。ところがボランティアとして来て下さった方のほうは素晴らしい語学力であった場合が多かったのです。そして時間が来るとお金を貰っている方の通訳さんはさっさと帰るのですがボランティアの方は外国人の人達の問題が解決するまでずっと付き合って下さった事が多かったです。或る人は「神戸市はずるい。ボランティアという名のもとに労働力を安く使った」と言いました。その時私が言ったのは、ボランティアというのは自分が決意して自分がやることであって、時間も自分で決めます。これは自由です。しかしその自由の中で自分が約束したならば、どんなにお金を積まれても出来ないほどの責任を彼らが負おうとしているのがボランティアの責任です。ボランティアというのは自分が自分に対して或る目的の為に責任をもってそれを担おうと言う事です。ロータリーが voluntary association だと言われる理由はどんなにお金を積んでも出来ない、仕事ではない、だけど世界の平和と世界の人達の理解と一人一人の人間が人間として生きていくような住みよい社会を作る為に我々が何ができるかという事を考えながら一緒にやっていこうという団体、そういう所にロータリーの本質はあるのです。数も必要ですし、お金も必要です。その事を担っていく事の為には若者がいなければ駄目なんです。自ら明日の世界を新しく築く人がいなければならないのです。ロータリーが役割を果たそうとする時、その為には若者が自分の責任を担ってロータリー

と一緒に動いてくれる事が本当に願わしい事です。私達はその意味で地震の事があっても何があってもRYLAを必死になって実施して諸君達に訴え、どうぞ諸君達にぜひボランティアとして責任を負って私達の世界を明日に向かって動かす歯車の中で最も大事な役割を青年として担って下さいとお願いをしたいと思います。



## 21世紀における青年の役割

神戸大学元学長・名誉教授

新野 幸次郎

21世紀における青年の役割ということで、まず最初に21世紀が20世紀に比べてどんな時代になるのかという事を考えてみたいと思います。20世紀というのは日本にとっても世界にとっても大変な時代でございました。ご承知のように1905年（明治39年）に日露戦争が終わっておりました。この日露戦争で日本は当時の帝政ロシヤに勝ったという形になった為に何か世界の一流国になったかのように錯覚をすることになります。本当はアメリカやイギリスの援助によって戦争を止め、形としては勝った形で納まったのですが、実際には勝ったというような内容ではなかったのです。少なくとも当時大きな国であったロシヤと戦争をして、しかもアジアの一番端の小さな国が勝った形をとったということで変な軍国主義的な発想が国民の中に芽生える一つのきっかけを作る事になりました。そういう動きの中で1914年には第1次世界大戦が起こりました。1917年にはその過程の中でロシヤに革命が起こりました。実際にソ連邦が出来上がったのは1922年であり、その時初めて共産党が組織を作り、スターリンが書記長に納まりました。それからしばらくして1923年に関東大震災が起こりました。少なくとも世界的な大戦争が起つたり、大震災があったり、そして今まで曾てなかったソ連邦という社会主義の態勢が地球の上に出来上がりました。そして資本主義と社会主義との争いのきっかけが出来上がって来たのです。

ところが1920年代の最後、1929年に大恐慌が起こりました。恐慌そのものは1825年に資本主義経済の中で初めて起こっていますが、この恐慌の今までの経済の動きと違っている点は資本主義経済になっておりますから、物を沢山作り過ぎた為にみんなが食っていけなくなるという現象が起こって来ました。経済学ではこれをCrisisと言って、過剰生産が起こり、裏返せば作っても売れない、過剰生産、過小消費となるとものです。普通は例えば災害やなにかで物が作られなくなり、足りなくなつて、恐慌が起こるのですが、沢山作られ過ぎて暮らせなくなるという現象が資本主義経済で1825年に初めて出て来るようになりました。ところがこの時期の恐慌はそれほどたいしたものではなく、大量の失業者を産みだしたり倒産を産みだしたりはしませんでした。1929年の恐慌にはドイツの場合ですと1/3位の人が失業し、アメリカでも25%の人が失業する事になりました。その影響が昭和4年に日本にも訪れ、東北地方に集中的に現れた農業恐慌と一緒にになって農家の人は荷車に沢山の農産物を積んでいかないと工業生産物が買えないという貧乏な状態になつてしましました。そして子供達を売らないと食つていけないような生活が始まりました。“これは世界的にも曾てない現象で、歴史に残るものとなりました。

そんな中で1931年には満州事変が起こりました。それから日中戦争、エチオピア戦争その他ヨーロッパにも戦争が起こり、1945年に太平洋戦争が終わるまで戦争連続の歴史でございました。私が学生になりましたのが、丁度昭和18年でございますから、私などは小学校に行った頃からずっと戦争の中で生きて来たという事になります。こういう歴史を考えてみるとそれは戦争と大恐慌と大震災の時代だと言つていいと思います。そして戦争が終り、日本は敗戦からかろうじて立ち直りを致しまして、1960年代になりますといわゆる高度成長を経験するようになります。

その過程を象徴的に示しているのは、世界の中に於ける G N P の日本の G N P と世界の G N P との関係です。

日本の G N P の世界の G N P の中の比率は

1960・3%, 1970・6%, 1980・10%, 1990・12%~13%, 1993・14%~15%,  
となり、これに対してアメリカはどれくらい世界の中の G N P を持っているかをみると、  
1950・約 50%, 1960・33%, 1990・23%, となっています。アメリカの人口は  
倍でありますから1990年には名目上アメリカと日本が並ぶようになっておりますが、実質  
日本の実生活の状態では何分の 1 かの生活しか出来ておりません。そういう意味で我が国  
は急激に成長してまいりました。しかしそれは私共の生活を本当の意味で幸せにしたとは  
必ずしも言えない状態でございました。

私共はその途中でいわゆる石油ショックを経験する事になりました。ローマクラブとい  
うのがそれと関連をして、我々が経済の成長をさせていく上で資源の不足という問題を本  
格的に考えなくてはいけないと提言を致しました。地球というのは一つの宇宙船に乗った  
ようなもので、自分達だけの生活をよくしょうとしてもエネルギーとか資源の不足という  
問題があって、どうしても制約が出て来るのだと言う事になってまいりました。

1980年代に入りますと、その後にはご存じのようにベルリンの壁の崩壊の問題が起  
こり、曾て資本主義に対して成立をし、だんだんと大きな勢力になっておりました社会主義  
の国が崩壊を致しました。先ずソ連邦が崩壊をし、いくつかの連邦だけが共同体としてだ  
けしか存立をしなくなり、内部では激しい対立が起こるようになりました。それだけでは  
なく、曾て社会主義として市場経済とは独立をした経済の仕組みを持っていた国々が市場  
経済の中に帰っていくという仕組みを作り上げるようになってまいりました。社会主義は  
もうイデオロギーの対立の問題から姿を消して来るような段階が始まってまいりました。

その中で我が国は非常に大きな役割を持つようになり、アメリカでも M I T 、マサチュ  
ーセッツ工科大学の分析である "Made in America" という報告書が出まして、どうして  
アメリカの経済がうまくいかなくなったのか、それを日本との比較で検討するというよう  
な研究発表が行われ、非常な衝撃を与えるようになりました。それをきっかけに今度はア  
メリカが日本のどこを克服すれば再びアメリカは元の状態に帰れるかという研究が進み、  
いわゆるソイエンジニアリングという事が行われるようになりました。この行動自身はも  
ともと日本の企業経営の研究を始め、その良い所を全部アメリカの経済の中に取り入れ  
ていこうという試みをしたわけです。そしてそれに成功して現在でも日本に比べると一步  
先にいった、特にマルチメディアという最先端の科学の領域では絶対に負けない状態に到  
達したわけです。いくつかの自動車の分野においてもこれは克服出来るようになって來た  
という自信が語られるようになって來ました。我が国の方は逆に 3 年間に亘る不況が続  
くようになりました。

1 月には阪神、淡路地震が起り大変な混乱が生じてまいりました。そんな中でオウム  
真理教のような悲劇が起り、警察庁長官が狙撃を受けるという事態を起こしてまいりま  
した。あのオウム真理教の事件というのはニューヨークタイムズの社説を見ておりましても  
分かるように、これは全ての国にとって大変なショックでございました。ああいうものがもし各  
国で使われるようになったら大変な危機を夫々の社会に及ぼす事になるというの  
で、地震以上に深刻な注目の対象になっているわけです。地震の時もニューヨークタイム

ズの論説に出ておりましたが、マグネチュード7.2とか、7.5とかの地震は世界中であちこちに起こっているわけです。とくにこの多くが第3世界の国々で起こっているケースが多いのです。300万人の人が集中的に住んでいる所でこの程度の地震が起きたというのは世界で初めてあります。ニューヨークタイムズの社説で非常に印象に残っておりますのは、第3世界で起きた地震をどういう具合にそれに対応していくかという事については、これらの国々がそれを克服出来る科学技術のレベルも低い、人材の養成も不十分である、それを克服する為の資源もないという事を考えなければならない。その点神戸を中心とする今回の地震というのは人材、科学技術を利用する、資源の三つの点での条件が全部揃っている。今回の地震を日本がどう克服していくかという事は世界についての一つのモデルを提供する事になる。だから我々はそれを見つめようという問題提起が出ていた事でした。

その様に大変な変化がこの20世紀の間には起こってまいりました。しかもそれらの問題点は全てこれから21世紀にかけての大きな反省、或いは教訓を与える事態でございます。その点21世紀はいったいどんな時代になるだろうかと考えてみると、これは大変興味のある事でございますけれども、地震の予測と同じように未来学者達の議論を見ておりましても、未来の予測というのは大変困難でございます。昨日も阪大の前の総長だった熊谷さん、前の京大の総長だった西島さんと私の3人に色々な方々を加えた関西サイエンスフォーラムというのが大阪で開かれ、熊谷さんが地震学者ほど気の毒な方はない。これを救う為に、あらゆる動植物の動きを総合的にまとめるようにしてみたらどうかという提案をされました。と言いますのは動物というのは自分自身の安全性の為に人間が持っていない機能を働かせている種族である。そういうものがどんな変化を起こして来るかという情報をずっと集め、又電磁波や予測可能な把握の材料を集めデーターの蓄積をしておくと、少なくとも数時間前か、数日前かには予知が出来る事が可能になるのじゃないかという様な話でございました。同様にして21世紀がどんな事になるのか、完全に予測するのは難しい事だと思います。従って21世紀における青年の役割という議論はまやかしである面を持っています。しかし、次のような事だけは間違ひなく起りそうです。

その一つは人口でございます。世界の人口は急激に今増加しています。中国のようにその為に食料の生産能力とか、資源の必要能力を越える危険性があるというので1人っ子政策を人為的に強くとっている国もございます。それでも去年1年だけで1500万人増えています。11億8500万人というのが昨年暮れの中国政府の発表でございます。国際的な機関の予測によると、65億程の世界人口があるのですが、2050年迄には完全に100億を越えるようになるだろと言われております。100億を越えた人口を保存出来るような資源が本当にあるのだろうか、食料だけでも本当にそれだけの食料供給が出来るのだろうかと疑問を呈する人もないではございません。殊に中国の最近の経済発展と関連して、この数年間で九州全域位の大きさの農地が全部つぶれ、工場用地に変わっているというようなことが起こっていっているのは事実でございます。そうするとそうな所の農地は農産物が作れなくなって人口だけは以前として増えている。どうするのか？日本の食料不足なら供給する可能性はまだ考えられるけれども、12億の人の食料供給を中国の内部で出来なくなったら時に、いったいどこで供給するメカニズムが農業生産上可能になるのか、この問題について深刻に考えていかなくてはならないという状態が発展し

ていることは間違いないの事実です。その100億の人口の内、二つのグループに分けて考えてみると、一方の先進国の方は高齢化が猛烈に進んでいます。我が国の如きは2025年には世界で最高の高齢化率になると言われています。即ち4人に1人、25%の人が65歳以上になるわけです。他方途上国では人口の増加で非常に沢山の若い層が増えていく、但し若い層が増えていくといいながら、中国のように1人っ子政策をとっていますと、間もなく日本以上の高齢化社会が成立する恐れがあります。というのは1人の子供に対して両親がおり、その又両親を1人っ子が支えなければならぬ。私も中国政府から頼まれて中国经济をどうするかという日中双方の研究会に何回か行きましたが、中国には小皇帝という言葉があります。1人っ子しかおりませんから、その子供をいかに大切に育てるかというのが両親と祖父母の最高の課題になるわけです。ですからなけなしの金を与え、月に何度かはレストランに連れて行って上座に座らせ接待をする。学校に行かせるのに、おじいさんが自転車に乗せ、カバンもおじいさんが持つて門の所でカバンを渡すという。こういう生活を続けていたら子供はいったいどういう事になるのか、中国の人は心配をしています。

第2番目には世界の経済の中で先進国に比べて、発展途上国或いは急速に経済成長をしている国との間に非常に顕著な格差が発生するようになる。先程言いましたように日本も1960年代から90何年迄の間に大変な成長を致しました。同じ事が中国を始め東南アジアの国々を中心にして起こっているわけです。IMFだと、世界銀行が色々な統計を出しています。つい昨年の暮れにもロンドンエコノミストという週刊誌で特集が組まれ、いわゆるグローバルエコノミイという事についての分析をしております。その中でも世界の先進国OECDに加盟をしている24ヶ国の成長率は過去20年間において2.3%位しか増えなかった。今後10年間位はもっとそれよりも低い比率になるだろう。ところが東アジア、中国と韓国、香港、台湾等の経済成長率は過去20年間に亘って7.4%位、今後の10年間も7.5%位いくのじゃないか、という事になりますと先進国と言われるOECDの国の2.5倍位の成長率で発展をしていくだろうと予測されているわけです。ワールドバンクなどは21世紀の或る時期になったら世界の中でGDPの一番大きな国は人口の問題もありますが、中国になるだろうと予測をしました。人口が日本に比べて現在10倍、アメリカに比べても6倍ですから、1人当たりが1/6或るいは1/10になっても、もう完全に総額でアメリカと日本に匹敵するようになるわけです。同じような事はシンガポールだとか、マレーシアだとかの国々でも自覚をされるようになりました。という事は曾ての先進国に代わってこれらの国々が急速に成長し、21世紀には世界のGDPの主要な割合を占めるような国々に代わっていく可能性がある事も否定出来ないと思います。最近ダニエル・ベルさんが或る雑誌に書いているのを読みましたら、そう簡単にはいかないのじゃないかと一部警戒論を述べておられますが、少なくともそういう現象は起こるだろう、もしそうだとしたら21世紀には環境問題が深刻になり、エネルギーだとか、食料の不足の問題が登場するようになるのではないかという事が言われています。中国がいい例でございますが、中国は石炭は沢山あるのですが、石油はあまりないので。だと致しますと、石炭を焼いて必要エネルギーを充足すると猛烈なCO<sub>2</sub>の発生が起こって来るようになる。それは酸性雨を急激に増大する事になります。中国の方から日本の方に向かって雲は動いてまいりますから、日本を襲って来るようになる事を覚悟しなければならないと思います。こ

ういう現象は夫々の所に及ぼすようになりますて、よほどの進歩をもたらし、代替エネルギーの開発とか、或いはガス化による環境汚染の軽減というような事がはかられない限りは地球上の環境汚染の問題が深刻な課題になるだろうと思います。そういう事を先進国から言い始めると先進国は曾て環境汚染を自分の利益の為にどんどんやっておいて、これから所得水準、生活水準を上げていかなくてはならない途上国に対して抑圧をする、工業生産の発展、エネルギーの消費を規制するという形になるからけしからんという議論が出て来ました。途上国の経済発展を押さえようとするなら先進国の成長率をうんとダウンして途上国の生活水準向上の為にエネルギー消費を認めるというシステムを考えもらわないと、不公平且つ不公正であるという議論が展開される事は明白であります。

それに関連して、globalization というのがこれから問題になるだろうと思います。先程申しましたロンドン・エコノミストの特集でも興味のある事が取り上げられています。社会主義国といわれた国々、中国、ソ連、東欧諸国等にいた人達の人口を合計致しますと 17 億の人達がおられ、その人口の内でどれだけの人達が労働力として動くようになるかを計算しますと、大雑把にいって半分と考えて頂きたいと思います。仮に半分とすれば 8 億、その人々が市場経済の労働力として資本主義経済の労働者と競争するようになります。そこで賃金についての調査をロンドンエコノミストが致しました。それによると 1 時間当たり、ドイツ \$25. 韓国 \$5. 中国 \$0.50. U S A \$16. 日本 \$20. メキシコ \$2.40 で、中国はドイツの 1/50 という事になります。日本は大体 \$20 をこえていると考えられます。そうすると生産費の中での賃金額の大きさというのは製品ごとに非常に違っているわけです。繊維とか履物は大体 3 割を越しています。だから労働集約的な人手が沢山いる産業だといえます。自動車で約 15%、カラーテレビで約 5%、ですから労働集約的で賃金の高いものを作るにおいては賃金が 1/50 なんて事になりますと、非常に安くなります。労働者を沢山使う必要がある、そして賃金が安い国というのはそういう産業では非常に有利になっていくという事が分かります。実際に日本でもテレビは生産費の中で賃金の大きさが 5% 位のところだといわれておりますが、それでも今多くのテレビの中には MADE IN CHINA となっているものもあります。扇風機などは完全にそうです。という事はグローバリゼーションが進行すると世界中に壁がなくなり、賃金が安くて或る技術を持っている国であれば多くの産業分野でその国が中心になって物を作るようになる。先進国はそういう国々に工場を持っていくか、或いは金を貸すかという様な形で産業を空洞化していくかなくてはならないような状態が出てくる可能性がある事を頭においておかなければなりません。そういう中で先進国が生き残ろうと思ったら、技術を発展させて、労働力を少しでも作れるようにするか、もしくは労働力の安さでは競争出来ないという事にして、全く新しいものを作る仕組みを考えるか、創意工夫を發揮して途上国の人々が真似の出来ない製品の分野、産業を作り出していくかどちらかしか生き残れないという問題が出てきます。実際にアメリカでは、エンジニアリング、これはコンピューターを徹底的に使って人員削減をしております。おかげでアメリカの製造業の就業者数というのは大幅に減少しました。そしてコンピューター事業と関係して、情報産業が急速に発達して、流通業、信用保険業、金融業等の分野におきましても、コンピューターが大幅に使われるようになるという仕組みが発達して新しい産業が続々と発展をするようになって来ているわけです。そういう仕組みを先進国の中で考えていかなくてはならないかも知れない。製品を製造する事と新しい物を

創造する事とは別個になって来ました。これから先進国の人達は物を作るのではなくて、新しい製品の作り方を工夫したり、発見をしたりという事が必要となって来る時代が進んで来ます。

そういう事を可能にしようとすると、資源を必要とする時には例えは昨年亡くなりましたか日本にも度々来られたアメリカのコロラド大学のケネス・E・ボールディングさんという方が、経済学で物を作る時に生産の3要素として、土地・労働・資本をあげ、生産額を増やそうと思えばこの三つの要素のどれかを増やせばいいと考えてきた。しかしこれは本当の意味の生産の3要素とは違うのじゃないか、とボールディングさんは言い出しました。この3要素の内土地を持っているのは地主であり、労働力は労働者、資本は資本家が持っています。この三つの要素を持つ人々に出来たものをどう分ければいいかと議論するには夫々がこれに貢献した事を計算をして分けるのが最も便利だといえます。しかしそく考えると、これは本当の生産理論では分配を本當化するための理論ではないかというわけです。彼によりますと、本当の生産の3要素はエネルギー・原材料（資材）・ノウハウであると言っています。日本ではエネルギーは0に近く、原料或いは資材も殆どが輸入であるにもかかわらず、世界のG N P の16%を占めるのは何故なのかと言うと日本人が過去において蓄積したノウハウのおかげであるとしか言いようがありません。そう考えてみると、これからノウハウをいかに蓄積し、創造していくか。教育と物を考えていく力とをどれだけ重要にして来ているかという時代が来つつあるかと言うことが我々に示されているように思います。

21世紀というのはそう意味で大きな今までと違った変化を我々に要求して来ている。ソ連の崩壊、社会主義態勢の崩壊が正に象徴していますように、曾ての社会に対するイデオロギーが大きな指導力を持てなくなり、日本には民族問題というのはそれほど自覚されていませんが、ソ連の社会或いは中近東の社会が象徴的であるように多民族から構成されている国々におきましては民族の問題が浮かび上がって来るようになります。それと関連して宗教が非常に重要な役割を持つようになります。そういう中で国家のウエイトが減少していくに従って、今度は欧州同盟のような形の国家の枠組みを越えた結合の態勢というものをいかにして作っていくかが重要な課題となります。それが出来れば出来るほどベルギーなどでも言語の違いによって国を分けたらどうだろうかというような動きが強くなっています。まだアジアについては多民族でしかも残念ながらリーダーシップをとれる国がないという事もあって、A P E CとマーチイルさんのおっしゃるE A E Cのような二つの組織とが完全に確立されるような状態になっておりません。お互いにしのぎを削っておりますが、そういう問題が21世紀にわたって強くなるだろうと言う事が出来ます。そういう動きを見ていますと、これからどんな事が21世紀にかけて問題になるだろうか、転換期が私共の前に現れていくと考えなくてはならないと思います。

曾ての社会主義が崩壊をしたという事で社会の構成というのがどんな形になるのかという事について、色々な議論が社会学、経済学の中でもございます。ボールディングさんの理論を材料に考えてみるとシステムとして社会を見た場合、交換（exchange）の体系、統合（integration）の体系、脅迫（threat）の体系の三つのシステムが整って初めて社会が構成出来るようになっております。統合と言うのはお互いの地位と役割を認め合って思いやりを働かす事を言います。例えば脅迫の程度が高く、交換の程度が低く、しかも統合

の段階も低いというような状態で成立している、人ととの関係、社会の状態が成立するとなれば、もう逃げ出したい状態だと言えます。出来るだけ統合の段階が高く、交換の程度も高く、脅迫の程度の低いような社会が理想的だと言えます。ここで今日お話ししようと思う青年の役割という事でも、これは大変示唆的な事を示していると思います。曾てカール・マルクスは「労働者が3日でも労働することを止めたら、その社会はたにまちにして飢えてしまうようになるだろう」と申しましたが、ボランティアの活動についてアメリカで出版された本の中に「もしボランティアの活動が一日でも止まつたら、その社会は崩壊するだろう」と書いてあります。確かに社会全体でもボランティアの活動が止まる事があればその社会は大変なピンチになります。一番端的のが家庭の中で、家庭が成立する為には親子の間でボランタリーにお互いが思いやりを持って働いている活動がふんだんに取り入れられている。金銭の交換だけでするならばたちどころにやれなくなる。そういうようにボランタリーの活動を少しでも止めたら家庭は或いは社会は崩壊をしてしまう事を自覚をさせる一つの言い方だらうと思います。

そこでボランタリーな活動を考えていくのに私共は一つ重要な問題を考えておかなければならない。今こうして交換とか、統合とか脅迫とかのお話をしましたが、残念な事に交換で解決をしていくというのは確かに限られた資源を最も効率的に消費をしていく、作っていく事に関しては非常に良いシステムです。その点無料というのがどれだけ難しい問題を沢山含むようになるかという事をこの震災でも経験せざるを得ませんでした。と言うのはどれだけ使ってもきりがないわけです。従ってどこで止めるかというのを判断する材料は自分自身にはないのです。もしあるとしたら社会全体の為に自分はこれを消費しているのはこれでよいのかと言う自立心のようなもの、社会全体に対する思いやり、気持ちの問題で制限をしなければならず、その点経済の法則が働いてお金がかゝっていますと、高いからやめようとか資産能力に応じて判断出来ます。この災害でNTTさんが無料の電話を解放しました。ところがそうなると外国の取引の電話が1時間も続いたり限度がなくなります。無料というのは非常に難しい問題を人間に与えます。そういう意味では交換というのは良い働きをしていると言う事が言えます。もっとも市場経済というのはいくつかの限界を持っています。例えば富及び所得の不平等、或いは不公平な分配。これは永遠に残ってしまいます。貧富の差というものは市場経済の上でなくならない下手をすると拡大していく可能性があります。

第2番目に公共、公園だとか、災害の為の準備だとか、警察や消防署だとか、軍隊だとか所謂公共でないといけないものがあります。そういうものはもし市場経済にまかしても利益の対象になりません。したがって、公共で整備するしかありません。この弊害が今度の震災でも起こって参りました。水が足りないというような事は個人ではどうしょうもありません。それを商売にしても千年に一度、五百年に一度の災害の為に成り立つものではありません。これはやはり公でやってゆかないといけないという問題があります。

第3番目には規模の経済性が上げられます。規模の経済性と言うのは、大規模にやればやるほどコストは下がるというようなものは独占にしておかないといけなくなる。ところが独占化するという事になると、自分自身の利益の為にだけ独占性を活用する事になります。値段でも平気で上げるような事も考えられます。

第4番目には外部性という問題で公害の様なもの、その企業が起こしている悪い影響、

公害という結果の責任をその企業は分担しようとしない。また最近の不況がそうであります、不況や景気変動というような事が市場経済の中で起こって来ます。不況や景気変動はほとんど避ける事が出来ない、こういう問題を直そうとすれば政府がしなければなりません。その財源確保のために色々なこと、例えば相続税を取るとか、消費税をとるとかをやらないと、こういう問題は解決出来ないというのが、実際の市場経済の仕組みです。この交換体系というのは非常に良い面を持っているのですがこういう大事な問題について解決する事が出来ないです。この第1番目の問題として社会保障の問題が上げられます。このことからも判るように、今度の震災でも一番苦労されているのは国民健康保険の加入者の方、商売をしているとか、年金生活者の方です。この人たちは、どこかに勤務をして所得の分配をうけているわけではありませんから、国がやって上げないとなりません。そうすると政府がやれば全部かたがつくのかと言えばそうはいかないのです。政府の限界というものがあります。国がする様になると、個人は何もしないで、政府のお金が手に入るような手続きだけ考えて暮らしていこうとするような危険性もあります。言い換えれば贈収賄とか政治家を買収するとか、便利なようにする手段が広がっていく様になります。こう言うのは政治の欠陥、政府の欠陥であると言えます。しかも政府は社会保障の為にとは言っても完全に面倒をみててくれるわけではありません。どうしても公と私との間にギャップが出て来ます。その隙間を埋めるものが社会の中で発展をしないと、その社会は生き生きと生き伸びる事が出来ない状態になります。色々な事が言えますが、公と私との間に共生という問題を埋めていかないとうまくいかないようになってまいります。

今度の地震では公と私との間の穴を埋めるものがどれだけ大切な役割を果たすかを嫌というほど知らされました。共生、一緒にやっていきましょうという穴を埋めるものが必要になって来ました。ボランティア活動がこれほど大きな役割を果たしたのは日本の社会、日本の経済の中でなかったのではないかと思います。実際に今迄でも、兵庫県ではフェスティックを始めとしてボランティアの活動がずいぶん組み込まれており、ボランティアの役割の大切さは何度か経験したのですが、この地震の時ほどボランティアの活動という事が大きな意味を持っていることは無かったと思います。その大きな必要性があった為に私はボランティアの限界のようなものを、そして共の世界を作り上げていく為にはどんな事が必要かという事を自覚させる事になりました。

第1に色々な活動自体を公的に調整していく人がボランティア活動の中におられない、本当の役には立たないという事を経験から理解する事になりました。

第2にはその為に行政との効果的な調整がされないと、人と人との間のつなぎが出来ないという事も知らされるようになってまいりました。

第3には町作りというのが非常に大事な課題となり、今後ますます重要な領域になっていくわけですが、その時にスタッフになるボランティア、リーダーになるボランティアの人々がどれだけいらっしゃるかという事が重要な課題となって来ました。単にボランティアの数が多いだけでは駄目なので、リーダーとなるボランティアの人が大切だという事が分かってきました。

第4には労力提供のボランティアも勿論大切なですが、今まで申し上げた三つの機能を満たして頂ける方と並んで、専門職のボランティアというのがいかに大切か、医療とか、看護とか、その他色々な問題についての専門職、専門的知識のあるボランティアがいらっ

しゃらないと、今度のようなピンチを切り抜ける事は出来ないという事が分かってまいりました。もしそうだとすると、個人のボランティアをどれだけ集められるかということだけではなくて、訓練されたボランティアの養成という事が大量に必要だと言うことも嫌というほど知らされる事になりました。私共「ひょうご創生研究会」でも専門の方を交え色々議論を致しまして、ボランティアカレッジのようなものを作り、育てる事が大事ではないかという意見が出てまいりました。もしそうだとすると兵庫県下に4年制大学が30、短大が28程ございますので、そういう所に呼びかけて単位がとれて、今兵庫県が実施している洋上大学のような形で例えばボランティア大学の2ヶ月間のコースをやってみてはどうか、そして現地の社会福祉の団体や大学とも提携をして、色々な交流をしてみる。ボランティア学の単位をあげるという試みにしてみてはどうかと申しております。これから本当の意味で各大学においても養成という事について訓練を必要とするようになって来ているのではないかと思います。もしそういう事を本当に発展させようと思いつますとボランティアの活動というのは個人活動だけでなく、組織的にやれるような仕組みを国全体で考えていかなくてはなりません。None Profit Organization、すなわち、N.P.O.と言っておりますが、社会全体に非営利組織というようなものを強めていかないといけない事を痛感致しました。アメリカが一番先端的でございますが、いくつかの方法が考えられます。

第1に行政が市民のボランティア活動の必要性を十分認識を致しまして、助成をしていくという事の必要性。

第2番目に市民と地域とがその重要性を認識し、公共団体がそれをやるだけではなく、積極的に養成するような努力が必要となってまいります。その点では地方自治の問題を改めて考え直す必要があると思います。アメリカはご存じのようにピュリタンが自分達の手で新しい町を作っていました歴史を持っておりますから、住民が主体であり、権利としての住民参加がその当初から確立されておりました。一方的に外から与えられたものではなく、自分達が開拓し、作り上げた町をどう治めるかは自分達が決めたらいいという仕組みが出来上がっていきました。いくつかの村や町が出来ると、その連絡調整の為に郡を作ろうということで始まったものが州となり、州としての規則が出来てまいりますが、基本は自分達の作り上げた村や、町、州を自分達で守っていく事は当たり前の事となっております。従って本来自治体が事をやる時に出来ない事、自治体では不十分な事が起こると、自分達だけでやろうじゃないかというボランティアの組織がアメリカでは作りあげられていきました。行政もそれを支援をしますし、住民自身が作り上げていこうという意識を持っています。

その点我が国では明治4年に廃藩置県という事がございましたが、私は兵庫県の場合について勉強してみましたら、その全ての藩を県にしてあるわけです。そして中央政府が出来ておりますから、県にはその色んな下請けの仕事をやらすようにして、知事は全部中央政府が任命いたします。ですからもともとアメリカのものとは全然違います。7月に廃藩置県が行われたのですが、11月にはそれをいくつかに合併するわけです。皆の意志でやるわけではなく、中央政府の官僚が勝手に考え、4ヶ月後には新しい県の合併を行い、終に明治11年には一方的な命令で兵庫県が出来上がるわけです。初代の知事に伊藤博文が就任致しました。全ての地方行政の成立というのは上から命じられたものであったのです。戦後の憲法の二つの目玉というのは「平和」と「地方自治」であります。けれども地

方自治のどこが変わったかというと、知事が官選ではなくて、県民の選挙によって選ばれる、それが最も大きい変革がありました。しかし仕事においては3割自治と言われるようになに國が決めたお金に従って県政を行っていくという、3割位しか自分自身で判断出来る余地はないという形になってしまいました。こういう仕組みですから公と私との間の穴をうめしていくという仕事については国民が自発的に勢力を整えて或いは組織を作つて対応するという事が非常に遅れて来たわけです。少しでも前向きとなつたのは最近の事といってよいと思います。そういう意味でアメリカ型の地方自治がもし出来ていれば違つた形のボランティア活動の体系が出来上がつたかもしれないのですが、それが出来ていない、ましてや企業市民というような考え方には日本には成立しておりませんでした。ごく最近になって企業市民という言い方も言われるようになり、積極的に二つの面で企業市民としての役割を果たすようになりました。一つは企業の職員をボランティア活動に出席をさせるようになり、それを休暇として扱わない、出勤として扱い給料を払つてそういう活動をさせるという事。もう一つは色々な助成基金を作りまして、ボランティア活動を援助する。これはまだ本格的とはいえませんが、文化的、科学的、或いは福祉の点でそういう活動が出来るようになってまいりました。これはN. P. O. に対して地方公共団体及び政府が助成をし、そして資金的な援助もしていくという事をこれから大々的に増大をしていかないと、今のボランティア活動の限界のようなものを克服出来ない。幸いにしてつい先日新聞にも出ましたが、今度の震災を契機としてコープこうべがボランティアの活動を助成する為に将来的には10億円の基金を一応作つていこうという事で、コープこうべ自身が5億円の準備をし、残りの5億円を全国の生協にお願いし、組織としてのボランティアの活動助成をしていく態勢をお作りになるようです。本当を言うと政府がこの際基金の設定をし、これからN. P. O. の態勢作りという事を考えてもらわなくてはいけない段階まで來たというように思います。2年前から神戸市に依頼されてN. P. O. の研究を私の研究所で致しました。全国のN. P. O. の組織の調査に市役所から十何人の職員の人が私の所に来られてもうすぐまとめられるところまで來ていたのですが、残念ながらこの地震でこれに当たっていた優秀な人達が全部震災対策に走り回つていて今はまとめられませんが、そういう中で分かりました事は日本にも非常に沢山のN. P. O. が出来つゝあると言うことです。

見事な活動をやっておられる所もあるのですが例えば兵庫県下のボランティア活動の動向調査報告書というのが2、3年前に出ております。或る兵庫県下のボランティア活動をおられる所のメンバーの年齢構成を2度にわたつて調査されておりますが、それは圧倒的に主婦の方であり前回では62.5%が主婦の方ありました。1992年でも56.2%という事になっております。従つて日本のボランティア活動と言われているのは年齢層とか、性別で分けていきますと、主婦の方々が家事の傍らやって頂くという形でしか残念ながら成立していないという事が分かります。会社員が2番目で9.2%、定年退職者が7.7%、大学生が0.9%、短大生0.5%、高校以下の子供達が10%という数字となっております。これは特徴的な状態であつて、本当にこれから社会の構成の私と公との間の穴埋めの役割を担おうと思えば主婦の方々だけによって埋められていくような活動ではいけないのでござります。そういう意味では今回の地震は新しいきっかけを作つてくれました。非常に沢山の若い人達がこれに参加をしてくださいました。そういう意味ではボランティア活動の新しい段階

がスタートしたと言えるのではないかと思います。残念ながら実際にはまだどういう年齢、どこの学校、どういう形でボランティアの活動をやってもらえたのかという全体の数字がまだまとめられておりません。

こういう関係で見てもアメリカ等と比べて我が国はいかに情報機能が不足をしていたかという事を今回の地震では痛感せざるを得ませんでした。例えば避難所一つを取り上げても、毎日毎日その構成員は変わっていきます。同じ避難所でも年齢層、家庭の事情、家族構成、財産のあり方、収入のあり方、被害の程度等々によってして欲しい事がみんな違っている筈です。しかもその違いが毎日どんどん変化していきます。必要なものという認識を神戸市或いは区役所でもちゃんと把握出来ていないと満足してもらえる対策というのは取れない。その所が欠けているわけです。その為に若い或いは経験のあるボランティアの方々が自動的に判断をして、色々なまくばりをやっていらっしゃいます。総合調整のような事がなければ本当の意味でのボランティアになりにくい面があり、連絡調整も出来にくい面があります。つい最近も或る学長さんから創生研究会のようなものがあるなら、県下の全大学、短大の学長さん達に集まってもらって、ボランティアの講座のあり方、活動のあり方について協議をしてもらうようにしてほしいという要望が来ております。それでも今回の地震によりまして、若い人達が新しくボランティアのうねりの中に大量に参加されたという事は大変ありがたい貴重な経験だったと思います。

その中で私が思い出しますのは B. Russel が1928年に出した教育論という本であります。それには教育の目的というので四つの事をあげています。

1. 活力 教育は何よりもバイタリティを育てなければならない。
2. 勇気 勇気のある人間を育てなければならない。
3. 感受性のある人間を作らなくてはならない。
4. 知性を育てなければならない。

この中で一番大切なのは先ず活力だというのです。健康である事が大前提として教育の根本にする。残りの三つの問題についてはどんな人間でも危機に当たってはそれを救おうとする気持ちになるだろう。それは当然の感受性である。それを見た時に防いで上げようとする事が必要で、それが出来ないような人間作り、教育というのは教育の名に値しないのではないかというのがラッセルの一つのポイントです。もう一つ非常に大事なのは悪い事が起こる原因というのは色々な理由がある。もしそうだとしたらその理由を知的に分析をして、原因を突き詰めて原因を排除する為に勇気をもって活力を働かして立ち向かうような人間作りをしないといけないのではないかというのが彼の意見です。考えてみると、世の中にはこういう事をやれる感受性を持って又知性を働かせて原因を分析し、勇気を持ってそれの打開に走る力というのは青年ほど強いものはない事は明白です。だからこそ例えば中国は文化大革命で青少年を使おうとしたのです。ナチスも青少年を使って或る目的を実現していこうとしたわけです。唯下手をするとこういう事態からも分かりますように青少年は活力は強く、勇気や行動力はあるのですが、感情的にだけ走ってしまうと兵隊だけに使われてしまうという危険性があるという事は歴史の証明する通りであります。大学紛争の時に私もまだ40代の初めてファイトはあったのですが、実際激しい大学紛争の中で広報委員長として立ち向かって感じましたのはあの運動をリードしている諸君というのはいまでもなんとか頑張って暮らしているのです。リーダーと言うのはやはり有能な所があ

りまして、あの問題が過ぎた後もそれなりに働いているわけです。ですけれども兵隊として使われていた諸君というのはどこに行ったのか分からぬような形になってしまっています。今の宗教活動の中にもそういう形の動き方があるのではないかと類推をするのです。大事な事は本当にボランティアとしてそして活力のあるうねりを出せる人というのはラッセルが言う知性が大前提であります。目の前にある事に反応していくのではなくて、どうして起こって来るのかとその原因を徹底的に追及して、その原因を排除していく、そういう事を認識して、勇気を出してエネルギーを働かせられる人達にならないとこれから先の予測出来ない変化が起こる 21 世紀の社会でのリーダーにはなれないし、ボランティアの働きを尽くせないのじゃないかと思います。しかし幸にして今度の災害でこの力を大学生の諸君、或いは青年の諸君が獲得しつつあるのではないかと痛感をしております。経済学者として有名であり私の親しい友人である加藤寛さんは慶應大学の新しい学部を作ります時に「学生諸君というのは未来からの留学生である。その留学生の諸君に役に立つような新しい大学作り、学部作りをしないと現在の日本は発展出来ないのじゃないか」と良いアピールをしておられましたが、考えてみるとそういう力を發揮して新しいボランティアの組織を作ったり活動を育成出来る能力を持っているのは青年の皆さん方ではないかと思います。考えてみると戦後の復興というのも青年がやり遂げたわけです。戦争が終わりました時に戦時中に戦争に協力をしていた人々は占領軍の命令で公職からは追放されました。そこでどんな事が起きたかと言いますと、例えば経済同友会というのも 30 代から 40 代の人達が幹事になって活動を始めるようになり、このような若返りが全ての組織でなされました。終戦直後全国各地で青年団運動が活発に動くようになりました。そして戦前我々が教わって来た事は全部結果が間違いであったのではないかと身近に反省し、それを元にして新しい戦後の日本を作るのは私達だけなのだという気持ちでやって来たわけです。言い換えるとそういう動きの中で戦後が始まっていったわけです。

今大震災を契機に致しまして新しい発想でボランティアの問題のあり方を考える時代がやってまいりました。先日も国に対して復興の委員会からお願いをしたのですが、今は阪神地域の我々も国にお願いをするというだけではいけないのであって、自分達はこうしたい、こういう社会を作りたい、阪神地域を作りたいという構想を持ち、ところが自分の力では出来ないこれこれの条件があるからそれを国の方でやって頂きたいとお話をしたわけであります。奥尻の場合はあれだけの人口でありますから、一戸あたり 1200 万円を越える義援金をお渡しする事が出来たわけです。普賢岳の時にも政府はあまり何もしませんでしたけれどもそれに近い金額を一戸当たりお渡しする事が出来たのです。ところが 10 数万の人が家を失って避難所に最大時には 30 万人を越える人がおられるこの阪神地域で 1200 万円なり 1000 万円の義援金を差し上げるような義援金額を国全体で集めるというのは不可能であります。せいぜい今実施されているように全壊もしくは半壊、全焼、半焼した家に対して 10 万円、世帯主が死亡された時には 500 万円、家族が亡くなられた時には 200 万円というような事で復旧出来ない状態についてそういう事が言われています。ところが復旧出来るけれどもお金がなかったり、色々な事で復旧出来ませんという、ローンを借りたり、色々な条件を持った人達に対してはそういう事は出来ないのです。兵庫県も赤字財政をほぼ 5 割増しにして 2 兆 8 千億円位の予算を組んで対応しているのですが、ストックの損壊だけで 10 兆を越えているのです。そうすると両方の予算を全部使っ

ても2年ちょっとかかるわけです。それだけではなく、毎月毎月大体以前に比べると、2割ないし3割の損失が出ております。それは埋め合わせのしようがありません。復旧が長引けば長引くほど負担になってまいります。これをカバーする事は出来ない状態になって来ております。こういう事態になって来ますと国の力でカバーして貰えるような仕組みを考えて貰わないと残念ながらボランティアの力だけでは回復出来ないと言われています。国の方でもそこまでは突っ込んで援助出来ない状況にございます。その中で生き残り、発展をしていこうとしますと、1993年の国際ロータリーの会長のテーマに“Real Happiness is Helping Others”というのがございましたが、誠の幸せは他の人を助けて上げる事だというようなスローガンを全国民が持って頂いて、そして政治家がそれを代表して国家予算の使い方を考えてもらわないとこの阪神地域の復興というのはそう簡単に出来ないだろうと思います。しかも阪神地域が復興出来ないだけならばまだしも、この種の地震は確かに何百年に一度とか千年に一度しか起こらないと言われますが、しかし東京で起こったら、名古屋で起こったら或いは横浜で起こったら大阪で起こったらいつてどういう事になるのかという時に国が何を出来るか、国民が何が出来るかという事の一つのいいモデルになるのじゃないかと思うのです。それは先程申しました統合、自分を規制をして他の人を助けて上げよう、自分達の役割を認め合おうという思いやりの気持ちが政治家の中にも国全体の中にも満ち溢れないと今回のような震災は解決出来ないと思います。神戸市でも県でもこれから社会作りをしようとする時、「安心・活力・魅力」の三つのスローガンを掲げて、ここに住んでよかったという喜びを感じられる魅力のある町作りをしましょうと復興計画を作っております。しかしこういうものを考えようとすると、私共は二つの事を本気で考えてみないといけないと痛感しております。一つは家の問題、或いは土地の問題、これを契機に一度根本的に哲学を考え直してみる必要があると思います。例えば今度十数万戸の家が潰れました。避難所にはまだ8万近い人々がいらっしゃいます。それらの方々に仮設住宅でもいいから新しい住宅を提供し、その内復興住宅を作りましょうというようにしているのですが、考えてみると1941年に神戸市の家の実に9割近く、89%は借家だったのです。借家の段階でございましたら、夫々収入に応じて変わっていけたのです。もし地震等で潰れたとしても月給で払っている家賃だけですから、今大きな問題となっているローンの問題というのではないのです。更に調べてみておりますと、今家は所帯数を遥かに上まわっております。全国的に見ると余っているわけです。ところがその家の35%だけが今から20年以上前に作られた家で、残りの65%は20年未満のものです。今度地震で潰れた家の多くは20年以上前に作られたものです。その事と関連して、その事はいかに今古い家が容赦なく潰されているか、立て替えられているか、という事を示しています。これは又別の問題を私共に投げかけています。今やそういう家は不動産では無くなっているので、何代も何代の人が住んで歴史に残るような、或いは保存されていいような家は無くなっていると見られます。出来て20年、耐久消費財としての家が多くなって来ている。そういう住宅街、建物というものは文化的な匂いあまりしなくなって来る。どこに行っても同じような建物だとしたら何世代も続いている家とは全然違います。もし私共がこれから本当に魅力のある町、本当に安心して住める町作りをしょうと思ったら、何世代か住めるような家にして、文化的な香りの強い家作りを考えるような仕組みでないとこれからいけないのではないか。これから私共は土地を唯一の財産として考える仕組み

を根本的に反省をしていかなくてはいけないのではないかと思います。ベルギーの方がよくおっしゃいますが、「ベルギーでは土地を財産として持とうとは思いません。200年程の間に3回位他所の国の人々に侵略されました。土地は占領されたら全然財産の保有形態としての意味がありません。だから土地を財産として持とうとする気は我々にはございません」そこでその問題を我々も考えてみる必要があります。戦前の89%が借家であった神戸市では土地は殆ど地主さんが持つており、個人で持つている比率はほんの僅かでした。戦後の農地解放と戦後の生活水準が上がっていく中で、土地を財産の主要な手段に考えるという仕組みが出来上がって来て、我々の全所帯の6割が家を持ち、なにがしか自分の土地を持つという構造に変わってしまいました。震災があった後に新しい町作りをしようという事になり、唯一のかけがえのない財産として土地を買ったのに減ぶ率10%とか20%とかいって取り上げられるというのはなんという事だと言って住民の反対が起つてまいります。考えてみると、土地は人間が作ったものではございません。丁度地震が自然の力で起つたのと同じように自然が私共に与えてくれたものです。この際だんだんと公のものに返して私共はその上で生活をエンジョイ出来る事を新しい工夫でやって頂かなくてはならないと思います。その為に一部の学者から提案が出ておりますが、もう亡くなつた方ですが、ヘンリー・フォードという学者が以前に土地国有論という話をしていた事があります。彼は社会主義者ではなく、資本主義の経済の中で土地というものは自分で作ったものではないから、国有にしてその上で色々な事を考へるべきだという議論を展開しました。それを今すぐやるという事は不可能ですが、土地債券を発行する、或いは土地証券を発行して買い上げていく。我々はその土地の債権の配当を受ける、転売が出来る。又提供した土地について建つてある建物或いは土地を優先的に利用させてもらう優先権だけ認めてもらう様な債券もしくは証券の仕組みを考へていく事をこれから工夫したら今度のような震災が起つりましても別個の対応の仕方が出来る可能性が出てくるでしょう。これからは社会主義という意味ではなく、個人の利益と関係して公と私との調整を図つていく仕組みを工夫しないといけないのでないかとしみじみと考えさせられます。こういう事をやっていけるのは若い人達でなければ出来ません。なげなしの金をつぎ込んだ年寄りにはなかなか決断が出来ない事です。これから新しい日本を作つていく皆さん方が土地を唯一のものとして考へるやり方はおかしいのではないかという事を根本に据えながら新しい国作り、町作りを考へいかなくてはいけないのじゃないかと思います。土地を財産として考へている所というのは極端にいうと日本だけみたいなものです。例えば中国でも革命が何回も起つりましたから金銀財宝を自分の家に隠しておくというのが財産保有の一つです。東南アジアの国々はみんな大体そうだと言われています。その極端なケースはユダヤ人です。ユダヤ人の人達はどこに生活しておりますても、反ユダヤの考え方で危険にさらされています。生き残った時に持ち逃げ出来るものはみんな取り上げられてしまいます。生きている限りは誰も奪えないものを身につけようとします。それは頭の訓練、頭脳につぎ込もうとします。覚えた知識や技術は生きている限りは誰にも絶対奪えない、最高の財産保有形態です。私共はあまりにも幸せ過ぎて侵略の危機を考えずに過ごしました。戦後の経済生活の発展の仕方がそうであるように、銀行も融資の基本は土地です。担保というものは土地だけ、この仕組みを根本的に変える事が今必要となつています。そういう仕組み作りをこれから考へいかなければならないと思います。もう一つは今回の騒動の中でなんといっ

ても一番大切なのは物ではなくて、人間だという認識であります。例えば道路一つを取り上げてみても今は大きな道も小さな道も駐車がしっぱなしとなっている状態です。社会がちゃんと生きていこうと思えばそれを生かすようにする為に長い経験、法律、罰則その他を繰り返してルールが出来上がります。そのルールがあるおかげで信号もあって、それに従って動いていれば目的地に到達出来るという仕組みが出来てきました。その為にルールに従っていこうとする自制心や思いやりの気持ちが出来て来ます。それがこの度の地震を契機にこれだけ混乱が起こると、自分だけがなんとかしようという気持ちが起きて道路という道路にはずっと駐車がされ、その結果メインの43号線、国道2号線は通行を制限され、よけい他の所が混雑しました。しかしそれを誰も非難出来ないような現実を見ておりますと、社会的なルールにしても、色々な行動の仕方にしても結局人間が作り上げ人間が決定するものです。人間の行動が乱れ始めますととてもない乱れが進行してまいります。そしてこれから新しく立ち直りましょうという運動が起こって来た時も自分の利益中心に皆さんがおっしゃり始めるとそれは前に進まない。前に進まなくする為には独裁国家ならやれる可能性があります。だけど民主主義の社会の中で本当に前進をしていくというなら話し合いをして、多少の犠牲を我慢してそして前に進めるような仕組みを考えていこうという能力が必要です。これは非常に難しい事であり、しかもこれは非常に大事な点であります。従来私共は教育が進むにつれ、なんでもマニュアルに従って行動する事には慣れています。言うなら暗記型の人間になっております。皆がそうしているからそれと同じ事をしていきましょう。マニュアルに従って行動して行きましょう。今回そのマニュアルを守る事が出来なくなり、同時に今までのマニュアルでは役立たなくなってきた。大地震や何か事件が起こりますとマニュアルというのはそういうのを想定していませんから何の役にもたたないという事になります。そうすると何が必要かというと自分個人としての独創性というか、自分自身で考え、自分で判断をして自分で新しいマニュアル作りを工夫していくという人間が必要になって来ます。その最も良い例が流行しておりますコンピューターです。コンピューターの機械そのものはマニュアル通りです。ところがコンピューターに何をのせるか、どういうソフトを開発していくか、これはマニュアル型、暗記型の人間では新しい事は作れません。コンピューターのソフトのユニークなものを作り上げようとしたら組織の中では変わっていると言われるような人でないと、なかなか新しいものが作れないと言われています。と言う事はボランティアの活動も今必要なマニュアルを完全にマスターした人間である事も必要ですが、マニュアルでは役にたたない事態がどんどん、どんどん発展をするようになって来ますと、新しい独創性を持った個性の強いボランティア、そしてそれを使えるようなリーダーの養成が必要になって来ます。そういう事をやれる年代というのは皆さんしかいません。ロータリーは長年に亘ってRYLAやローターアクトの活動を通じてリーダーを養成して来ています。この大切な資源というのは他にはない組織の一つです。これに見合うような組織をこれからどんどん作っていこうとする動きは強くなって来ると思いますが、その先駆的な組織としてもRYLAのこういう活動が発展をしていく事を希望せざるを得ません。いくら考えてもそういう意味では結局何があろうともラッセルが言うような人作りが出来てこそその人達が困難を克服していく事が出来るのではないかと思うのです。これからも皆さん方夫々が色々な課題に迫られると思いますが、今回のRYLAでの学習を夫々消化して頂きまして立派なリーダーになって頂くことをお願いをして私の話を終わらせて頂きます。

## 福祉社会とボランティア

神戸大学名誉教授  
野尻 武敏

阪神の大震災で色々目立ったものがございます。その中の一つはボランティアで、日本で初めて本格的にと言ってよいのでしょうか、社会的に注目されたという事は既にご承知の通りです。私は日本にこれからボランティアの体系化が始まるとすると、これが出发点になるのじゃないかとさえ思っております。その意味でボランティア元年が1995年になると/or/言ってもいいのじゃないかと思っております。そういうのが頭にあったものですから福祉という問題とボランティアという問題をこの際私なりにまとめておこう、そしてそれを皆さんにお話をして何かの参考にして頂こうかと思っております。

### 1. 福祉国家から福祉社会へ

福祉と言いますと多分皆さんは小学校以来何度も福祉国家という事を聞いて来られたと思います。第2次大戦後非常に広く言われて来たものです。福祉国家というのはイギリスで言われ始め、その源はイギリスの社会主义、フェビアン・ソサイアティだと言われております。フェビアン協会のいわゆるフェビアン社会主义は、「振り籠から墓場まで」つまり生まれて死ぬまで全部社会的に保障されるのが良い国であるという旗印を掲げておりました。これが第2次大戦後、イギリスが国有化、社会保障をすすめる際に全面に打ち出され、目標のようにされて来たのです。日本も昭和47年に国民皆年金制度が出来て福祉元年と謳いあげました。ところが福祉国家は、今日、破綻していると言ってよいと思います。福祉国家の「破産」ということがよく言われておりますが、まず財政的に行き詰まって來たのです。日本も先程申しましたように昭和47年に国民皆年金制度を作り、福祉国家を謳ったのですが、すぐ福祉関係の財政は赤字の累積になってきます。翌年昭和48年は第1次石油危機でした。それをもって、いわゆる高度成長の時代は終わったのです。すると福祉関係の財政はすぐ火の車になりました。世界的にも第1次石油危機を契機にして高度成長の時代が終わると福祉国家が財政的にいき詰まり始めて来ました。いき詰まるのは当然のことでした。

第2次大戦後日本を含めどの国においても福祉が充実してきたことは事実です。しかし社会保障をしょうとするとそのお金はどこから来るのか。国や県など公共体がその資金を生み出すものを持っているわけではなく、国民が出さざるを得ません。だから社会保障があれば必ず負担というものが出て来ます。その一つは税金であり、一つは社会保障費といわれる社会保険料であります。今日、働く人は給料をもらうと、税金と社会保険料が初めからさっ引かれております。税金の一部と社会保険料が社会保障に向けられます。保証は貰う方ですから、権利義務の形でいけば権利の方になります。税金と社会保険料は義務の方になります。もうすぐ地方選挙が始まりますが、選挙の時には候補者は、よく自分が当選したあつきには大幅減税をし、お年寄りには心配のない社会保障をしますと言いますが、それは出来っこないことです。保障を厚くすれば負担が大きくなる、それは当たり前のことです。戦後、権利の方は主張するが義務の方は言わないわないとというのが一つの風潮ともなってきましたが、丁度それが表面に出たものと言ってよいだろうと思います。事

実、憲法にも日本国民は「健康にして文化的な生活」を営む権利が与えられていると書いてあります。しかし誰がどのようにして保障するかはどこにも書いてありません。考えてみればおかしなことです。本来、人間に人権、つまり生まれながらの権利があるとすれば、生まれながらの義務もあるはずです。基本的人権は日本の憲法に初めから終わりまで書いてありますが、生まれながらの基本的義務というのではありません。そこで権利の保障を国や県や市等公共体に要求するのが一般となり、又それに乗っかって政治が行われてきました。

もっとも社会保障と公的負担の関係はどちらか一方が増えれば他方も増えるという仕組みになりますが、公的負担をあまり増やさなくても、場合によっては減らしても保障を増やすことができる場合があります。次のような二つの条件が揃っている場合です。第1の条件は保障を受ける人が少ない場合です。高齢者の場合だと年金を貰う高齢者があまり多くない、高齢化率が低いということです。第2の条件は経済の成長率が高いことです。国の経済が大きくなればそれだけ国民の懐が豊になります。成長率が高くて成長が進めば国民所得は増えます。そうすれば当然税金や社会保険料も増えていきます。特に税金というのは累進的になっていますから、国民の所得が増えれば払う税金は経済が膨れる速度よりもっと大きな速度で増えていきます。現在の日本の税率だと、G N Pが10%増えれば税収は約12%増えることになります。日本の高度成長期にはこの二つの条件が揃っていました。例えば日本の高度成長期を昭和48年の第1次オイルショック迄とすると、その頃までの日本の高齢化率（普通高齢者といわれる65歳以上が全人口に占める割合）が7%未満でした。現在ではこれが14%を越えております。しかも高度成長期は毎年平均して10%以上もって成長しておりました。ですから高度成長の時代には、負担は減ります、保障は増やします、ということが出来たのです。

ところがこの二つの条件は消えてしまいました。人口統計はほぼ確実ですが、我々日本人の寿命は2021年迄は伸び続けると言われています。この頃には高齢化率は25%を越えるのだそうです。皆さんは大いに働き盛りの頃だと思いますが大変です。赤ん坊も入れて日本人が4人足らず集まると、1人は65歳以上ということになってくるわけです。日本は今まで人類の経験したことのない世界一の超高齢社会になります。よく高齢社会や高齢化社会と言われますが、正確な言い方についてにここで少し申しそえておきます。これは国連の定義ですが、高齢化率が3%未満の場合を青年国と言います。3%～7%を成人国と言います。7%を越えると老人国と言います。だから日本も、高度成長期には青年国だったのですが今は明らかに老人国になっています。もっとも先進国は全て老人国になっているといってよろしいのです。しかし7%を越えた老人国も25%迄にはまだ段階があるわけで、7%～14%迄の国或いは社会を高齢化社会と言います。14%～21%を高齢社会と言います。21%を越えますと超高齢社会と言います。日本は高度成長期は成人国でした。いまや高齢化社会ではなく、高齢社会に突入していると言わねばなりません。そして21世紀の初頭には超高齢社会に入ると思います。それにこれほど高齢化が進むわけですが、それに加えて高度成長の時代が終わりました。第1次オイルショック以来10%を越える経済成長というのはありません。今は特に不況で昨年などはマイナス成長ですが、数年前、バブルといわれ猛烈に経済が活気を呈していた時代でも、平均成長率は実質5%以内でした。今後は大体2%程度のものになるだろうと言われております。いずれにしま

しても高齢化率が非常に低かった時代はもう終わってやがて超高齢社会に達します。日本は現在世界一の長寿国で毎年ギネスブックを更新しています。長生きをするようになれば高齢化の率が高くなる、これは自然です。しかし日本の高齢化が進む理由はそこにあるのではなくて、決定的な理由は人口が増えなくなったという事です。やがて日本は人口が減り始めます。戦前兄弟というと普通5人ありました。合計特殊出生率は4.7でした。今は1.5を大きく割り込みました。兄弟は1人か2人ということです。皆さんはこれから子供を産む生産力人口に入りますから、大いに子供を産むことを考えてもらわないと、この根本的には対応出来ないです。いざれにしましても日本は世界に例のない超高齢社会になります。そうして一方高度成長の時代は終わったのですから、保障を増やそうと思えば負担が増える、これは当たり前のことです。そればかりでなく、日本の現状では保障を増やさなくても負担は増えます。何故なら高齢化が急速に進んでいるからです。これを知る為には老人人口指数で考えて頂ければすぐ分かります。老人人口指数は65歳以上/15~64歳の五分比です。統計上15~64歳は労働力人口、65歳以上は被扶養人口です。だから老人人口指数は統計上、何人が働いて何人を養うかということを示すものとなります。現在おおざっぱに言って6人に1人です。10年前には8人で1人程でした。ところが2021年、日本が超高齢社会に入っていく時期には、だいたい2人で1人を養わなければならなくなります。働く人々には現在の3倍の負担がかかります。今、公的負担は税金と社会保険料の両方を含めて約40%と考えてよいと思います。国民所得の4割を出している。それが3倍となると120%、そんな事はあり得ません。しかし100に限りなく近づくという事はあるでしょう。そういう時代が来るのです。

高齢化が非常に進み、福祉国家的な保障を厚くした国になると大変になるわけです。例えばスウェーデンは現在高齢化率が18%位です。そして保障は日本より良い。ですから公的負担の率は非常に高く国民所得の約77%もあります。入って来るもののはほとんどが出ていくわけです。スウェーデンという国は福祉国家の一つの模範としてよく教科書に書かれてきましたが、孤児院や養老院がどんなに立派かとか年金がどれだけ良いかとかばかり書かれていて、国民がどれだけ負担をしているかということは書かれておりません。権利の面だけ書いて義務の面はほとんど書いてないというのはおかしいことです。スウェーデンはそれでも経済が成長していた間はやれたのです。しかしスウェーデンの経済は日本のバブルが消える前から悪く、これが大問題となっていました。のみならず、スウェーデンには困ったことが生じてきました。それはスウェーデンは今年の始めからEU（曾てのEC）に加盟しました。EUに入れば経済は国境が無くなるわけです。どこで働いても、どこで何をしようと経済には国境がなくなるとなれば、税金の高いスウェーデンから若い人は出ていくのじゃないかと思われます。スウェーデンにおれば保障は良いですから年寄りは残るということになります。年寄りばかりの国になってくるという危険が非常に高くなっています。ちなみに社会保障に使う税金として間接税が多いのですが、日本の消費税に当たる付加価値税は25%です。ところがEUには税率の最低限が決められていますが、EUの付加価値税の最低は15%です。スウェーデンの付加価値税より10%も安いですから、若い人達は出て行く可能性は大きいと思われます。昨年少しスウェーデンに行きましたが、どのようにして25%を15%にもっていくかスウェーデンでは大問題になっておりました。日本に習えという人さえあるのです。福祉国家の問題になるとスウェーデンが

模範のように言われて福祉に携わる人はスウェーデンやデンマークに留学するというのが普通でした。しかし、福祉国家は今や、財政的に破綻して来たと言えます。子供をあまり産まず高齢者が増え、保障を厚くしようとすればどうしても限界にぶつからずにはおれません。日本はどうするのです。今から超高齢社会に突入しようとおり、今までの福祉国家的な保障のやり方では動きがとれなくなっている。消費税3%位でのやれるわけはありません。6%にしてもやれるわけはありません。どうするかという問題が既に起こっています。

では先行き真っ暗かというと、必ずしもそうではないと思います。

何故かというと高齢者福祉を始めとして色々な福祉を進めていくやり方は社会保障的なやり方だけではないからです。戦前を考えてみてください。勿論今より年寄りは少なく子供も多く、今とは事情は違いました。それでも年寄りはおり、今のような社会的な保障があったかというと、一般的には全然なかったのです。一部の官吏とか、軍人に恩給という年金のようなものがあっただけで一般的には無かったのです。それでも、高齢者のケアは行われました。方法は社会保障的なやり方だけではないのです。これらを考えればお先真っ暗になる必要はない。

まず、高齢者の世話を若い人達がするということはいつ、いかなる時でも同じです。人類の有る限り同じでしょう。年寄りも昔は若く年寄りの面倒をみてきました。しかし、どういうやり方で面倒を見るかは、時と所によって違います。具体的に言えば千差万別です。だが原理的に言うと、三つのやり方しかないのです。第1は公共体が面倒をみる。これは、強制的に若い人から吸い上げて年寄りにむけていくというやり方法です。公助というやり方です。現在の福祉国家的なやり方はこのやり方です。戦前は一般的にはこの方法はありませんでした。年寄りの面倒は子供がみたのです。家で面倒をみれない場合は村が面倒をみました。つまり家族共同体や地域共同体が面倒をみたわけです。これはみんなが助け合うやり方ですから、共助と言えます。原理的にいうともう一つあります。人には一切面倒をかけない、自分でやるというやり方です。と言っても誰でも最後には誰かに面倒をかけないわけにはいきません。しかし経済的には誰にも面倒をかけないというやり方はあります。元気な時に自分の将来の為に蓄えておけばいいわけです。これは狭い意味の自助です。以上のように公助、共助、自助の三つがあり、またこの三つしかないです。

戦前は先程言いましたように社会保障のようなやり方は全く無かったのです。自分で自分の将来の為に蓄える事の出来る人は本当に限られた人だけでした。従って通常は共助でした。子供が面倒をみ、近所の人達が面倒を見る。ところが戦後はこれを切り崩していました。戦後の日本で家族愛とか親子愛とか言うと前近代的、封建的とぼろくそに言われました。郷土愛とか相互愛と言うと軍国主義とぼろくそに言われました。意識的に共同体を切り崩していったと言ってよいと思います。家というのは昔は共同体で、家の財産というのは夫婦の共有財産でした。現在は家というのは男と女の契約社会にすぎず、家の財産といつても旦那さんのものか、奥さんのものかはっきりしています。家というのは1代限り、1人の男と1人の女の契約社会にすぎないというのが戦後の考え方です。そして個人の基本的人権というのを盛んに言ったわけです。権利がみんなに与えられているという事でそれを国に盛んに要求しました。そのおかげで公助、つまり社会保障が非常に伸びたわけです。勿論完全ではありませんが、社会保障が整備されて来たという事は戦後の大きな

功績だと言ってよいでしょう。ところが今日これが行き詰まっているわけです。非常に重要なところではあるけれども、これだけではやれなくなつた。

ではどうするか。自分のことは自分でやると考えるのも一つのやり方です。今日どんどん広がっている個人年金の制度がこれです。しかしこれだけでやれるという人は限られています。そうなるともう一度共助を回復することを考えないといけません。事実だんだんこれが広がっています。例えば公団住宅にしても三世帯共住住宅ということが最近言われております。三世帯が住むということは家族共同体を回復するという一つの運動です。あるいは今日ボランティアと言っているのは地域共同体の回復でしょう。地域で助け合っていた生活の回復でしょう。つまりボランティアというのは共同体の回復と不可分に結び付くものです。こうして今日、家族共同体や地域共同体の福祉機能が見直されていると言つてよいと思います。共同体を英語で言うならcommunityです。よく地域社会をcommunityと言っておりますが、これは厳格には間違います。communityというのは comm という言葉と unity という言葉から成り立っています。comm はラテン語のcumからきたものです。ラテン語のこのクームは英語のwithです。共にと言う事です。unityはラテン語のunusという言葉から来ております。このウーヌスはone、つまり1ということです。ですからcommunityは共に一つということです。コミュニティというのは心の一一致、心の通い合いのある関係を言うわけです。その最も典型的なものを家族共同体と考えなくてはなりません。地域でも心の通いあいがある場合にはじめてコミュニティです。地域社会=コミュニティではありません。私は今神戸市が造成した住宅地に住んでいます。新しく宅地を造成し、人が住むのに必要な施設を整え、人がそこに住み着きます。そうすれば地域社会は出来ます。しかしそういうようにして始まった所は隣の人と挨拶もしないというのが普通です。心の通い合いというのは全然ありません。ということはコミュニティではないということです。地域社会ではあるがコミュニティではありません。今日重要なのは、それをコミュニティにしていくことです。そのようにして地域社会は初めてコミュニティになり、非常に大きな福祉機能を持つことになります。事実その方向に動いています。

## 1. 人間福祉と第3の道

人間の福祉という角度から見た場合、このコミュニティというものが決定的に重要なことを次に見てみたいと思います。

福祉国家的な福祉は、先に見たように、財政的に破綻しました。それだけではありません。本来の意味の福祉に必ずしも合致していなかったと言ってもよろしいと思うのです。人間の福祉というものは、お金とか物だけによって決まるものではありません。金とか物というものは勿論必要ですし、それが無くては生活が出来ません。しかしそれがあれば人間の福祉は満ち足りたものになるのか。そんなことはありません。日本で言われる福祉というのは Welfareです。これを福祉と訳しています。これをドイツ語でいうとヴォールファールト (Wohlfahrt) と言います。しかしドイツ語には日本語で福祉と訳されている言葉がもう一つあるのです。ウォルシュタント (Wohrtstand) という言葉です。英語とドイツ語に共通する well と wolf は良いという意味です。fare, fart も同じバスの切符とか通行券という意味で、Welfare と Wohlfahrt この二つの言葉はイコールと見てよいと思います。ところがドイツ語の Wohlstand は wohl は良い、Stand は暮らし向きです。

だからいい暮らし向きということになります。福祉という風に日本語に訳されていますが区別しますと *Wohlstand* はより経済的な意味です。物的な福祉を言います。それに対して *Wohlfahrt* の場合は心の福祉、精神的な福祉を言います。従って幸福とか幸いという言葉に近いです。幸福というと物よりも心の問題にかかっています。つまり我々が通常福祉と訳している *Welfare*、*Wohlfahrt* はもともと本来的には幸福という意味だと思います。

では人間の幸福というものに決定的なのは何か。物も重要ですが、決定的とは言えないです。結局、心に触れて来ることになるだろうと思います。こうなりますと、人間に福祉というものを考える場合は何よりも人間的な温もりというものが重要です。人間的な温もり、暖かさ、こういうものが需要です。高齢者にどんな福祉施設がありましても温もりがなかったら、それはいい福祉施設と言えるかどうかです。少々設備が良くなくても人間的な心の通い合いがあり、温もりがある場合は多分良い施設でしょう。

それについて思い出す事があります。私がウィーンで勉強したときのことです。私のついていた教授の助手の人が日曜日には必ず自分の車でオーストリーを案内してくれました。ある日、一番先端をいく孤児院に案内するというのです。私はそれまで良い施設をいくつか見ておりましたから非常に立派な所を頭に描いておりました。ところが山を越え野を越え、どんどんどんどん田舎に行くわけです。1時間位車で走って、ここが最先端の孤児院だと言うのです。見れば、ヴィーゼといわれる牧草地の中に木造の農家が6、7軒あるだけです。けげんに思っておりましたら、案内してもらってその理由が分かったのです。各家には3歳から15歳位までの孤児が5、6人入っていました。そしてそこにはお母さんが一緒に入っています。このお母さんは全てボランティアです。だから今日行ってちょっとボランティアやろうなんていうボランティアではありません。或る人は一生お母さんになるのです。或る人は数年、お年寄りの人もいれば若い人もおりました。子供達はそこで農仕事をやりそこから学校に行くわけです。つまり家族共同体を作る事、これがキンダー・ドルフ、つまり子供の村と言って一番最先端の孤児院でした。もう今から30数年前の話ですが非常に感銘を受けたものです。いったい孤児にとって何が一番大切な福祉なのかという、その原点に帰るとこの理由は分かります。家族的な温もり、人間的な温もりを作るというのが最先端の孤児院の仕事です。

実際、人間の関係には色々な関係がありますが、人間的な温もりというのがないような関係の中に福祉社会というものはあり得ないと思うのです。ご承知のように人間関係（社会関係）には基本的に二つのものがあります。これはドイツのテンニスという学者が区別した為に現在でもドイツ語が世界共通語になっておりますが、ゲゼルシャフト (*Gesellschaft*) とゲマインシャフト (*Gemeinschaft*) の二つです。ドイツ語そのものにはそんなにはっきりとした区別はないのだそうですが、テンニスがこの二つの概念を分けた為に非常に有名です。強いて日本語に訳す場合は、ゲゼルシャフトは利益社会、ゲマインシャフトは共同社会と訳します。つまり我々人間は沢山の人間関係を持っておりますが、基本的に分けるとこの二つの型になります。一つは利益によって交わっているもの、算盤づくりの交わりです。利益があれば交わるし、なければ離れていく。商売の上で色々な人間関係が出来ますが、そういう場合は典型的にこういう利益社会的な交わりになります。もう一つ、ゲマインシャフトは利害打算を越えた交わりです。親子、兄弟、恋人同士とか親友とか、

心の通い合いがある関係です。「なぜなしに薔薇は咲く」という詩の一節があります。「なぜなしの人の交わり」というのがある筈なのです。何故か分からなければ気があってよく交わるという関係です。心の通い合いとか、心の触れ合いとかは、ゲマインシャフトにおいてあります。ゲゼルシャフトの場合は算盤づくで、人間的な結び付きが出来てくるのはゲマインシャフトの方です。ゲゼルシャフトの方はあっさりしているけれど冷たいです。商売の社会で生き馬の目を抜くという言葉があります。いつ背負い投げをくわされるか分からない、心の安らぎはないですね。ゲマインシャフトの方は心の安らぎがあり、人間的な温もりが出て来ます。こういう二つの関係があるのです。人間的な福祉にとって決定的に重要なのはゲマインシャフトの方です。英語の場合は、ゲマインシャフトがコミュニティということになります。

ところが近代社会でどちらかというとゲゼルシャフトの傾向が強くなりました。テニスは非常に有名なことを言いました。「ゲマインシャフトからゲゼルシャフトへ」、これが近代社会の動きだというわけです。実際隣は何をする人か全然分からないというのが都会生活の現状です。都会のアパートで老人が一人で死んでいても何ヵ月も分からないということは、よくあることです。こういうことは、昔の村では絶対に考えられることでした。都会の生活はあっさりはしている、合理的ではある、しかし実に人間的には寂しい社会であります。ドイツの有名な哲学者であるハイデガーは近代社会がこういう風な利益社会的な結合になってしまった状況を見て「人間の故郷の喪失」、Heimatlosigkeit と言いました。啄木に「ふるさとの山に向かいていうことなし、ふるさとの山はありがたきかな」という歌がありますが、故郷を追われた啄木でさえ故郷は一生彼の心に焼き付いて離れなかったのです。そういう故郷というものを失ったのが現代人の姿だ、とハイデガーは言いました。故郷を失ったということは人間にとて寂しいことです。だから望郷の気持ちが人間の心の中に起こって来るのは自然のことです。これが人間回復の要求です。人間回復の要求と結んで今日非常に問題になり始めたのがコミュニティ回復の要求です。

コミュニティが回復されなければ心の触れ合い、人間の心の安らぎというものが得られない。だから最近の社会思想の中には、強い一つの動向として、ゲマインシャフトをもう一度新しい形で回復しようという動きが始まっています。自由主義、社会主義等これまで色々な社会体制構想がありました、人間回復という点では全て失敗でした。新しい故郷を求めて新しい社会のあり方というものが追及され始めております。

社会体制と言いますと最近の一番大きい出来事は共産体制、共産主義の崩壊です。恐らくマルクス、レーニン主義という主義の上に立ったソ連という共産主義の国が出来上がりまして17年、そして世界を2分する勢力にまで拡大しながら80年代の後半から急速に崩れて、1991年しかもその年の12月25日に、ソ連邦が名実ともに消滅してしまいました。この歩みのなかで、アメリカは自由主義の勝利宣言をしました。しかし自由主義というのが本当に勝ったのかというとそんなことはないと思います。私は自由主義はとうの昔に滅んでいると思います。例えば、現在、日本は自由主義の一つとされているわけですが、社会保障は十分ではないにしても広く行われております。しかしこれは自由主義の主張でもなんでもなく、社会主義から生まれて来たものです。或いは歴代の主要な内閣は経済計画というものを立て、経済の運営をしております。経済計画というのも社会主義が主張したものです。それだけでなく例えば景気がこのように不況ですと財政資金をもう少し

使えとか、財政を動かして不況を乗り切れという、いわゆるケインズ主義の政策が言われます。あのケインズの理論でもヨーロッパでは社会主義の理論です。決して自由主義の理論ではありません。ケインズは英国では労働党の政策に結び付いておりましたし、ドイツではドイツ社会民主党と結びついている経済理論家なんです。現在、自由主義の国で普通に行われているものの中に非常に社会主義的要素が入っている。つまり決して曾ての自由主義ではなく、社会主義と自由主義がミックスした形になっているということです。私自身は、自由主義あるいは自由資本主義は1930年代に滅んだと思っております。そして共産社会主義は80年代以降つぶれたと思っております。つまり20世紀は、非常に多くの希望が託されて来た近代の二つの大きい社会思想が共に滅んだ時期であると言ってよいと思います。

そこで21世紀に開けていくのは何かと言えば、自由主義でも社会主義でもない、資本主義でも共産主義でもない、第3の体制、一つの混合体制である。このことはかなり早くから言われて来たところです。しかし、最近非常に目立つことがあります。今まであまり言われなかったものが前面に出てきたものです。それは先程から言っているコミュニティの回復要求です。そこで私はこれをもう一つの第3の道と言っております。

だいたい近代はフランス国旗に表される自由と平等と愛の主張に出発したものともいえます。愛はフランス語でfraternité兄弟愛というのが本当だと思います。これは優れてキリスト教的な思想がありました。自由と平等と兄弟愛というのはキリスト教の理念を抜きにしては本当は分からぬのです。創生記に神様が自分の姿に似せて人間を作ったと書いてあります。だから人間というのは神の姿を宿している。だから人間の尊厳性というものがある。人権というのもここに根差しています。このキリスト教の背景がなかったら人権という事を口で言っても本当は分からぬだろうと思います。ヨーロッパでは尊厳性、人間は神の似姿という信仰の上に立っているのです。人間はどんな人でも一人一人神の姿を宿していると考えられております。キリスト教の神は person です。人間も person です。神が自分の imago つまり似姿として人間を造ったから人間も person なのです。よく日本の宗教哲学の本を見ますと、キリスト教の神は人格神だと訳しています。これは全くおかしいのです。人間だから人格であって神であれば神格といわなければなりません。人格は神格を宿したものなのです。そして神は自分に似せて人間を造ったのですから、この世では人間だけが person です。英語の individual は personal と殆ど同じ意味のことがあります。しかし individual であるというのは何でも使えます。形あるものは一つ一つが individual です。しかし人間は individual とあると同時に person です。さらに言うと、individual としての人間の尊厳性などというのはおかしいのです。形あるものは全ては一つ一つの individual です。人間一人一人の価値が言えるとすれば person としての価値です。人格価値ということが言えるだけです。何故かというと神の person を映しているからです。これはキリスト教の信仰であり、論理的に説明しろと言っても無理です。その信仰のあるところでは人間一人一人生まれながらに神の姿を宿し、尊厳性があるのです。そこから人権という思想が出てくるわけです。この信仰を抜きにしては説明がつかないので。人権の思想はキリスト教の地下水の上に咲いた一つの花でした。それを切って日本を持って来てもきれいではあるけれども根がなければ枯れてしまいます。だから我々は人権理念がどこから来たのかということをいつも知っておく必要があります。

ところで人格としての人間 person という言葉は per-se と説明する人もいますが、per-se というのは by oneself つまり、自分自身でということであり、自立ということを意味します。人間の自由というのは自律です。自分で自己を律することが出来るということに入間の自由がある。単に好きな事をやるというのとは意味が違います。自分で自分を律するのですから、自由は同時に自己責任と結びついています。つまり person としての人間はまず、自由と責任の主体であります。次に person としての人間は誰もが神の姿を宿しているという意味において全て平等です。individual としては人間は決して平等ではないのです。違っているからこそ individual です。男女の別があり、個人によって能力に違いがあり、千差万別です。人間ほど固体差の大きいものは他の生物にはないと言われています。人間が平等であるというのはだれもが神の person を映すという意味で平等です。人間として、人格としていづれも尊厳性を持っているという意味において平等なのです。だから平等と同一は全然別のことがらです。男女平等だと言っても individual 個人として平等であることは決してあり得ないことです。person としてこれもキリスト教の信仰なしには分からぬことですが、みんな神の似姿であるということから人はみな同じ父の子である、つまり人はみな兄弟だということになります。だから人と人との愛は単なる愛ではなく、兄弟の愛です。

以上のような自由と平等と兄弟愛。この旗印のもとに近代は出発した筈なんです。ところが 18 世紀の市民革命のなかで人権が前面に出ました。人権宣言です。これは当時の政治状況からして自然です。それまでの絶対王制に対して下からの反発でしたから義務というものはほとんど言われず権利ばかりでした。それでもフランスの人権宣言が行われる際の国民集会では人間に生まれながらの権利があるなら、生まれながらの義務もあるという意見があったのです。僅かの差で敗れました。それで人権宣言となつたのです。これが前面に出た事もあってまず自由が主張されました。これが自由主義です。しかし自由だけでは強いもの勝ちになります。いわゆる自由競争において自由なのは勢力を持っていることが勢力を持っている程度において自由なのです。弱いものは勢力を持たないその程度において不自由です。そうした状況になります。そこで社会的な弱者達が反発します。弱者は当時はとくに無産の労働者でした。財産を持たない労働者は社会的には弱い立場におかれていたのです。無産の労働者が前面に出て人権の主張をします。それは人としての平等の主張となります。これが社会主義です。いずれの場合も兄弟愛というのはとり残されてしまったのです。自由主義の場合は強いもの勝ちですから弱いものを踏み倒してでもいこうというわけです。社会主義の場合は集団的に平等の要求ですから階級内部においては階級共同意識というのがありますが、階級の外に対しては憎しみです。階級闘争です。普遍的な愛というものとは性格が違います。こうして進んだのですが、これらはいずれも潰れました。いわゆる第 3 の道というのは個人だけでもない、国家だけでもない二つを結び付けた混合体制だというのが第 3 の道です。しかしこの場合でもこれだけでは先程言ったところからも分かりますように、人間的な温もりというのは回復されないのです。人間の故郷というものは回復されないです。更に最近では権利を前面に立てその保障という形で発展して来たいわゆる福祉国家も財政的に破綻して来ました。この面からもコミュニティに注目は向いて来たと先程言いました。基本的に言うと最近のコミュニティの回復要求はこの二つの面からです。一つは人間的な温もりのある社会関係を作りあげようとする、人間の

回復の要求です。もう一つは福祉国家が破綻なかで、新たな福祉社会を造ろうとして、コミュニティの福祉機能が見直されてきたわけです。

このコミュニティの基本は愛です。経済学をやった人なら誰でも知っている、あのアダム・スミスはもともと道徳学者、倫理学者ですが、このスミスも愛の決定的重要さを説いています。彼の道徳哲学の基本の徳目は三つあります。第1は賢明、これは絶えず自己を改善していこうとする要求です。第2は正義です。これがなければ社会の秩序は成り立ちません。この正義は平等と結び合います。しかし正義があれば社会は成り立つが、しかし人間的な社会は生まれないとスミスは言いました。人間的な社会が出来る為には第3番目の徳目が必要です。それは愛です。慈しみ、愛というものがなければ人間的な温もりのある社会は出来ない、とスミスは言っています。しかし自由主義ではもっぱら自由が、社会主義ではもっぱら平等が全面に出て、愛という領域はずっと背後に退いておりました。しかし最近人間の回復要求と新しい福祉社会の追及の両面から愛の面に人々が関心を持ち始めてきました。例えば最近、社会体制論、経済体制論の領域で非常に目立つ傾向があります。その一つとして、アメリカではネットワークの議論が広がってきました。ネットワークといつても色々なネットワークがありますが、そこで特に取り上げられている、人と人とのネットワークです。現にさまざまのそうしたネットワークがアメリカ社会では沢山あるのです。ボランティアの拡大も、その重要な動きの一つです。例えばロスアンゼルスの救急車は約65%がボランティアだそうです。これも少し前ですが、ロンドンで成功した例に暴走族を何とかしようと、暴走族を救急車に使ってうまくいったそうです。色々なエネルギーがありますが、それを組織化していく事は重要です。そういうものが既に社会で形成されています。それを更に組織化しながらやっていくネットワーキング、これが次の21世紀の基本になるだろうという主張です。またフランスで最近目立つものに日本語でも大分翻訳が出始めたレギラシオンのグループの動きがあります。レギラシオン学派と呼ばれ、これの中心の思想はコミュニティです。この社会の中に様々なコミュニティを作っていく。コミュニティが社会の主役となり中心になるのが21世紀の社会のあり方だとレギラシオン学派は言っております。これらはfraternité系の領域が最近非常に自覚され始めたということです。

21世紀は単なる個人主義でもないし、全体主義でもない、何か中間の組織でしょう。そして個人でも、公的なものでもない、もう一つの中間的な組織が非常に大きいウエイトを持って来るような社会、それが21世紀の社会のあり方になるのじゃないかという意見がかかり多くなっています。私もそう思っております。経済では個人あるいは個別企業の取引からなる市場経済（market economy）これに対して国が市場で出来ないことをやったり、市場を規制したりする公共経済（public economy）があります。そういう二つのものと区別して最近特にEUの中で広く使われ始めている言葉に（social economy）というのがあります。NGOやNPOのような団体、こういうものが大きい力を持つような経済で、協同組合もそういう性格を持っていますが、こういう経済をsocial economyと言っております。もう既にEUの中ではそういう方向への動きが始まっているように思います。こうしますと、共同体を担う様々なボランティアのような団体が社会的に大きな意味を持って来る時代が来つゝあると言ってよいだろうと思います。

### 3. コミュニティとボランティア

コミュニティ、利害打算を越えた人間的な交わり、心の通い合いのある関係です。こういうコミュニティをこれから作り上げていくというのは今日の時代の先端を行く仕事だと言つてよいと思います。これを担う重要な活動の一つがボランティアになってきます。従つてボランティアは自分の仕事の合間にちょっと行ってやろうという性質のものにとどまるのではなく、新しい社会を作っていく役割を担うものと言ってよいと思います。

今度の神戸の大震災の復旧ですが、震災前の神戸に帰るというだけでは能がありません。自然による破壊を、21世紀へ向けての新しい都市作りの機会にしていくのではなくてはならないでしょう。近頃、標語のように「災害に強く、人に優しい都市作り」ということが言われています。人に優しい都市を作ろうと思うならば、都市の中にコミュニティを作つていかなければならぬと思います。それだけではなく、コミュニティというのは災害にも非常に強いことが今度実証されております。震源地といわれる北淡町では消防団の活躍が目覚ましく、1時間足らずで全町民の安否が掴めました。今度の震災の犠牲者の中の多くは老人でした。色々な理由がありますが、一つの大きい原因は、どこにどういう年寄りがいるか、はっきり分からなかったということが大きいようです。コミュニティであればそんなことはあり得ないことです。北淡町は小さな町ですから、コミュニティがなお残っていました。ボランティアの典型的な組織である消防団が走り回って良い結果を生みました。淡路島のもう少し南にある五色町の町長さんは高齢者のケアシステム作りに大変熱心な方で、年寄りは一人一人カードを持っています。ちょっとおかしいと病院にすぐ連絡が出来るようになっています。普段からどこの高齢者のお世話をするのは誰かという事がだいたい決まっているのですが、ここでは瞬時に高齢者の安否が分かったそうです。それだけではなく、他の町に応援に出掛けたということです。こういうようにコミュニティがしっかり出来ていた所は今度の災害に非常に強かったです。

都心部ではそういうコミュニティがその意味ではないのです。その中でまがりなりにコミュニティを持っていたのが生協でした。神戸は生協の強い所ですがこの生協には、震災が起りますと全国から支援の車が来ました。全国の生協からの支援者は述べ1万位にものぼり、トラックは約3千台、それに食料品を満載してやって来ました。生協は地域の人々と密着していますから、その活動には目覚ましいものがありました。コミュニティと言うものの強さ、これが、あれだけの震災でパニックが何故起らなかつたかという、少なくとも一つの原因であることは間違いないと思います。更に災害にあった避難者達が被害直後に「日頃は言葉も交わしたことなかつた隣人が一緒に被災してお互いに大丈夫かと言つた。それによって自分は一番勇気づけられた」と言っております。「家は失ってしまったけれども、人間に何が一番大切か今度よく分かりました」とも言っております。これらはすべてコミュニティにかかわります。心の通い合い、触れ合いというものです。新しい神戸の都市作りにはハードというよりソフトの面ですが、コミュニティ作りというのが非常に重要だと思います。

私自身には一つの理想の図があります。コミュニティというのはそんなに大きいものでは出来ませんから、神戸をいくつかに分けて各コミュニティにはコミュニティセンターがあり、そこには医療、福祉等々の施設が集まっており、行政の出先機関があり、マーケティングの場所があり、そういう広場を中心にしてコミュニティが作られている。そしてまた

そこを中心に災害時だけではなく、平時のボランティア組織が編成されている、というものが出来たらというのが私の頭の中にある希望です。古いヨーロッパの町に行くとどこでもたいてい似ており、真ん中に大きい広場があります。そこに人が集まりますから裁判所があったり、庁舎があったり、店屋があったり、レストランがあったりしております。ああいうものが神戸の町のあちらこちらに出来たらどうだろう。真ん中には貯水池があって、人の憩いの場所になる、曾てのヨーロッパの広場を新しい形で作っていったら、これは地域のコミュニティを作っていく重要な方法ではないかと私は思っております。コミュニティというのはソフト面ですが、恐らく次の時代を担う中心になるだろうと思います。それは活動としては多くはボランティア活動になるわけです。市場経済的な give & take ではない、公共経済的な命令で動くものでもない。ボランティアですから自分の意志でもって自分の利益。打算というものを度外視した色々な働き、そうした働きを中心とした組織活動がこれから新しい時代の先端を開いていく、そういうようになるだろうと思います。

神戸の震災でボランティアが非常に目立ったわけですが、同時に問題点も目立ちました。みんな何かしたいと思って来てくれるけれども何をやっていいか分からない、またどういう風に働いてもらえばいいか分からないという、両方とも体制が揃っていないわけです。特にああいう災害の場合には色んな集団的な訓練がどうしても必要でしょう。同時に非常にこれから重要になると思うことは、自分が得意とする何かによってグループを作ることです。この前ある被災者の集まりに行きましたら、耳の不自由な人がおられて、一番困ったのは情報が伝わらなかつたこと、それのみではなくどこに行っても意志を通じることが出来なかつたことだと言っていました。あの時もし手話をしてくれる誰かがおられたらどんなに助かったか分かりませんということでした。例えば手話をする人が手話をするボランタリーチームを編成していく。あるいはコンピューターもそのようですが、コンピューター操作の得意な人だけがチームを編成します。海外から支援に来たボランティアの人は全て何か特技を持っています。事実、海外にはそういうものがあつてそういうグループの人々が時々集まって親睦だけではなくて訓練もしているようですが、これからは日本でもこうしたボランティアチームを編成していくことが非常に重要だと思います。そして何か集団的な訓練というものがその中で行われる必要があるかもしれませんと思ひます。これは強制となりますますが、そういうものを通して始めて団体的な訓練とか組織的な活動が出来て来るようになるのではないかでしょうか。

もう一つはマネジメントと言いましょうか、ボランティアを編成し、動かしていく、それをうまくマネージしていく、こうしたボランティア・マネジメントというものがこれから非常に重要になるでしょう。これもアメリカとかヨーロッパに例がありますが、自分の得意とするもの、自分の出来ること、自分に可能な時間帯などを届け出しており、それをうまく編成し配置していくております。そういうマネジメントが非常に重要になる。これがうまく出来ないと、どこで働いてもらつたらよいのか分からず、受け入れ側が混乱してしまうことが今度の震災でよく分かりました。

他方、ボランティアをしようとする力は十分にあることもよく分かりました。ある調査によれば、ボランティアをやった経験のある若い方というのは 8% 位だそうですが、ボランティアをしたいという希望を持っている人は 50 数% あります。これをもう少し促進す

れば非常に大きい率になると思うのです。ご承知と思いますが、高齢者のケアに関しましても、ホームヘルパー等に高いお金を出してお世話をするというのでは、財政的に行き詰まってしまうことははっきり分かっています。これからはこの方面にも、ボランティア活動というのが要求されていくことになるでしょう。こういう場合にも夫々ができる事を夫々が届けるような制度が出来てくると非常に良いだろうと思います。例えばホスピスは日本では死に場所のように考えられていますが、本来ホスピスは生きる意義を与える所です。だから欧米ではホスピスで亡くなるというのは例外のようです。死ぬのは自宅が多いのです。だいたい我々最後は人間的に死にたいと思いますが、人間的に死ぬということは最後の最後まで人間的に生き抜くということです。ホスピスはそういう力を与える所です。ちなみにホスピスには色んな役割を担うボランティアがおります。ただじっと手を握っているだけの人もあります。年寄りの話を聞くだけのボランティアもおります。これも非常に重要です。やろうとするならば何かは誰でも出来るわけです。こういうものをこれから組織化していく、これが重要と思うのです。そういうものも含めた技能ボランティアとボランティア・マネジメントを進めていくことが、これから非常に重要になる。またやらなければならないと思われます。

#### 4. 人生とボランティア

ところでボランティアというと普通自分の意志による奉仕活動と考えられております。しかしボランティアというのはただ人の為にすることなのだろうか、ということを最後に申して終わりたいと思います。

先程、ゲマインシャフト的な心の通い合のある場合に、人は人間的な温もりを感じるということを申しました。また、そういう場合にしか、人間的な温もりは出て来ないとも言いました。何故かということを考えてみる必要があります。何故かというと、そういう人間的な触れ合い、心の通い合い、そこで人は初めて決定的なものに触れるからだと思います。だから人間は人間的な温もりを感じ、感動を覚え、涙が出て来るということになるのだろうと思います。じゃ人間に決定的なものは何か、これは確信を持って言えます。それは思いやりです。愛と言ってよいでしょう。これが人間に決定的なものです。確信を持って言えるというのも人間にとて決定的なものが思いやりであり愛であるということは古今東西変わりのない人間の確信だからです。世界の本格的宗教を見てください。同じことを説いているでしょう。キリスト教は第1の掟も第2の掟も愛です。仏教は慈悲です。孔子の教えもそうです。儒教は宗教ではないですが、しかし優れた倫理体系であることに間違ひありません。その孔子の教えも同じです。

孔子の教えも結局は思いやりです。孔子の教えは思いやりであるということが分からなかったら、いくら論語を読んでも駄目です。論語の中で孔子がそう言っているから間違ひありません。こういう箇所があります。孔子には沢山の高弟がいましたが、最も有名な高弟の一人に子貢という人がおりました。彼は最も若く、最も頭がよく、最も人間が出来た人の一人で、孔子は子貢を大変可愛がったと言われています。論語の中にこういう箇所がでてきます。ある日、子貢が孔子にこう聞きます。「先生は色々なことを私に教えて下さいました。私も一生懸命やってきました。しかしあまり沢山のことを教えて下さったので頭に入りきません。私が今から死ぬまで命をかけてやるべきことは何か、たった一言で教

えて頂くわけにはいかないでしょうか」「一言以て終身行うべきものありや」とたずねました。ところが孔子はその時こう答えました。「それ恕か」一言でいうならば恕であると言ったのです。恕というのは思いやりということです。その箇所で孔子は恕とは何かを説明しております。説明の言葉は非常に有名ですから、我々の年配迄の人ならば誰でも知っております。恕というのは「己の欲せざるところを人に施すなれ」ということだと教えました。「自分が嫌なことを人に強いてはならぬ」ただそれだけでした。これが恕というものです。これがいつでも出来るようになればお前は人間として最高だと教えました。だからそれに命をかけろと言ったわけです。「己の欲せざるところを人に施すなれ」思いやりです。

こう申しますと聖書を読まれた方なら全く似たようなことが聖書の中に出てくることはご承知と思います。ある時バリサイの立法学士がイエスに聞くわけです。「先生は色々な所で色々なことを教えていらっしゃる。先生の教えというのは一言でいえないのでしょうか」。子貢が孔子に聞いたのとよく似ています。その時イエスはどう答えたか、「一言で言えば愛だ」と言いました。第1の錠も愛です。第2の錠も愛です。第1は神に対する愛、第2は人に対する愛です。両者は同じものです。人間は一人一人神の似姿ですから、人間を愛するということは神を愛すること、神を愛することは人間を愛することになります。孔子の場合は神様はありませんから、人間関係だけです。そしてイエスは愛について色々教えておりますが、孔子の先程の教えとそっくりのものがあります。愛というのは「自分がしてもらいたいと思うことを人にすることだ」とイエスは教えています。自分が嫌なことを人に強いてはならないということと同じではないでしょうか。裏と表から言っただけのことです。孔子の教えもキリストの教えもみんなここに帰一する、その意味において古今東西を通して人間に決定的なものが思いやりであり愛であるということに変わりはないと思います。

日本語の思いやりという言葉は私は非常に好きです。愛というのは私達の年代の人はそうでしょうが、何か借り物の感じがします。思いやりという言葉の方が何かぴったりという感じがします。いい言葉です。思いをやる、これには二つの意味があります。先ず、思いをやるということは相手に思いを向けることです。ボランティアの活動の第1歩はこれだと思います。関心を持つということです。愛の逆は憎しみだとよく言われます。しかし愛の逆は憎しみではないと思います。無関心です。憎しんでいる場合は相手をまだ認めています。無関心というのは相手を認めないのであから、愛と最も遠いと思います。人間が一番愛から遠いものを感じるのは、問題にされなくなったときです。だから先ず相手に関心を向けること、これが思いやりの行動の第1歩、ボランティアの行動の第1歩だと思います。次に、思いをやるということは、相手の心に思いをやること。相手の心になって思うことです。これを孔子やイエスは教えたのです。「自分がしてもらいたいと思うことを人にしなさい。」「嫌な事を人に強いてはならない」。いずれも相手の立場に立って相手の心になって考えるということでしょうか。日本語の思いやりという言葉は大変意味の深い言葉だと思います。

人間に決定的なものはこの思いやりだと思います。だから我々日本人は、思いやりのない人間のことを「人でなし」と言うのです。それは頭がよくないとか、仕事が出来ないとかいう場合に使うのではなく、むしろ頭もよく切れ、仕事もてきぱきよくこなせるけれど

も、たった一つ思いやりが欠けている、そんな場合に「人でなし」と言います。思いやりがなかったら人間ではないと我々日本人は言っているのです。全く同じことがヨーロッパでも言われています。ご承知と思いますが、ヨーロッパには人間の黄金率と言われるものがあります。人間に最も大切なものです。それは「あなたがして貰いたいと思うことを人にしなさい」というあのイエスの教えです。日本人で「人でなし」というのと全く同じです。だから人間に決定的なものは思いやりであり、そして愛であるということは古今東西を通して間違いないことです。確信を持って言えると始めに言ったのは、そうしたところからです。だからこそ、思いやりに触れる時には人は人間的なものを感じる、人間的なぬくもりを感じるのである。涙が出て来るのである。他でいくらすぐれていてもこれがなければ人間性がないのです。

ところで、愛や思いやりは心のあり方ですが、行動として出て来る場合はどういう形をとるか。行動としては、これは与えるという形をとる。手に入れるという事と逆です。だから愛の法則というのは経済原則とは逆だと言われます。与えるというところに特徴があります。愛するものには物をやりたいです。何をやっても惜しくないです。愛は惜しみなく奪うという人もいますが、これは本物の愛ではないです。与えるのは、物やお金であることもあります。しかし思いをやるのですから、物や金よりも重要なのはその思いを与えることでしょう。

仏教で七施という言葉があります。七施の施は布施ということです。本来、布施と言いますのは与える行い、人の為にする行いで、無財の七施ですから、なんにもなくても人に与えることの出来るものが七つあるということです。例えば眼施（げんせ）といいます。目の施です。優しい目で人を見る、それだけでも人の心を大きくゆさぶるということはあります。あるいは言辞施（ごんじせ）といいます。つまり優しい労りの言葉をかけるというだけです。それだけで人の人生観をすっかり変えてしまうこともあります。有名な道元の言葉の中に「愛語よく回天の力あり」という言葉があります。愛語というのは優しい労りの言葉です。これは世の中をひっくり返すと言っております。事実そういうことはあり得ます。どこに行っても冷たい目で見られていた人がある日一人の人から優しい言葉をかけられたというだけで、すっかりその人生観が変わってしまったということは、人間にはあることです。もしそのすっかり変わってしまった人が影響力の高い所にいた人であれば、その人は社会を大きく変えるということもあり得るはずです。「愛語よく回天の力あり」です。あるいは和顔施（わけんせ）、にこやかな顔で人に接する。床座施（しょうざせ）というのは、人に席を譲ることです。席をとろうとして電車に乗ると気分的にストレスがたまります。席があればいい、なくてもいい、自分のものをとろうと思わなくなった時に心のやすらぎが出ます。自分が席を譲っても、人が席を譲るのを見ても、心が安らぎます。こういうのが七つあげられております。すべて一銭もいらない。重要なことは優しい言葉であったり、優しい物腰であったり、にこやかな顔であったり、こういうものです。

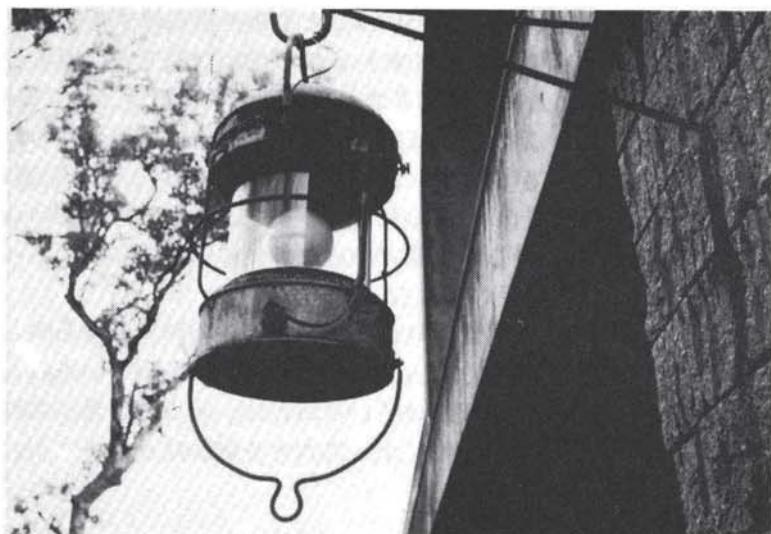
家の中で家族のメンバーは少しも変わりがない、家の家具調度も少しも変わりがない。しかし家族のメンバーが夫々労りあって優しい声をかけあっていいる時と、つんつんしてお互いにつっけんどうな言葉を投げかけている時とは、天と地の差があります。福祉というものはそういうものです。勿論、物によって大きく制約はされますが、根本的に心の

問題に触れて来る。こうして与える行為が非常に重要になるのです。思いやりの行為です。作家の曾野綾子さんはこういうことを言っています。「人が終わりの時に何が決定的になるか」というと、どれだけを手に入れたかではない、どれだけを与えたか」だ。いい言葉だと思います。死ぬ時に問題になるのは、どれだけの金をためたか、どれだけの地位を得たか、どれだけ勲章をもらったかではない。これらは全然問題にならない。問題なのは、一生かけてどれだけ与えたか、つまりどれだけ思いやったかということです。思いやりというのが人間に決定的であるとするならば、どれだけその人が人間になったかということになるだろうと思います。

こうなりますと、ボランティアは思いやりに結びつき、与える行為に属します。ボランティアをやるというのは確かに人の為にしているのです。人の為にしてはおるのですが、しかしこれだけ人の為ではないのです。人間としてより豊かになっていく、そういうきっかけにもなると言ってよろしいのです。

「情けは人の為ならず」という言葉があります。もともとは、人に情けをかける、つまり人を思いやれば、回り回って結局自分が情けを受ける、思いやられることになる、というほどの意味です。けれども私はもっと直接的な意味に解釈できると思います。人を思いやる、情けをかけるということは確かに人の為にしているのですが、そのことによってその人が人間として豊かになっていく。だから決して人の為ではないのです。ボランティアを真剣になさった方々は、みんなそのようにおっしゃいます。そうだろうと思います。

「情けは人の為ならず」というのは、そういう直接的な意味に解していいと思います。ボランティアはこれから大いに社会的に要求され、ボランティア活動は恐らく21世紀を開く先駆的な活動になるだろうと思います。勿論これをどのように編成していくかはこれから的问题です。しかしボランティア、そのことによって同時に、ボランティアをする人が一人一人人間として育っていく、人間的に豊かになっていく、その活動でもあるということを申し上げて、私の今日の話を終えたいと思います。





## 《フォーラム》

リーダー

国際ロータリー第2680地区パストガバナー  
RYLAセミナーアドバイザー

深川 純一

テーマ

「地域社会の創生と青年の役割」

リーダー これからフォーラムに入ります。先ず皆さん方が各班でまとめられたバズの結果を発表して頂きます。それについてご自分の意見を色々おっしゃって下さい。恐らく色々な意見が出て来ると思います。その四つの班の共通のテーマを議題に取り上げて、皆さん方の意見を再びこの全体討議の場で求めます。その結果の善し悪しは結構あります。これは決議機関ではございませんから結論を出すわけじゃありません。少しでも沢山の意見が出て、それによってお互いに学び合うというのがフォーラムであります。私共日本人は、時々、全体の中で違った意見の人がいると、どうも落ち着かないというところがあります。聖徳太子が「和をもって貴しとする」という有名な言葉を言われました。その事の意味を若干はき違えているところがあるのかもしれません。と言いますのは、和というのは全体が心を一つにする事なのでありますが、そこで言う和は、一人一人の意見は全部違うのです。まともに議論をすれば必ず意見は違う筈であります。お互いに意見の違う事を納得した上で、和を作らなければならない。和という事を、全部が同じ意見でないと気分が落ち着かないと考えると議論が感情的になってまいります。そうではなくて、例えば、アメリカの人と議論をしますと、お前と俺とはどこが意見が違うのか、それが判かれば落ち着くのであります。日本人の場合は意見の違う人がいると、あいつは少数派だとか、異端者だとか、どうも落ち着かない。和をもって貴しとするという言葉の本当の意味は、全体が同じ意見ではないであります。そんな事は人間社会では不可能であります。それにもかかわらず、和という事が全体が同じ意見でなければならないという前提に捕らわれるの、「小異を捨てて大同につく」という諺のように、全体の和の為には、少しくらいの意見の違いは押さえて、全体の和の為に大同につくという考え方です。これは民主主義という考え方からいきますと、どうもおかしいのであります。聖徳太子が「和をもって貴しとする」と言った事の本当の意味は、中国の諺にある「小異を存して大同を求める」、お互いに意見は全部違う、その夫々違った意見を尊重しながら全体の大同というものを求めていく、これが民主主義だろうと思うのであります。小異を捨てて大同につくという事になると、ナチズムとか、ファシズムになっていく恐れがあるわけであります。そういう事ではなくて、何の為に議論をするのか、何の為にフォーラムをするのか、というのは、お互いに誰と誰とがどういう意見を持っているか、意見の違いをはっきりさせる為、そして違う意見が出来たら、「こんな意見もあるのか、あれは参考になる。」とか「あの意見はどうも納得が出来ないどうしてそういう意見を出したのだろうか」とかその背景を見ながらお互いに学び合う。自分の意見を尊重して欲しければ相手の意見も尊重しなければなら

ない。自分の意見が一番正しいと皆んな思っている、しかし相手も相手自身の意見が一番正しいと思っているわけでありまして、お互いにそれを尊重しあって全体の大同を求めていく、これが民主主義の基本だろうと思います。ですから色々な意見を出して下さい。出来るだけ異なった意見が出て来た方がみんなの為になると思います。ここは決議機関ではありません、お互いに己の足らざるところを他の人の意見に謙虚に学ぶ。ただ、発言について一言注意しておきます。一人の人があまり長く喋ると他の人の喋る時間が短くなります。ディーンがオリエンテーションでおっしゃったように時間というものは万人の共有物であります。一人だけで独占しないように。ロータリーの世界会議では、皆の為に一人の発言時間を制限する議事規則をもっています。しかし、ここでは発言の時間は制限は致しません。その事を覚えて皆の時間を大事にして下さい。意見を出す事は、自分の為ではなく、皆の為だと思ってどんどん意見を出して下さい。ではA班からここに出て来て、先ずまとめを発表して下さい。

### ▲班

- 1. ボランティアについて
- 2. 住みよい街づくり
- 3. 青年団活動などの活発化
- 4. 地域社会における人間関係
- 5. 教育について

#### 問題点として話し合った事

1. ボランティアは義務的ではなく、自然にやればよい。  
しかし、或る程度は義務的にしなければ駄目なのではないか
2. 住みよい町というのは水や空気が美しく、公害のない、天災の起こった時にも生命の保証がある。駅への交通の便がよい所。そんな町作りをしよう。  
よりよい町作りの為に我々は何が出来るか?又必要か?
3. 青年団活動の活発化をしょう。青年団活動はあっても自分の生活が忙しくてあまり参加出来ない。
4. 自分が住んでいる地域社会でのコミュニケーションの輪を広げ、災害の時などに助け合える人間関係を作つておくべきだという事です。  
都会では隣に住んでいる人の顔も知らない場合もあるのにどうしてコミュニケーションをしていけるのだろうか?
5. 小さい子供の頃から家庭や学校、地域に於いてボランティアが自然に出来るよう環境作りをする。今の大人は本当の意味でのボランティアという事を子供に教えられる人が少ない。

#### まとめ

様々な問題があるが、それを今すぐに解決する事は不可能である。しかし自分なりに意識を持つ事、努力をする事が今の青年の役割だろう。青年の役割が地域社会の創生につながると思われる。

## B 班

### テーマに対する疑問

地域社会の中に果たして青年の役割はあるのか?  
又その役割を果たす事が出来るのか?

#### 1. 地方に於ける若者の方離れ、この事によって村の不活性化につながる。

地方に於ける老人問題の実態についてレポートする。

レポーターはかつて4人に1人が老人という島に住んでいたが、そこでは本来なら病気を直す病院がお年寄りのコミュニケーションの場となっている。

老人にとって住宅問題も深刻。1980年代後半にはゴールドプランというのが出されたが老人ホームやホームヘルパーを増やすとか、病院のベット数を増やすとかの目標があまりにも高過ぎて実際はまだまだ足元にもおよんでいないという状況。  
今はやはり老人の住みにくい世の中である。

☆ 老人に対して若者達に出来る事。

<建前>

お年寄りを大切にする心を持ち、先ず身近かなことから手掛けたい。

バスや電車の中で席を譲ることに始まり、近所のお年寄りにも面倒くさがらずに挨拶を交わしたい。

休日を利用して老人施設への訪問やボランティアとしてかゝわる事は孤独な老人を少なくする事になると思う。日本の老人の自殺者が多いというのは回りの話相手がない事も重要な問題と思う。

今後の希望として青年だけではなく、退職後まだまだ力のある人にも体の不自由な人の手助けをする制度を作る事も大切。

<本音>

相手の心や生活の実態も知らずにボランティアが出来るのか?先ず相手の事を知ろう。

☆ 地域社会について

<建前>

近所づきあいに始まり村や町の青年団、消防団に参加し、地域のつながりを日頃から強める事が大切。

<本音>

町の事が嫌いで社会参加は出来ない。先ず町の事を知る事に始まる。

教育にしても相手を蹴落として進学するという教育をしておいて、いきなり思いやり教育などと言うのはおかしい。

子供の個性を奪っておいて週2日の休みにゆとりの時間、奉仕をというのはおかしい。企業にしても社会に奉仕するといいながら、地震のボランティアに行きたいと言った若い社員を見殺しにしたり、首を切った例がある。

#### 2. 現代の若者の実態。

☆ 若者の1人の例 帰宅後テレビを見ながら夕食。その後は自分の部屋に閉じこもってパソコン通信。パソコン通信の相手の顔は知らない。明日は町内の運動会だが、行くのはやめて今夜は徹夜でファミコン。

### 3. 何故このような若者が増え続けるのか？

<社会人、企業戦士の立場から>

自分自身仕事をしていて、上司から教えられるのは

人を信じないで、切り落としてでも這い上がらないと、世の中は生きていけない。

自分自身を殺して企業人間にならないといけない。

毎日が自分の事だけで精一杯で、人に対してクールになる。

そのような現状ではボランティア等と言っていられない。

### 4. ボランティアを問う。

大人達の求める命がけのボランティア

若者達の出来る自己満足のボランティア

<自己満足のボランティアは本当のボランティアではない。ボランティアとは命がけです。老人の孤独な寂しさを若者が分かる事が出来るか？私達は無力です。私達で話し合い実感した事は、老人達の寂しさを限りなく自分の事のように感じる為事実を知らなければならない。もっともっと勉強して、いつか命がけでボランティアが出来る時代が来た時にリーダーとして先頭に立つ事を誓いましょう。

## C班

現在のボランティア活動

地域社会の問題

1. 現在の社会に於いて我々若者は小さい頃からボランティア活動の教育はあまり行われていなかった。その為社会的なコミュニケーションをとる事が苦手である。

☆ まずそれを変えていく為に自分から積極的になろう。

日本の保守的閉鎖的な風習が影響しているが、人と違う事をする事に抵抗がある。

挨拶をする、ごみをひらう等の小さい事から始めるのが大事。

2. 地域社会においてその枠組みを考えていく上で、基礎の単位は家庭である。

家庭での親と子供の共に過ごす時間が少ない。塾通いや個性を奪う勉強等で家庭が圧迫を受けているのが現状。

☆ 円滑な家庭生活や社会生活を送るには社会資本である図書館、スポーツ施設、社会福祉施設等をいかにうまく利用していくかが大切なポイントである。

☆ 老人ホーム等は高齢化社会にあって絶対数の不足があるが、これをどうして満たしていくかが問題。

☆ それが満たされた時、お年寄りと若者との交流を図っていくかが大きなポイント。

## C班よりの提案

1. 国と地方公共団体、各種ボランティア団体知識人、若者を含めた人達のシンポジウムの開催を提案したい。

その目的は行政との連絡調整とか、県と市との相互調整をどのようにすればよいのか、様々な先生方の意見を聞いて考えていきたいと思う。

若者には活力、勇気、感受性がある。それを生かせる知識を深めながら行動に移す方法を考えたい。

2. 参加する側の意識改革も重要。実際ボランティアという話になると、初めの第一歩が踏み出せない。シンポジュームで問題点を聞けば第一歩につながる。

## D 班

### 地域社会のイメージ

地域社会の問題点

理想の地域社会

理想の地域社会実現の為に我々が出来る事は何か

#### 1. 地域社会のイメージ

自分の住んでいる地区の地理的結合。

小中学校区の一つのまとまりと考える地域集団

地区に於けるイベント活動、廃品回収を行う青年団、町内会等の集団

実生活上のまとまり（集団）として日本を構成する最小の単位、その単位が国や国際的にもつながっていく。

#### 2. 地域社会の問題点。（四国と兵庫では違った問題点を持っている。）

四国では地域の過疎化が問題となっており、なぜ地域が過疎化するか考えた時に活力不足、地域の魅力不足があげられた。

大きな都市では住んでいる地区の人々とのつながりが薄く、隣に住んでいる人の顔も職業も知らない状況が多い。町内会活動も上滑りで上べだけの人間関係になっている。

#### 3. 理想の地域社会

仲間意識のある社会、表面だけでなく、奥深くまでお互いが付き合える社会。

活気、魅力のある、若者を魅了する社会。

#### 4. 理想の地域社会の実現の為に我々が出来る事は何か

若者の自己啓発の為のセミナーなどを数多く利用し、一人一人の意識の向上を目指す。

何事に対しても積極的な考え方や柔軟な発想を持つように意識的に自らの内面を改善していくよう、自分自身で鍛える事が必要。

自分に身についた技術その他を自分の職場や地域に生かしていく。

これが最初のステップかもしれないが、理想の地域社会を創生する上に必要ではないか。

### ロータリーへのお願い

私達も何か活動したいと思っています。又した事もあります。しかしいつも障害が出て来ます。それは私達の意見が素直に通っていかない事にあります。

私達の意見にも耳を傾けて力を貸して下さい。

リーダー ではこれで各班の意見の発表を終わらせて頂きます。今から討議に入りますが、先ずボランティアについて、という論点が四つの班に共通であろうかと思います。A班ではボランティアについて、義務的に求められないとなかなか動けないという意見もございましたが、これについて、ボランティアとはそういうものではないとか、同じ考え方だと、意見があつたら出して頂きたいと思います。

発言者 義務的であれば、簡単に人も集められるし、効率的な事も出来ると思います。でも、それはボランティアの語源のボランタリーではないと思います。強制的にされたボランティアらしきものをしてる人はよく考えてみて下さい。それはもう、自由意志や一人一人の人権を侵害しています。ボランティアというのはやはりボランタリーであるべきだと思います。

リーダー ありがとうございました。ボランティアというのは義務的であつてはならないという意見が出ましたが、他に意見はございませんか？

発言者 B班の考えもA班に近く、まず始めは義務でいいという考え方です。何故なら、今の若者が、ボランティアの意味を本当に考えられなくなっているというのが事実としてあるわけですから、ボランティアをそんなに親身になって命がけでやるのは、絶対不可能だという結論に達しました。だから、始めは義務であっても、そこが第一のステップだと思います。

リーダー 今、やはり第一のステップは、義務的なことからでも始まっていくべきだという意見がでましたがどうでしょう、他に何か意見がございますか？

発言者 私も実際ボランティアをした事があるのですが、私の場合は又別でして、教室があって興味はそれ程ないのですが、コースでしたから7回位の講座を受けました。目的があってやったのではなく、やった後で考えた事なのですが、ボランティアする事によって、色々な社会にある問題が見えて来る、それを考える事が出来て、実際にその問題を解決するにはどうしたらいいか、そういう所に自分の考えが広がっていった、という事がよかったです。

リーダー 今のご意見は、簡単に言えば、ご自分を磨く為にやったと考えていいのですね。ではボランティアやっていて楽しかったですか？苦痛でしたか？

発言者 楽しかった。

リーダー 楽しくやった人と、苦痛を感じながら義務的にやった人と色々あると思うのですが、その点はいかがでしょう。ありませんか？

では、ボランティアというのはどうなんでしょう、辞書を引くと義勇兵という訳も出ていますが、後でロータリアンの方にもご意見を伺いますが、本来この世に生まれて来て、やるべきものと考えるか、そうじゃなくてしょうがないからやるんだと考えるのか、どうでしょうか？もう一つ、ボランティアというのは車椅子の手伝いだけなどがボランティアではない、そのへんはいいですね。

発言者 昨日の晩キャビンタイムの時に、うちの班の鳥羽君は、トイレの掃除をしている人もあるが、そういう事は人間としてやるのは当たり前だから、それをボランティアと言うのにはちょっと抵抗がある、と言って僕達もそういう話をずっとしていました。そ

そもそも、どれだけの事をすればボランティアと言われるのか、ボランティアというのは、そう言う作業のレベルで分別するものじゃないと思うのです。やはり本人が誰かの為に、自分が少々損をしても何かして上げようという気があれば、それ自体もうボランティアになると僕は思います。

リーダー 今の説明に補足する事がありますか？ 今のご意見に対して自分はこう思うという意見があつたら出して下さい。

発言者（R） 私はボランティアというのは、自然発生的なものであろうと思います。人間以上のものでもないし、人間以下のものでもない。人類になってから、人間が集団生活を始めた時に、住み慣れた場所というギリシャ語はエーツスという言葉ですが、そのエーツスという事は、お互いに人間としてのルールを守るもとはそこに出来たわけです。そのルールの中で、一つの地域というものを初めて人類が作った時に出来て来たのが、頭の中で考えていったのが倫理で、そして自然に発生していったものがボランティアだった、と言われております。食料を調達してくる時に、病気の人だと、今でいう男手のないようなファミリーに対しては、みんなが色々なものを分け与えていった。日本のボランティアの原点は、四国の靈場八八ヶ所のお接待の心、形としてはこれが始まりではないかと思われます。そのお接待を分析してみると、思いやりの心でもって回って来られる方に接するという事。もう一つは、そういう方と共に地域の活性化がはかられるという事、自己研鑽の場であった事、それは分析した結果であって、あくまでも自然発生的に起こったもので、人間というものはハート＆マインドの中から考えていけるのではないかと思います。日本の場合は、古典芸能もそうですが、形から入る、というのが得意な思考パターンなので、やはり、日本の若い人だな、ということを先程からしみじみと感じておりました。

リーダー ありがとうございました。先程B班で、大人が求める命がけのボランティア、自己満足のボランティアというのが出ていまして、自己満足のボランティアしか出来ない、事実、老人の気持ちが分からぬという事と、勉強不足の為に、事実がよく分かっていない、事実を知れば、大人の求めるボランティアが出来るのではないか、という事をおっしゃってましたね、これについて大人の求める命がけのボランティアというのが、具体的に何がありますか？B班の方。どういうボランティア活動をおっしゃつているか。

発言者 命がけのボランティアというのは、キャンプファイヤーの時の話を使わせて頂いたものなんですが、大人達が期待しているボランティアとしての社会参加と、若者が今すぐ出来るボランティアとが多分かけ離れているのではないかと私は思うのです。だから、その差を表す為に、命がけのボランティアという言葉をわざと使わせてもらったのです。私は震災後、職員組合で1ヶ月間芦屋の方にリレー方式で行ったのですが、全てが自発的に来て頂いた方ではないのです。若い方の風潮に「いいことするのは恰好悪いじゃん」「何、ボランティアなんかしてるの？かったるいな」ボランティアするのが恥ずかしいという風潮があるのですが、それに対して、ボランティアに社会の壁というのがあるのです。学校、家族、企業等現実を直視したら、色々な理解がない為に、青年は現実に自発的に動ける力を持っておりません。どうしても傍観してしまうのです。「ボランティア、しんどい、忙しい」と言った青年が戻って来た時「非常に為になった」というのです。目に見て喜んでくれたから次ぎもいきたい、と言う声もかなり聞きました。これからもロータリーさんしかり、行政もしかり、義務的というよりか、機会を与えるという方向で、若い人のボ

ランティアの心を引き出していく事も大切だと思います。

リーダー ありがとうございました。素晴らしい意見だったと思います。義務的かどうか、という事は置いておいておきましょう。やはりボランティアをして、喜びを感じるようでなければ長続きもしないだろうと思います。今朝新野先生がおっしゃった「誠の幸福は人助けから」というロータリーのテーマがありますが、やはりそのへんの気持ち、人を助け本当に喜んでくれたのを見る時、自分も幸せになる。人間というのは共同社会の中で生きてています。一人だけでは幸せは得られないのです。例えば、私が落ちぶれて乞食になれば、私の親友はその限りにおいて幸せではありません。反対に、私の親友が落ちぶれて乞食になれば、その限りにおいて私は幸せではありません。自分の幸せはお互いに相手が幸せである事が条件です。同じように自分の妻、子供との関係、そういう連帯感を家族だけでなく、自分の地域社会の人達に、職場の人達にとだんだん広げていって、世界中の全ての人達との関係で幸せの条件関係をとらえていくと、自分が本当に幸せである為には、世界中の人も幸せであってほしいと思うし、それと同じように世界中の人もそうであるという事をとらえて「世界中のどこかの片隅に一人でも不幸な人がいる限り、我々は永久に幸せになる事が出来ない」と言い切った国際ロータリーの会長がありました。インドのカルカッタロータリークラブのニティッシュ・ラハリーという有名な会長です。この事は、今の加藤君のおっしゃった事と結び付いていると思います。ボランティアをして、おばあちゃんが喜んでくれた事はうれしかった、とおっしゃいました。これは、心理学者もおっしゃっておられる事で、RYLAにも何回か来て下さった関西学院大学の田中国男先生が、心理学というのは建前は関係なく、冷酷に人間の心を見つめて、どういう心の動きをするのか、ということを見る学問だという事をおっしゃいました。そして「人間の本当の喜びというのは、自分が何かをした事によって相手が喜んだことを知った時、これが本当の喜びだ。人間はこの本当の喜びを取り戻すべきだ」と田中国男先生はおっしゃいました。では、人はどういう心で動くのか、という事を考える時、その事も頭の片隅に入れておいたらいいのじゃないかと思います。他にご意見はございますか？ボランティアというのは、例えば、須之内ガバナーは自然発的に出て来るものだとおっしゃいました。自然発的に出て来るものだと思っておられる方他にございますか？

発言者（R） 今は震災のすぐ後ですから、非常にボランティアというのが直結しているという感じが致します。ボランティアというのは、日常生活にいつも付随するものではないかと思います。ここに、誰かがしなくちゃいけないがする人がいないとか、それをする事によって時間的、経済的或いは体を使う、というような犠牲を伴うかもしれないが、誰かがしなくちゃいけない仕事があって、する人がなかったらそれをする、というのがボランティアじゃないかと考えております。

リーダー ありがとうございました。受講生の方でこのご意見に対して自分はこう思っているという方があれば

発言者 今までのを聞いて、ボランティアをして楽しかったかという事ですが、私は、私の学科が社会福祉学科なので、ある程度他の人よりもボランティアという事にかかわりやすいので、キャンプに行ったり、週に1回老人ホームに行ったり、ハンディキャップを持った人の作業所に行ったりする事はとても楽しい事です。もともと、祖父母に可愛がられて育ちましたので、お年寄りと接するのがすごく楽しいので、私たちがして上げているの

じゃなくて、私たちが色々な事を教えてもらったりして、ボランティアとして上げるという考え方には、あまり好きじゃないのです。義務的というのがありました、それはアメリカとかで、小さい頃から両親に連れられてやっているから、大人になっても自然に出来る事だから、やはり何も判断しない小さい頃は、大人が連れて行って上げたりしたらいいんじゃないかなと思います。唯、やる時に、私は前に知的ハンディキャップと脳性麻痺の人達のいる作業所に手伝いに行ったりしていましたが、お父さんお母さんがどうしても泊りがけで行かなければならぬ時等に、泊り込みの事業をやろうとしたのですが、そのお母さんは、私達は命がけで子供を守っているから、あまり安易な気持ちで手伝ってほしくはないと言われました。する側は、もし義務的にするのでも、責任を持って長続きのする事をやらないと駄目だと思います。単発でする事もいいものもあるのですが、長続きするという事は大変ですが、やるからには、義務的にでもある程度の心構えを持ってした方がいいのじゃないかと思います。

リーダー ありがとうございます。今のご意見に対して他に何かご意見はありますか  
発言者（R） 論旨が外れるかも分かりませんが、今回の震災で、伊丹も例外にもれず大変な被災があったわけです。ボランティアボランティアというけれども、ボランティアなんてそんな結構な事を言うてられへんけれど、身近かに今しなければいけない仕事＝ボランティアの違いはどこにあるんだろうと考えました。不動産という私の仕事柄、借家が崩壊したり、お世話をさせてもらったりした家が壊れたりして途方にくれている所に行って、色々カウンセリング、或いはケアをする、勿論錢金にもならないし、ボランティアと仕事の区別ってどこにあるのだろうと実に疑問なんです。皆さん神戸に行ってボランティアというのは結構な事なんだけど、しなければならない事が、道を歩いていても、どこにあっても沢山あるんですね、テレビの報道などを見ると、神戸へ行ってるのが恰好いいように写りますが、僕ら神戸に行って助けて上げようと思っても、今は片付けなければいけない問題が山ほどあるのです。ボランティアと仕事の違いというのはどこにあるのか、そういうところに疑問があったので、逆に意見を聞かせてもらえたと思います。

リーダー ありがとうございます。加藤さんが仕事とボランティアとの違いはどこにあるのだろう、という質問を投げかけられましたが、何かご意見ございますか？ 例えば、私の友人のロータリアンの眼科の先生ですが、地震によって診療所は崩壊して、ご自分の家も一部損壊だったのですが、崩壊したその時から、仕事はほったらかしで、沢山の死者の検視や避難民の船に乗り込んで医療行為をずっと続けられて1ヶ月間家に帰ってないです。これは先程大人達の言っている命がけのボランティアのイメージにあたるのかどうか知りませんが、兎に角自分の職業はほったらかしにして、それにうち込んでおられたんですね。弁護士の人達も、仕事をほったらかしにして、報酬のほとんどない、借地問題の110番で走り回っていたり、それは仕事を通じてのボランティア活動だらうと思うのです。加藤さんの今言われた事とちょっと違うかもしれないけれど、確かに、神戸や芦屋に行ける人はいい、自分の地元の中でやらないといけない事がいっぱいあるじゃないか、ご自分の仕事を通じてそういう事が山積している場合、ボランティアと仕事の関係はどうなるのか、という事だらうと思います。受講生の皆さん方で、職業を持っておられる方、そのへんの事を疑問に思われた方があったらご意見をおっしゃって下さい。確かに、ロータリア

ンの場合でも、神戸市内に住んでおられたロータリアンの方は、事業所も住居も全滅している方も多いのです。そうなると、ボランティアどころか自分の事業所を立て直さなければ、社員も路頭に迷うといった場合、それは同時にボランティアでもあるのです。ボランティアというのは、自分以外の人の為に何かをするという事からすればその概念にあてはまらないのですが、そのへんを突き詰めていってどうでしょうか？なければ後で今井先生にまとめて頂きたいと思いますが、一応こう言う考え方も一つあると思います。私達は共同社会の一員ですから、私達は地域社会に生まれてそして育てられていく、人は15歳位になるまでに大体200万人位の人の世話になっている。どういう事かと言いますと、お父さんお母さん、ご飯を作ってくれる人、お百姓さん、着物を作る人、そういうように考えると人間が15歳に育つまでには、それ位の人のお世話になっているといいます。それから成長していって、また何百万人かの人の世話になる。だから、人間というのは、自分一人では育つわけではなく、自分がこれだけ育って来たのはお世話になったのだから、そのお世話になった人に何らかの事を返していく。これは義務でもなんでもないのだけれど、そのへんのところから、ロータリーが地域社会に対するサービスだとか、奉仕だとか或いはボランティアだとかの考え方方が生まれて来る一つの基盤があります。最近ボランティアという言葉が、随分色々な意味に使われています。先程、自己満足的なボランティアと、おっしゃってましたが、いい恰好する為にボランティアやっている若い人達にボランティアの為のボランティアがいるのじゃないかと議論する人達もいる、ボランティアという言葉の中には様々な言葉の態様がある、だからこの議論をする時はそのへんの整理も必要なのでありますが、単純に言ってお世話になった所には返していこう。これは職業の社会でもそうなんです。会社を円満に発展させる為には、会社が儲けさせて頂いたその原因を作った人、まず株主、お客様、会社自身、従業員にもその利益を還元していくという考え方、先程出ていましたNPO、(Non Profits Organization) 利益を求める事ではないという事ではなくて、お世話になった原因の所へ全部還元していくという考え方方が一つあるだろうと思います。これはボランティアという広い概念が出て来る底流に流れる一つの思想かと考えられると思うのであります。一応ボランティアの事について今井先生まとめて頂けますか。

今井 私は、ボランティアの話をしません。と言いますのは、明日野尻先生がお話して下さるテーマは「高齢化社会と青年の役割」ですが、内容は福祉社会とボランティアということです。野尻先生がボランティアの話をゆっくりして下さると思いますので、ボランティアの話をまとめてするという事はありません。唯こんな事を感じているという事をちょっと聞いて下さい。私はここで初めて肢体不自由児のキャンプをしました。その肢体不自由児のキャンプにボランティアを学生から募集しました。もう40年前の事ですから、体の不自由な子供のお世話をする事は、何か英雄的な気持ちだったのかもしれません、ご奉仕をして下さる方が沢山おられました。その方々に色々なお願いをしました。「あなたは子供達のご飯を作る仕事をして下さい」「あなたは水泳のプログラムの指導をして下さい」「あなたはこの子供達が疲れたら身体的なお世話をして下さい」「あなたはすまんけどこのキャンプサイトのごみを集めて下さい」その時、子供達に何かを指導したり世話をした人は何かいい事をしたような気持ちになるし、ごみ拾う人はつまらない仕事をしているのではないかと錯覚を起こす。これは嘘です。ボランティアとしてこのキャンプで子供達に気持ちよく過ごしてもらい、色々な世話をし、子供達が新しく生きる勇気をもって

帰ってもらおうという事を捧げようとするならば、その子供達の水泳訓練をするのも、子供達が毎日気持ちよく過ごす為にごみを拾うのも同じようにボランティアの役割だと思います。ボランティアというのは、そう意味においては自発性という事です。ボランティアというのは何か大きな仕事をするのではなくて、その事を通して私達が持っている地域社会が豊かになるという、そういう心を持つならばそこでやるところの行為そのものが何であるかという事はあまり関係がない、大事なのは自発性という事です。それは仕事であろうとなんであろうとあまり関係がない。今度の震災の場合にも、お年寄りの人達の為にお医者さんのボランティアが沢山おられました。これはお医者さんのボランティアは、自分の医師としての専門的な知識と技術を用いて診療してくださったのです。診療するのは病院でしているのも避難所でしているのも同じ行為であります。避難所でするのはボランティアです。加藤さんはボランティアとして神戸に行かなかったと言われました。でも加藤さんは加藤さんのお仕事を通して、金儲けの為ではなく、加藤さんの知識と経験でもって被災者に一生懸命アドバイスして上げられたのは立派なボランティアです。ボランティアというのは、お医者さんが医療行為をする事は医者として当たり前の事でボランティアではないではなく、私達がどこに自分達の心の自発性があるのか、何を捧げようとしているかによって決まつてくる事を考えれば、ボランティアというものは、ごみを拾うことからもっと重荷を負う事から色々な事が出てくるだろう。もう一つあるのです。その自発性を持って、自分達が何かをやりたい、これが社会の為に或いはあの人の為にと考えた時には、その限りにおいて短い時間であろうとなんであろうと責任がいるという事です。ボランティアというのは百万円貰う人も、何も貰わなくても百万円もらう人と同じような責任を自分自身が負う所にボランティアの命があるのだ、という話を昨日致しました。ボランティアについての概念やその他について野尻先生から明日ゆっくりお話を聞かれると思いますのでこの程度で。

リーダー ありがとうございました。ボランティアに対する議論は、これで一応打ち切っておきます。次に、地域社会の問題に入りたいと思います。D班から出ていた地域社会のイメージという事で、色々な意味で地域社会をとらえておられる、それはそれで結構だと思います。例えば、自分の住んでいる所の地理的な結合、それを地域社会と考えて頂いても結構であります。それに対して、これからそういう物を作っていくという時にどう考えたらいいのか、という風にご理解下さい。だから、夫々の意味で地域社会を考えていればよろしかろうと思います。ポーラさんからの国際的なつながりでは、日本も一つ地域社会だという意見がありました。そういう考え方方は確かにございます。自分の住んでいる地域をコミュニティと言いますが、概念一つだけにとらわれるのではなくて、ロータリーの場合も地域というものを更に広げて、国際社会という言葉もあります。ナショナルコミュニティという概念はございませんが、地域社会の次は今度は世界を一つのコミュニティと考える。ワールドコミュニティという考え方、ですから、日本全体を一つのコミュニティという考え方にも十分成りたつと思います。特に、今日ここで取り上げているコミュニティというのは皆さん方の住んでおられるコミュニティに焦点を絞って頂ければ結構かと思います。そこで問題点がありますが、農村の若い人達が都会へ出て行って農村は過疎化し、現象としての村を見た場合ほとんど青年はいないじゃないか。青年がいなければ役割も何もないじゃないか、という問題が出て来ている。都会には若者が集中しているけれ

ど、昔の村のようにコミュニケーションはありません。コミュニティという連帯感もなくなって来て、又別の問題が出てまいります。コミュニティというのはコミュニケーションのある社会をいうのでありますから、コミュニケーションがなくなるとどうしようもないわけです。先程の、村に若者がいなくなったから若者の役割そのものがなくなったという考え方、これに対して何かご意見はございませんか。

発言者 バズセッションの時には思いつかなかった事で、今話を聞いていて思いついたのですが、コミュニティというのが、あくまでもコミュニケーションをする場所であるというならば、何故土地にこだわるのか？何故かなと考えると交通手段が発展していない所では遠くにいる人に喋るよりも隣の人に喋った方が密に連絡が出来るという事。今井先生のお話にあったアルビン・トフラーの第三の波の中でも農耕社会ではそうだったという事を記憶しているのですが、産業化社会になって、工場の周りに人が集まる方が便利になり、だんだん人が集中し、それで農村の過疎化が起こる。それはある程度仕方のない当然の事なんです。これから高度情報化社会になると、交通よりも通信の方が重要になって来ると思います。電話が発達していれば、近くの人と喋ると遠くの人と喋るのは同じになります。そうすると地域の地に拘る必要はなくなって来ます。そうなると何も集中する必要はないじゃないかと。都会には交通の便がいいとかの利点はあるけれども、空気が悪いとか、物価が高いとかの欠点もありますから、利点と欠点の比率がだんだんと狭まって来る時期があるのではないかと。そうなったら過疎化というの自然に消滅するのではないか、というのが僕の意見です。

リーダー ありがとうございました。大変面白い発想だと思います。皆さん今のご意見、地域に拘る事はないじゃないか、という意見が出てまいります。確かにコミュニケーションでありますから、コミュニケーションがとれたら別に自分の地域にこだわる必要がない、それは確かに一つの意見だと思います。そういう発想から、実は、先程私が申し上げましたワールドコミュニティという発想が出て来ます。交通が便利になり輸送が安易になると、例えば、私達が祖先伝来、日本だけの食べ物だと思っていた鯛はアフリカから来ますし、蛤は韓国から、ししゃもはオランダから来るという現状で、大阪の商社は世界中の商社とコミュニケーションがとれています。コミュニケーションがある社会という事で地域性をなくしてしまったら国際化、情報化、交通手段の発達で地球が非常に小さくなっています。人口衛星によって、いつでも外国の出来事が茶の間の話題になります。その様に情報化社会、国際化社会が非常に便利になって來た。そうなって來ると、地域性というものはないけれども、コミュニケーションは世界中かけめぐる。ワールドコミュニティという考え方方が出て来る。だから、日本全体をナショナルコミュニティという考え方方は当然出て來ていいわけです。或る所に八百屋が出来、魚屋が出来、家が何軒か出来る。治安の中心として駐在所が出来る、学校が出来る。宗教心の中心としてお寺や神社、教会が出来る。そしてそういうものを中心として或る情報のまとまりが出て来る。村とか、市とか、国家、ナショナルコミュニティというもので権力を統合していきます。國家が集まって国際社会というものが出来ていくわけであります。当初のコミュニティの発達というのは、そういう意味では、或る程度の地理的なものを基盤にしたまとまりから出発しましたが、地域社会をどうするか、という問題について、コミュニティを主体に考えればどの範囲をコミュニティというのか、と言うと、これは国によっても違います。ヨーロッパでは、昔は教会

の鐘の聞こえる範囲をコミュニティと考えたり、アメリカでは幌馬車で一日に往復出来る範囲をコミュニティと考えたり、国によって様々あります。異民族ではなく、血縁的なものゝ上に乗っかったコミュニティというのもあります。色々な意味がありますから、夫々の概念で、地域社会とはなんだろう、地域社会を創成させていく為に一番必要な条件はなんだろう、というところで考えて頂いたらいいだろうと思います。何かございますか

発言者 今、深川先生は大変国際的な事をお話になりましたが、逆に小さいコミュニティという言葉はどういう風に使ったらいいのだろうか？ 昨年貴重な経験を致しましたのでご報告させて頂きます。昨年8月にエイズの国際会議が横浜で行われました。「エイズであるという事を知り得た医師はこれを人に漏らしてはならない」守秘義務と申します。漏らした場合には6ヶ月の懲役をくらうという恐ろしい法律がございます。これとは全く別に、コミュニティナーシングと言う言葉が外国の方から発言されてまいりました。あい矛盾するのでございます。医者は漏らしてはならない、しかし、患者をコミュニティナーシングをやらなければならぬ、というのはいったいなんだろうかと言う事で、皆で考え合いました。そうしましたら、コミュニケーションより小さく、心ざしを同じくする人間の集団である。そこには誰にも言つたらいかんけれども、彼はエイズなんだからアッサー君になってやろうとか、困った時には助けてやろうじゃないかとか、こういう言葉を経験致しました。もう一つ、精神保険法というので、社会復帰というのが今盛んに言われております。こういう時に会社の中の或る一部分の方にこれを知ってもらって、社会復帰した人が、3日に2日さばってそれで首になるというのではなくて、徐々に徐々に社会に慣らしていく為には、どうしてもそこでコミュニティというが必要になって来る。以上。深川先生のインターナショナル的な事から全くミクロなコミュニティを申し上げました。

リーダー ありがとうございました。お医者さんの大島先生から、コミュニティという事について一つの非常にミクロな発言がございました。志しを同じくする集団というのもコミュニティと考えていいのではないか、それは議論にもなった。これは実は、先程D班が問題点のところで、コミュニケーションが大変薄くなっている、従って、仲間意識のある社会の事を言ってもいいのじゃないか、と似たような感じではないかな、と思うのであります。大島先生の場合はもっと少なくて、10人でも20人でもいいという極限状況まで設定されておられたようあります。一応、D班の意見も、仲間意識というのは広い範囲ではとても出来ない、そういう意味では、小さくても仲間意識のあるものを地域で作っていったらいいのじゃないか、と理解してよろしいのですね？ そういう意見でございました。コミュニティというのは色々な考え方がありました。ローカルコミュニティからナショナルコミュニティ、ワールドコミュニティというように大きな考え方をする事も出来ます。ここで各班共通したものを見ていきますと、コミュニティの問題として人口問題、老人だけが残って若者が出ちゃった。そうすると一体どうなるのか？ 老人はもう役に立たないからほっとけばいい、それで済まない問題が出て来ると思います。或る地域には老人が多くなった、しかし或る地域には若者もいる、しかし、今度は日本を一つのコミュニティと見た場合、人口問題、その中で老人の占める割合という事を考えて見た場合、不活性だとかそんなもので済まない問題が出て来ます。何故かと言いますと、もう30年もたたないうちに、65歳を越える老人達が国民の26%に達する。簡単な計算でいきますと、100人のうち26人ですから、1/4、4人に1人は65歳以上の老人となる。これを残

りの3人の人で養っていかなければならぬ。現実には残りの3人の内には、赤ちゃんもいれば未成年者もあります。そうすると、2人で65歳以上の老人を養っていかなければならぬ。こういう事は、現在の社会制度ではほとんど不可能なのであります。或る村では老人ばかりになっている、或る都会では若者が多いといつても日本全体で見た場合、2人の若者が一生懸命働いて1人の老人と1人の赤ちゃんを養っていくという事は現在の社会制度では無理なのであります。そういう状況になったら、若い人達は、働いても働いても税金の負担に喘がざるを得ません。今の社会制度、例えば、会社制度、学校制度、農業制度、全ての制度が洗い流されてしまいます。社会の激動といってよろしいだろうと思うのであります。この大激動の津波がもうそこに見えて来ています。私達は、もうその頃はこの世を去っていますけれど、皆さん方が老人になった時、その波をもろに被る、激動の時代をあなた方がどのようにして生き抜いていくのか、という事を今のうちに考えておくのが、これから創成していく地域社会の大きな問題点でもあるし、老人問題=今の青少年の問題でもあるのです。これは切実な問題であろうと思います。このへんについて、皆さん方のご意見がございますか。

発言者 老人の方々の人数が増えるという話なんですが、昨日からの話を聞かせて頂いて、情報化社会という波の中で生きていると、年老いた人達、体の動かない人達の数があまりにも増えると、その人達のケアをする場合に情報だけでは対応出来ない、人が足を運んだり、介護する必要があるといった類いの事はお金だけでは解決出来ないし、どうしたらいいのかなと思います。

リーダー 具体的な解決案としての意見ではなかったのですが、勿論とまどうのですが、正直言って皆さん方が一番とまどのです。これについて何かご意見はございませんか。ロータリアンの方も何かご意見のある方は

発言者（R） いいたい事は、沢山子供作ってもらう事なんです。若いあなた方に出来る事はそれなんです。今言つたように、年寄りが増えたって大丈夫ですよ。ロボットがしますよ、現に今、お茶摘みなんてロボットがしています。温室栽培で色々な事をしているけれども1人で昔の人の10人分位していますよ。これからロボット産業が流行ますね。けれども人間が減るという事は大変ですから、早く結婚して子供を作つて下さい。だんだんと減ってきますから、老人の事ほつといて増産する事を考えて下さい。お願いします。

リーダー ありがとうございました。

発言者 目の覚めるようなご意見でございました。私もこれから結婚して、人並みに子供も持つたいと思います。しかし、厚生省のエンゼルプランというのを少し読んでみると、不安になって、子供を作つていいのかと、ついつい思ってしまいます。先生のおっしゃるように子供を作る事は当然いい事ですが、社会状況や教育の問題そして保育の問題、日本の女性の雇用状況が常につきまとつて子供を作りたいのは山々なんだけど、作れない状況であると。出来たら諸先輩方のお力、そして僕達若い者がもっともっと怒つて、なんとか打破して本当に子供の笑顔が溢れる将来の日本をなんとかしていきたいなと思います。

リーダー ありがとうございました。

今井 この問題は大変深刻な問題ですので、こんなインフォメーションを出しておきたいと思います。昨年は国際家族年でした。そして、その家族年にナイロビで国連の人口問題の会議がございました。どういう事が話し合われたかというと、一つの問題は、家族

年という時に、家族は一番小さなコミュニティだという事が言わされました。コミュニティの単位というのは、お父さんとお母さんと子供達がおるという事ではなくて、そこで言われるコミュニティという事は、父親の役割、母親の役割、子供の役割、こういう役割がお互いに相互に保たれて成立する所の社会がコミュニティなんだ。その意味に於いて共生の社会を作る事が、コミュニティとして大事なんだという事が一つ指摘された事であります。もう一つ指摘された事は、新野先生が言われたように、現在の世界の人口は60億、それを全体世界から見たならば、将来100億の人口を養う事が出来るかという事が問題になりました。全体的には、相当な科学技術の発達がなければこれを解決出来ないという事が人口問題の大きなポイントでありました。もう一つ大変大きな問題は、開発途上国と先進工業国との間の人口のバランスがどんどん、どんどん崩れていくという事です。森先生が大変心配されるのは日本という国は人口が非常に伸びが悪い。女性が一生の間に産む子供の数が1.43になって来た、2.03位ないと2人以上産むでもらわないと同じような人口は保てない。それには日本の社会というものは、大変住みにくい社会になってしまったという事です。コミュニティをとっても仕事をとっても経済的な問題も含めて、もっと言うと、インテリの人は、これから10年後に世界はどうなるかという事を心配したら、とても子供を産めないというような危惧さえ持っていると言われています。そういうものを解決していかなくてはいけないという事が片一方で大きな問題になりました。その時に、開発途上国の人口を抑制していくじゃないか、この人口爆発を抑制していくじゃないか、家族計画をしていくようにという事を言いました。しかし、その事について途上国の人達は、我々のところではまだ人口が少ない、人口が少ないという事は活力がないのだと全然耳を貸さない。その点が大きな問題となりました。世界的な視野でこの問題をどう考えるか、開発途上国と先進工業国との間の問題をどう考えるか、日本はどのような役割をとった時に日本というものの活力が維持されていくのかと考えた時、我々の地域社会を作っていくとする時に、その見地からもう一度人口の問題を考えなくてはなりません。それには世界的な視野で考える事を始めとして色々な角度から考えなくてはならないと言う事が指摘され、激しい論理が展開されました。人口開発会議というのは世界の問題でありますので、若い諸君達はその事を覚え、見ていて下さい。そして大事にその事を考えて下さるとうれしいと思います。これはリポートです。

リーダー ありがとうございました。京セラの会長の稻森和男さんが「宇宙というのは必ず調和がとれるように動いている」とおっしゃっておられましたが、どこかで増え過ぎると、必ずそれを減らすという現象が出て来る。先程おっしゃったのは現在の生活を維持しようとすると、かなり経済的にむづかしくなる、それじゃもっと自分達の生活を切り詰めてやろうというご意見はございませんか？心の問題ですが。今の本当に豊かな日本の生活がずっと経過していき、働く者がなくなり、維持出来ない、どうしようという事になる。それじゃもっと切り詰めたらいいじゃないか、と言う発想はございませんか？今でも極貧の状況の国もあるのです。例えばインドです。カルカッタだけを例にとっても随分前の話ですが、48万人の路上生活者がおり、路上で生まれ、路上で死んでいく人がいるのです。そういう人達が朝ご飯にはありつけるけれども、晩ご飯にはありつけるかどうか分からぬ、昼ご飯なんてとんでもない話です。そういう極貧の状況の人達もいます。日本が高齢化社会になって行った時にそういう状況にならないとも限らない。インドの人達は、今ど

うしているのかと言えば、確かに貧しい生活をしているのですが、心の問題で分かち合って生きているという事があります。やっとの思いで朝ご飯を手にいれます。そのご飯を全部食べないで少し残します。そしてそれを大地の上に花の模様に撒くのです。それは今度生まれて来る時には少しでもいい人に生まれたいという願いを込めて、それを空を飛ぶ小鳥達の為に分けてやります。貧しいけれどもみんなが分かち合って生きているインドの貧しい人達の社会であります。インドには確かに病気で死ぬ人達は沢山います。しかし、餓死する人はほとんどいないという、これも一つのヒントだらうと思うのであります。そういう発想にたったご意見はございますか？そのみんなで分かち合っている社会、というのは、日本で言っている福祉社会の原点を示していると思います。福祉社会というのは、日本のように立派な福祉施設が沢山出来ていって、はたしてそれでいいのかというと、やはりそこに働いている人達に福祉の心がないと福祉社会はなりたたないと思うのであります。福祉施設をとりまく福祉の心がなければ、それはゴーストタウンと同じであります。そういう意味では、福祉社会を作っていくという事だって一人一人の国民のコンセンサスがなければ出来ていかないだらうと思うし、老人問題がどんどんふくらんで世界的な視野で見た場合にもそうだらうと思うのであります。今、今井先生のおっしゃった事をロータリー的な視点からちょっと補足しておきますと、世界の人口がこうなるという事は、実はロータリーは1962年、30年以上前から予測はしておりました。その後ブラジルの経済学者が南北問題を取り上げて、南半球に住んでいる世界人口の70%の人達は、世界の富の30%を分かち合って生きておる。それに反して、世界の富の70%は北半球の先進国が占有してしまっている。オーストラリア、ニュージーランドという例外を除いて、南半球の人達は赤貧洗うがごとき状況で生きている。しかし、南半球の人達は貧しいけれども人口はどんどん増加している。30年前からそういう事を警告したのであります。このまま推移すれば、必ず先進国は今の繁栄を維持する事が出来ないと警告していました。その警告から20年も経たないうちに、インドに飢饉がやってまいりました。ロータリーは、実はその事をブラジルの経済学者よりも早く予見を致しまして、1962年、インドのニティッシュ・ラハリーさんが国際ロータリーの会長になった時に、ワールドコミュニティサービス、世界を一つの地域社会と考えて、それに対して南北問題という事を考えようと言ったわけであります。それにもかかわらず人口はどんどん増えていったので間に合わないというのが現状であります。したがって、コミュニティというのを世界的視野でとらえていって頂いても結構です。ご意見はございますか？

発言者（R） 精神論というよりも極端な意見になるかも判らないのですが、正に近い将来に、働く2人が老人とまだ収入の得られない子供達を養わなければならぬ時代が来るのはもう避けられない現実になっているわけです。そういった中でよく言われておりますように、老人医療の医療費の問題や年金の問題とかで、働く人達の負担がどんどん、どんどん大きくなってしまって、本当にやっていけないのじゃないかなと危惧を我々は抱いているわけですし、若い皆さんはそういう時代にいずれ直面しなければならないと思うわけです。極端な話なんですが、そういう場合の解決の一つというのは65歳の方が働けない、例えば病気がちであって、費用が随分かかるんだという事が前提になっているのですが、一番の解決方法は、ご老人が元気なままで70歳、75歳迄働いて頂き、極端に言えば健康なままで働いて頂いて、ぼこっと亡くなられれば一番の負担はなくなるわけです。

これは残酷な話です。だけど本当の話でございまして、そういう事が、今例えば生涯学習の時代、会社を定年になってもどんどん勉強して頂いて新しい仕事をやって頂く、その中で稼いで頂くという、又社会体育の問題にしても色々やっていますけれども、老人の方が病気にならないように、健康な体で長生きをして頂いて又働いて頂くという事。環境にしてもそうですけれども、人間が公害で病気にならない、医療費もかからないという風に、国民全体として負担をなくしていこうという事。従いまして環境問題にしろ、生涯教育の問題にしろ、社会体育の問題にしろ全て今はつながっているのだという事、そういう事を全てつなげながら、我々の負担をより少なくしていこうという風に考えていかなくてはならないのじゃないかなという風に考えております。

リーダー ありがとうございました。貴重な意見を頂きました。老人問題といった時にいったい何歳から老人かという問題がございます。私は一応厚生省が65歳と言っているから65歳と言っておりますが、私は65歳なんですが、自分が老人だという意識は全然ありません。安平先生のおっしゃるように、老人はもっと働け、その通りであります。私は百働会という全国組織の伊丹支部の会長をしています。死ぬまで働いてばくっと往くというのは一番幸せな死に方であろうし、みんながそうあってほしいと思うのです。働く者がなくなつて来たら働く者を増やしたらいい、単純な論理です。安平先生のご意見には大いに賛成だし、私はそれを実践しています。そういう事も一つの解決策だろうと思うし、又今のあまりに恵まれ過ぎている生活からもっと原始にかえつて、人間らしい貧しさがあつた方が本当の心のつながりが出来るとも思うのです。そういう生活も一度考えてみる必要があるのじゃないかと思うのでありますが、何かご意見があつたら

発言者 私も実は非常に驚いた人間の1人なんです。ほんのこの間なんですが、老人手帳というのを持って来られまして、おめでとうございます、と言われました。年寄りの仲間入りなんて私はもう驚きました。私は年寄りなんて考えた事もない、65歳って誰が決めたんでしょう。そして年金というおまけがついています。私達生きるに当たって65歳の限度というのは、地域社会の中で過去から現在まで続いている、一つもそういう事は変わっていません。人間というものは長く生きようとする、生きてくる。そうなると必然的に制度も変わって来るのではないかと思うのですが、それが一向に変わらない。ですから計算でいくと、さっきから言われたように4人の人が1人の老人を受け持たなければならぬ。これが70歳というような事柄がもしあつたとしたら、その数は減ると思います。もう今は65歳なんていうのは若人でございまして、老人ではございません。そういう認識、というものこれからは変えないといけないのじゃないかと、65歳になった人間が喋っている事ですから間違いない事実です。

リーダー ありがとうございました。唯、若い人の方からはその意見はいいにくいですね、色んな意見がありますが、菊澤さんのご意見もおっしゃる通りです。老人というのは、心の問題で言えばどんどん働いて何時までも青年のように若い人、私よりずっと年上の今井先生なんて私よりもっと若いと思うのであります。全然老人じゃないと思います。老人かどうかというのは確かに年齢だけの問題ではなくて、心の問題でもあるだらうと思います。100まで働く人がどんどん出て来れば、労働力が減るという事は今まで心配する事はないかも知れない。被災した人達は、人生観が変わったという人もあります。そういうこともありますのが何かご意見があつたら。

発言者 話がもどるかもしれないのですが、福祉という言葉を辞書でひいてみると、幸せとか幸福という意味なんです。僕ら一般的に福祉と聞くと、どうしても老人の介護とかの方に考えが行ってしまうと思うのですが、僕らが老人の為に一方的に何かをして上げるのではなくて、老人の方も何を助けてもらえば幸せになれるか、ということがあると思うのです。僕ら若者と老人とが、一つの精神的なコミュニティを作って、その上でお互いの福祉、幸せ、相互的な援助を考えていればいいと思うのですが、何か僕らは一方的に老人の為に何かをすると考えがちになっていると思います。

リーダー ありがとうございました。今のは老人問題や障害者福祉にこだわらないで、福祉という事は、お互いの幸せが大事、国民1人1人がお互いに理解し合い、ささえ合うのが福祉じゃないか、というご意見だと思います。

発言者（R） ここに来ている事がボランティアだと私は思っています。色々な先生方を見ていても、本当にボランティアの塊の先生方ばかりで、生徒の方も、ここに来て頂くというのが、自分の事を捨てて、将来の事を考えるという事はボランティアだと思います。本題に戻って、私は55歳で事業をやってるのですが、早くハッピーリタイヤメントをして、遊び回ろうと思っていました。ロータリーに入ったら、そういう方がいらっしゃって参考になると思って入ったんです。ところが、皆さん最後の最後までがん張ってはるんですね、ちょっと参考にならへんのです。今、深川先生に百歳まで仕事を続けると聞いてちょっとショックで、私の立場はどうなるのかと思いました。子供の事も3人は作るようにと言われましたが、よく考えたら3人を本当に大学迄やれる自信がなかったので2人になりました。何か分からんようになりましたが、

リーダー ありがとうございました。何か分からんけど、よう分かりました。他には？

発言者（R） 仙台からまいりました。今の方から言うとボランティアの塊かもしれません。まずテーマについてですが、「地域社会の創生と青年の役割」ここに集まっている若者にしてみれば「若者達がこれから創生する地域社会での役割」みたいなの方が、自分達は何をしたらいいのかと考えるのに判かりやすいのじゃないかと変えてみたのです。今回のテーマに対してみんなが考える時に、答えが見つからないのじゃないかという事が一つ考えられます。二つ目は、老人の事を心配するなと森先生がさっきおっしゃいましたが、仙台市で「高齢者の社会参加に関するシンポジューム」というの開かれ、そこで最終的に結論の出た事は、森先生のおっしゃった事と同じです。我々は、これから的人生を自分達で楽しむのだからほっておいてくれという、どうも世の中が若い人達に心配をかけ過ぎているのじゃないか、という考え方というのがどこかにあるのじゃないかと思います。どこかの班から情報不足だという事が出て来た事に関して、私は大学の教員として、専任の定年が67歳ですからあと17年も働けるのです。働くかどうかは個人の問題ですが、その後5年は非常勤で働いてもいいという事で72迄働くチャンスがあるわけです。そういう事を考えてみると、今ここに集まっている人が、自分達の住んでいる所で何が出来るか、又日本の事を考えて実行していけるようなリーダーとして考えてほしい、感じてほしいな、と思ったわけです。宮城県でもこのようなRYLAをする予定でしたが、人が集まらないので今回は中止となり、どんな指導者講習会をすれば若い人達に魅力があるのか、地区のRYLA委員として勉強させてもらいにきました。皆さんと同じ釜の飯を食べながら見ていますと、うちの大学の学生もそうなのですが、情報不足というよりも、情報を求

めていないのでは、と僕は思っています。私は朝早く起きるので、ニュースを聞き、何部かの新聞を3時間位時間をかけて新聞の最初から最後までみんな読みます。これで新聞社の持っている特徴がよく分かるわけです。どこの新聞の何を読めば世界の何が分かるか、日本の何が分かるか、本当によく分かると思うのです。今自分達の周りに何が起きているのか、世界に何が起きているのか、今問題にされているものは、本当は情報として入って来ているはずなんです。ですから、情報不足というのは本来はみんなの勉強不足だと僕は思っています。だけど、ここにいらっしゃる方々はそういう事をやって下さっている人達でしょうし、恐らく今後そういう事で勉強して下さる人達だと思っていますので、その事に関しては多分解決出来ると思います。

リーダー ありがとうございました。各班の意見はここに出ていますが、最後に皆さん方この意見をご覧になって、こういう事を考えているという方があればおっしゃって下さい。私のリードが散らばって、と言うのは老人問題をとり上げたものですから大き過ぎた問題であったかもしれません。何か意見がございますか？

発言者 さっきの話を聞いて感想に戻るのですが、やはり高齢化が進むと産業構造とか社会構造とかが大分変わって来て、税制とか、直間比率とか、直接税をもっと下げて間接税をもっと上げていかなくてはならないとか言うような国の税制そのものも変わっていく事をよく耳にしますが、そういう事もひしひしと感じましたし、自分の生活から言うと、社会保険料や厚生年金とか、雇用保険料がけっこう高いなと実際思いますし、公的な介護制度が今度導入されて、それが社会保険方式とかになると、益々我々の負担する社会保険料がどんどん上がって来て、これから大変だなと感じています。子供が少ないというのも、中国の一人っ子政策じゃないですが、例えば二人っこ政策とか、二人になれば税制面で優遇されるとか、そういう制度を積極的に国の方も導入していったらとそのように思いました。

リーダー ありがとうございました。國の方からの制度作りも大事だというご意見だらうと思います。税制の改革では追つかない社会になって來るのは、大変心配だと思うのあります。結局どうなんでしょうか、國家ではなんともならない事態が出てくる。地域社会或いは国家社会に住んでいる1人1人の心に、それを何とかするという、1人1人の心に宿る福祉の心だと共生の思想だとそういうものが以上の全滅するかもしれないし、パニックになるかもしれないし、色々な問題があるかもしれません。私達は、未来的の創生という事を考えた場合、現在の社会の私達の心構えがそれでいいのか、という問題も一つあります。「衣食足って礼節を知る」という言葉がございますが、果たしてそうなのか、日本は豊かであります。しかし私達は礼節を知っているのか？非常に豊かになった為に、却って自分の事だけしか考えないという状況も出て来ています。福沢諭吉先生が「衣食足らずして知る礼節こそ本当の礼節だ」と言う事も言っているわけであります。そのへんのところも考え方でみないといけないのじゃないかな、とも反省は致しております。私は、今度の震災後2日目のまだ異様な雰囲気の電車の中で、私と同年配と思われる男性から席を譲られた経験があります。驚いて後ろにいたおばさんを座らせました。その時日本の地域社会もまだ大丈夫だなという気がしたものです。自分のことしか考えられない混乱の中で、席を譲るという小さな事ですが、その小さな事からしていこうという事が、大事な事でもあるんだなと思います。1人1人の心構えが全体を動かしていく事になると

思うのであります。7月1日から国際ロータリーの会長になるブラウンさんは、世界の平和という事をおっしゃっておられます。その平和というのは1人1人のロータリアンの心の中に、1人1人の地域社会の人の心の中に宿って初めて全体の平和につながっていくのだという事をおっしゃっておられます。“Work for Peace” 平和に献身、という言葉をおっしゃっていますが、これもやはり地域社会の創生にとって重要なモメントであるのではないかと考えている次第であります。あと5分になりました。最後に今井先生にまとめをして頂きたいと思います。

今井 皆さんのお話が拡散したところがあると思いますのでちょっとだけ整理をしておきたいと思います。一つは高齢化社会、老人問題の事が沢山出てきました。明日ここでお話を下さる野尻先生は兵庫県長寿社会研究機構という所で大変大きな長寿の問題、或いは高齢者の問題をどうとらえるかという事にとり組んでおられます。これについては、先程からの話の一つは、私達の社会構造の中で高齢者が増えた時にどんな変化があるか、例えば社会保険の問題が税制を違った形にし、その為に若者の負担が大きくなるのではないか、いやそれは老齢年金を今60歳からというのを65歳、68歳からに延ばそう、或いは70歳に延ばそうとすればこの問題はほとんど解決する。国民健康保険の赤字が非常に大きくなるという問題については、どんな解決の方法があるだろうか？それには健康なお年寄りがどんどん増えて来る事が必要であると。私は神戸市のシルバーカレッジの学長をしておりますが、みんな元気なお年寄りが来ています。健康の問題を考えるというのも大変必要な事だと思います。健康なお年寄りが生きがいを感じるには、健康なお年寄りがボランティアをするという形の中で解決するなど色々な形の問題がありますよ、という事がここで指摘されていいのではないかと思います。さて、その高齢者問題の中で、私達が今日問題にしたものはボランティアの話が沢山出てまいりました。ボランティアの話の最後に、私が一言話したのは、ボランティアというのは自分の心の意的的なものだと。自分の心の中でやろうという自発性が一番大事んですよと、それがボランティアかどうか決める事なんですよと申しました。だけど同時に、ボランティアによって支えられなければならない社会がだんだんやって来ます。私達の社会の構造がだんだん変わるという話をしました。社会の機能化、情報化という事がだんだん進んで来ると、私達の仕事の形態が変わり、労働時間の短縮がはかられると、残った時間をどうするかという問題が出て来ます。社会の中の人と人とのつながりを問題にする事が大事な事だと思います。こうした考えになった時に、意的自発的なボランティアと同時に社会的な意味でこのボランティアがどれほど有効に働くかという事をボランティアが考えなくてはならなくなつて來た。これが新しい課題になります。ボランティアとしてどれほどの技術と知識を持ったらいいか、先程も言ったようにお医者さんがお医者の技術を持って、看護婦さんは看護婦さんの技術を持ってボランティアをしてくれたことがどんなに役に立つたかという事を考えた時に、新しい世界の中では意的形でやる事が望ましいし、本人としても大事な事です。けれども同時にボランティアが社会的な役割をどうとるかという訓練が必要になって来ます。その為に新野先生はボランティアカレッジのようなものを作ったらどうかと言われたのはこの事です。ボランティアもこの二つの事をよく考えながらやっていかなければいけないというのが二つ目の今日の問題でした。三つ目の事、地域社会の創生と言ったにも拘わらず、この問題はあまり出ませんでした。その中で出た一つの事は過疎化という事

でした。これもよく考えて頂きたいのは非常に過密化した社会の中に於ける社会の問題というものをどうしたらいいかとなった時にボランティアの問題が出て来たり、或いは人間関係の問題が出て来たりしました。過疎化の問題についてはほとんど出て来ないという事であります。だけど我々が青年として考える時に、今のような社会構造の中で農耕文明社会と言われた残彩の中で我々のコミュニティを活性化するのか、自分達の住んでいる村でも町でもそこが過疎化になって来るとするなら、その町、村を活性化する事の為には何が必要なのかという問題が出て来なくてはならないのじゃないでしょうか。今そういう提示をして21世紀を考えると恐らく過疎化というものと過密化という事が出て来ると思います。そうなれば、私達のすんでいる場所そのものがそれなりの役割を社会的に或いは世界的に果たすという事の為にどう考えたらいいのかという事が新しい問題になるでしょう。これこそ青年達に投げかけられているもう一つの問題だという事です。決して近視眼的ではなく、そのような意味において過疎化という時にいったいその過疎化は、唯單に自然に消滅していくものなのか、違った形での過疎に対して新しい活性化を図る為にはどうしたらいいのか、若者はどう考えるのか、先程から言われているように、若者しか出来ないような時代に入りつつある時にそれをどうするのか、これが課題だという事をもう一度考えてみて頂けたら有り難いと思います。

リーダー どうもありがとうございました。おつかれのところ皆さんご協力頂き誠にありがとうございました。今後のご健闘をお祈り致します。



## まとめ

今井 鎮雄

この三日間皆さん方が話し合ったり、講義を聞いたりの中で幾つかの問題が提示されて来ただろうと思います。一番最初に私がロータリーの歴史という事について皆さんと考えました。丁度100年前、20世紀の初頭に色々な社会的な混乱の中で、今日の野尻先生のお話の、人と人との間に思いやりがない淋しさを感じたシカゴの町の青年達がお互に心を通わすようなグループを作ろうとロータリーというクラブを作りました。そしてお互いの心の支えになる事からロータリーは先ず始めました。やがてこのロータリーの仲間が先程のお話ではゲゼルシャフト的にお互いの利益のために集まっているけれども、それだけではない、他の人達の為に何かをしていかなければならないとシカゴの町に最初の公衆便所を作ったという話をしました。又障害者の為に色々な仕事をしょうというのでやり出した事がリハビリティションインタナショナルの発祥になったのだとお話をしました。ロータリーはその時代の中の問題とその時代の中の人達の問題をかかえながら、社会の問題と人の問題とをみんなと一緒に分け合っていきたいとこの100年の間続けて来たという話を致しました。この事に共鳴する人が今世界で120万、189ヶ国に及んでいます。その世界の人達は自分達が時代の中で世界のどういう役割をすればよいかという事を考えながら育ってきました。又ロータリーラン達は今自分達が担っている時代の次の時代を作る為に若い力が必要だ。若い諸君達がロータリーの心を持ってくれるような人に育ってほしいというのでロータリー財団の奨学生制度を作りました。大勢の奨学生達が世界中に散らばってgood will missionとしてその仕事をしています。今では世界最大の奨学生の団体になっております。それだけではなく、ロータークトであるとか、高校生のグループであるとか、或いは青年のグループ等を作つてロータリーの事を考えて是非地域社会で働いて頂きたいとお願いをしてまいりました。又 Group Study Exchange というようなプログラムを持って世界中の職業を持った青年達が同じ職業を持った青年達と出会い、研鑽する場所を作りながら国際交流の問題をもっともっと広めていこうとその応援を致しております。その中でいつも国際ロータリーの会長が代わる度に、会長は自分の理想像を描いてテーマに表しています。ところがそれを見ますと殆ど心が一緒であります。今年の会長さんのテーマは“Be a friend”です。友達になろうと日本語で訳されました。その友達になると言う事は何か、この会長は大変熱心なクリスチヤンですからそれを聖書からとりました。これは聖書のサマリア人の話であります。盜賊に襲われた人が瀕死の状態で横たわっている所に、普段説教をよくする牧師さんが通りかかりました。けれども時間がないので通り過ぎてしまいました。何が正しいかよく知っている立法学者も通りかかりましたが彼も通り過ぎてしまいました。そこへサマリア人というみんなから嫌われ、さげすまれている人達が通りかかり、いつも自分をさげすんでいた人が倒れているのを見て一生懸命介抱し、宿屋に連れて行き、宿屋の主人にお金を渡して泊めてくれるように頼んでいました。イエスはそれを弟子に話した後でこの3人の内でいつも愛を説く牧師さんがよい隣人なのか、いつも正しい事を教えてくれる立法学者が本当の隣人なのか、それともいつもさげすまれているけれどもその人の為に何かしてくれた人、それが本当の隣人なのかと質問をされました。「勿論その人を助けた人です」と弟子達は答えました。「ではあな

たも行ってその通りになさい。」とイエスは言われました。あなたも行ってその通りになさい、それが Be a friend です。今までの会長さんは色々な事を言いました。“ Real Happiness is Helping Others ”と言った会長さんもあります。この7月からの会長さんのテーマは“ Act with Integrity, Serve with love, Work for Peace ”です。しかしそれらの事を考えて頂いたらお分かりになるようにロータリーというのは先程の野尻先生のお話しから言うと、おもいやりの心を実践していこうじゃないか、その為に世界の人々が協力しようじゃないか、その為には若い人達も一緒に新しい社会を作っていくこうじゃないか、そういう事です。あの震災の後で大勢の人達が神戸の町でまだ一生懸命働いている時に R Y L A をやらずに神戸で震災の為に奉仕をしたらどうかという意見もありました。でも私達はその事を深く考えてみた時、新しい世界を作っていく為にはそうではなくて、みんなが本当に新しい時代の問題を考え、本当にボランティアとして地域社会をコミュニティにする事が大事なのだと R Y L A を開催しました。私達はコミュニティの事を簡単に地域社会と訳しているけれども実はそうではないのだと今日教わりました。エリアを地域社会と言うのではなく、そこに愛が通っている社会、そこに人ととの交わりがあり、おもいやりがある社会を作った時、それはコミュニティになる。ロータリーの言う community service が世界大に拡張し、World community service になった時、そこに world peace があるのであるのだという考え方方に加わって頂く人達を作る事、それがこの R Y L A の目的であるという事を皆さん度々聞いて下さったと思います。しかしそれを本当に考えて頂く為には今の時代がどういう風に移り変わるのか、皆さん達が歴史を越えた新しい認識の目を持ってほしいと思います。又自分達の問題だけではなく、横に広がった世界を越えて、違った文化の中で何が正しいのかという事を理解し、認識するような新しい時代を作ってほしいと思います。先頭を走っている人は前の人々に倣っていくわけにはいかない「赤信号をみんなで渡れば怖くない」のような青年になってほしくない、主体的な人間になって、新しい時代を作るという目を養ってほしいとお願いしました。私達は講師に立派な二人の先生をお願いしました。新野先生は20世紀はどんな時代であり、21世紀はどういう時代が来るのかという指摘をして下さいました。それは21世紀における時代の変化の中で何が望まれているのかについての答え、或いは方向性というものを大変くわしく教えて頂きました。20世紀の分析と共に確実に来るだろう変化を指摘された時に、先生は青年のボランタリズム、自由意志による新しい世界の建設に献身する事を期待されました。活力と勇気と感受性と知性とが教育の目的であるというラッセルの言葉を引きながら「諸君達には活力がある、諸君達には勇気があるだろう、諸君達には感受性がある、同時に歴史の目を通して新しい将来に向かって知性の目をもってそして諸君が責任を負う具体的な取り組みを考えてほしい」と新野先生からメッセージとして受け取ったはずであります。私達は改めてここで感謝をしておかなければならぬと思います。そして諸君達はそのメッセージを土台としてまず自分自身でこの事を考え、同時にその後グループで4時間に亘ってみんなでディスカッションしました。そしてその結果を7時から10時迄の3時間ここで発表や討論を行いました。そこで混乱がありました。一つはボランティアとは何かという事でありました。ボランティアが自分の経験の中から或いは組織とか、課題の中で自分が素朴に考えていたボランティアだけではないのじゃないかと皆さんは感じました。それがボランティアの問題がありました。私はその時ボランティアとは主体的な形で意的的な形で自分

の発露としてボランティアをする事が大事なのだという事をお話しました。それはむしろ形や種類ではなく、ボランティアというものは自発的なものが大事なのだという話をしました。しかし同時に私は今度の震災の中でお医者さんが自分の技術をボランティアとして捧げて活躍された事は大変必要な事であったし、これからも大事だと言う事を一言付け加えました。そして今日、野尻先生からボランティアについて色々お話を伺いました。ボランティアというものがどういう位置を占め、どういう役割を果たさなければならないか、その為にボランティアとしては何を考えなければならないか、という事がお分かりになったでしょう。ボランティアというものはそのスタートにおいては全く主体的なものです。そして自発的なものであります。ボランティアがどういう風な役割をとらなければならないか唯単にごみを拾ってきていいという事よりも、新しい時代の中でボランティアがもっと大きな範囲で、もっと色んな所で大事になって来たという事を教わって昨日からの皆さんとの問題は解決しました。もう一つ皆さん達が問題にした話はお年寄りと若者の関係がありました。地域社会という普段我々が使っている言葉の中でコミュニティというよりも、私達が住んでいる社会を考えた時、そこの中にコミュニティというものが出来ないのではないかという意見が出ました。過疎化の時代といわれ、コミュニティがだんだん崩壊していく時、私達はどうしたらいいのかという話も出ました。お年寄りと若者との問題についての幾つかの疑問点を深めました。それと同時に地域社会というものがどういう意味を持つかという事についても考えました。しかしその答えに対して今日は野尻先生から今のような福祉社会、これから社会は今までのようにお金を儲け、経済成長をするというような社会にはもうならないだろう、20世紀を踏まえて、社会主義社会も自由主義社会も夫々の行き詰まりと限界を持ち、或いは福祉国家と言われるものも社会的な或る組織の中では行き詰まって来るだろう。その事に対してどう考えていけばいいかと言う事になる時には新しい道が考えられなければならない。少なくともそれは国家に対してどうなるかというよりも、今私達がそれを福祉社会という形で考えた時に、みんなの幸せを考えるような社会が必要になるし、世界でもその事がだんだん言われるようになって来ていると教えて頂きました。アメリカではネットワークという風な事が言われるようになって来たというお話を伺いました。ロータリーには経済界の人達も沢山おります、大学の先生方も沢山おります、お医者さんもたくさんおります、弁護士さんもその他の専門の方々もたくさんおります。そういう人達が集まって一つのロータリーを作っています。その基本になるものは何かというと、ロータリアンが長い間考え、実践して来たものは今日教えて頂いた思いやりの心をみんなが夫々の職業を通して分かち合う事です。病院を例にとって言っても唯利益だけを追及したものではなく、患者の為におもいやる心をもって治療に当たった時もうそれは Non Profits Organization に入ると思います。そこには専門職の他はボランティアがそれを支える。私達は新しい社会が作られていく時、それが新しいポスト資本主義社会のあり方として規制されるのだという話をしました。今日はその事を内実化して新しい社会になる道を野尻先生から教えて頂きました。こうして考えて見ますと、色んな社会政策上深刻な問題を抱えている中で、お先真っ暗になるような福祉国家の構造を本当にもう一度新しい21世紀に開かれる為に、我々がボランティアの心を持つ、ボランタリーアリズムというものが本当に大事になって来た事を知りました。それは唯単なる主観的なも

のだけではなく、それが組織化され、それが高度化され、それによってもう一度第3セプターのようなものが出来、それによって私達の世界が作られるのだと。それを先生はコミュニティという言葉の再形成だとおっしゃいました。コミュニティというのは唯單なる地域社会ではない再形成なのだ。その再形成をする為には心は愛であり、思いやりであり、如の心だという事を教わりました。諸君達が何をしたらいいかという事を考える時に筋道がもうたって来ただろうと思います。この三日間の話を通して諸君達の生きる道は分かって来ただろうと思います。しかもそれが新しい世界を切り開く道になるという事も分かって来ただろうと思います。そういう事を分かって頂いた皆さん方が改めて、自分のコミュニティに戻って頂きたい。私の言うのは地域社会に戻りながらそこをコミュニティにする努力をして頂きたい。実はこのRYLAが終わりますと皆さんに四国と兵庫の夫々の地区的ガバナーがサインをされた終了証書が贈られます。それは直接皆さん所に送るのではなくて、皆さんの参加費を負担してここへ皆さんを送って下さった各地のロータリークラブに送られます。会長さんはそれにサインをし、会長さんとガバナーの二つのサインを添えて終了証書をクラブで皆さんにお渡して頂く事になっています。その時たぶん、ロータリークラブではコミュニティ作りへの協力を若いあなた方にお願いされるだろうと思います。私達はあなた方の力も、あなた方がリーダーをしているあなた方の団体、職場みんなの力を借りたいのです。あなた方がこのRYLAに参加して下さった事に感謝をすると共に、私達ロータリーではこれからあなた方の色々な活動に応援しましょうと終了証書を渡されるでしょう。あなた方はその時このRYLAの報告をして頂きたいと思います。私達が17年間続けて来たこのRYLAの卒業生の諸君達が恐らくみなさん方の近くにおられると思います。このRYLAを卒業されて、ロータリアンになられた方も沢山おられます。又それのみではなくRYLAのリーダーとしてここに帰って来てくださった方もおられます。私達は皆さんの今後を期待しています。じゃ実際に何をするのだろうかと皆さんは思われるでしょう。先程から思いやりを実行するというはどういう事なのか、色々考えてまいりました。一つの例をお話しますと、この震災で夫々のボランティアの人達が避難所を訪問いたしました。或るボランティアの人達がりんごを配る事になりました。その時数名のお嬢さんはこうしたのです。それは唯りんごを渡して歩くだけではなくて「おばあちゃん、りんごを食べますか、剥きましょうか」と言ってお年寄りの前でりんごを剥きながらお年寄りの話を聞き、又色々な事を話しかけました。おばあちゃん達は「あのお嬢さん達がりんごを剥いてくれて、色々な事を話してくれた、それがとてもうれしかった。頑張ろうねと言ってくれた事に私はこれから生きる力が出ました」と話していました。私は野尻先生のお話を聞きながら、遠い昔のツルゲネフの散文詩を思い出しました。それはツルゲネフが町角を通った時乞食が「旦那様お恵を」と物乞いをしました。ツルゲネフはお金を出そうとしましたが、彼のポケットにはお金がありませんでした。ツルゲネフは乞食のそばに行き、「ごめんね、私は今日お金を持っていないのでお金を上げる事は出来ないんだ。でも君頑張ってね。私はあなたにお金を分ける事は出来ないけれど、私もあなたの事を思っているという友情を分けるよ」と言って握手をしたのです。乞食は「旦那様ありがとうございます。私はこうしておると無造作に1円2円のお金を恵んで下さる方は沢山いますけれど、あなたのように声をかけて下さる方はいません。今日あなたから握手をされた事は今日たくさんのお金を貰ったよりも私にはもっとうれしかったのです。これで

私は自分の人生に生きる希望が出ました」というのがツルゲネフの散文詩の中にありました。あなたに出来る事は沢山あります。是非それをやりながら新しい21世紀をそれを通して作っていく努力をして頂きたいとお願いをしたいと思います。

最後に一つ具体的な提案があります。今度神戸にリユニオンのつもりで集まって頂きたい。それは唯集まるのではなく、実は神戸の町に外国から来た留学生の諸君達の家がこの震災でたくさん潰れました。その留学生の為の仮の寄宿所を作る事にしております。又神戸の町でお父さんやお母さんから離ればなれになったり、両親が復興の為に一緒に住む事が出来ないという子供達に子供の家を作り、これに「ロータリーの家」という名前を付けます。これを作る時に専門の建築技師さんに来て頂くのですが、これは組み立てなのでロータリアンの皆さんも一緒にボランティアをして頂く約束をしました。皆さんもロータリアンの方々と一緒にロータリーの家をみんなで作って下さい。ロータリーの家が出来たらそこでリユニオンをしましょう。この指揮官は三木明さんにお願いしましょう。お互い同志声を掛け合って、思いやりの心を持って作って下さい。それに来て下さった皆さんが働きを通して何かを得られ、その機会をセカンドステップとして考えてもらえた大変うれしいと思います。



## 閉講式

ごあいさつ

国際ロータリー第2670地区

ガバナー 須之内 淳二

皆さん、三木先生をはじめ運営委員会の皆様方のお心遣いの中で素晴らしい三日間を過ごされたと思います。皆さん方はこの三日間先生方から素晴らしいメッセージを受けられたと思います。そして今井先生から本当に心を打つまとめのお話をして頂きました。昨日は一輪ほどだったインフォメーションセンターの桜が今日はだいぶふくらんでまいりました。あたかも皆さん方の前途を思わすような気が致しております。野尻先生から故郷喪失のお話をございましたが、皆さん方は喪失されておりません。どうか人間としての故郷を失っていない皆さん方がこれから新しい社会を創成していって頂きたいと思っております。皆さん方が得られた沢山の知識、皆さん方に届いた沢山のメッセージは皆さん方の頭の中の図書館に素晴らしい蔵書を蓄えられた事だと思います。その蔵書は皆さん方の知識としての蔵書ではなくて、皆さん方が持っておられる本当の真実を見通す英知、その英知のフィルターを通して出てくる時にこそ皆さん方のビジョンになるのだと私は思います。若い皆さん方はそのビジョンを行動に移すその活力はあり余っていると思います。皆さん方はボランティア活動について討議をなさいました。その時A班の方は「大変難しい問題です」と戸惑っていました。これは大変素晴らしいことだと思います。惑うということは人間に与えられた素晴らしい特権であろうかと私は思っております。本当に惑う人がいるからこそ、その惑いの対象となったものゝ真実が見えてくるのだと思います。皆さん方はこれから大いに生き生きと惑って頂きたい、と惑いを感じて頂きたいと思っております。人間の心の中には万国共通のものがありますが、ビジョンと活力そして思いやりの心を持った皆さん方の肩にかかるております。私はロータリーの活動はビジョン、活力、思いやりの心だと思っております。普賢岳の災害以来ボランティアの文化を作ろうという事が言われております。私もボランティアの一人に加えて頂けたら、この三日間皆さん方と共に過ごした事は私にとって大変な生きがいでございます。皆さん方もこのRYLAが生きがいとなって頂けたら幸せだと思います。皆さん方の昨日迄の輝いた生活がこのRYLAで夢と力でもっと光り輝くものになりますよう心よりお祈りしております。このRYLAで四国と兵庫の皆さんのがよいお友達になられました。私の年度は“Be a friend”です。皆さん手を携えてよいお友達となり、ボランティアとして活躍して頂きますようお願いを致します。

国際ロータリー第2680地区  
ガバナー 計馬 忠

地震により被災された子供さんで淡路の方にしばらく疎開しておられる方がいらっしゃいます。その人達を一度慰めようじゃないかという事で4月1日に「頑張れ兵庫っ子、友達になろう。出会いと思いでの広場」というものを国立淡路青年の家で開催しましたところ180人程のお父さん、お母さんと一緒に来られました。皆さんをお迎えしながら私は思わず涙しました。あの神戸の災害でがれきの下で本当によく助かったという気持ちでした。その世話をしてくれたのが淡路のローターアクト、淡路三原ローターアクト、志紀校のボランティア部、ボイスカウトのシニアとローバー、朋友クラブというボランティアのクラブの皆さんでした。昨日はあさり取りをしました。今日は福良の町で春祭りをしています。これが本当に我々がしてあげたい、やらないかんという風なことの具体的なことじゃないかと思います。私がこのRYLAをするにつきまして「こんなことを今してもいいのか」という意見がありました。戦時中、戦場ではバンバンやっていても教育は廃止しなかった、これは教育だと、断然やるんだと心を決めて実施して本当によかったですと思っております。皆さんの生き生きとした顔を見てやってよかったと実感しています。みなさんはリーダーとしての心の取り組みを色々習得されました。皆さん方が地域に帰られてこの感激をお忘れになりませんように、大いに頑張って下さいというのが私のお願ひです。

国際ロータリー第2680地区  
パストガバナー 森 滋郎

よかったです、この4日間恐らくあなた方の10年間位の値打ちがあったんじゃないかなと思います。本当に素晴らしかったですね。講師の方々もお金で動くような方は誰もなくて本当に皆さんの為に素晴らしい講義をして頂きました。私の皆さんへのお願ひは子供を3人以上作ってという事です。2人でだから3人以上でないと日本は駄目になってしまいます。その為には素晴らしい結婚をしなくちゃいけない。素晴らしい結婚をする為にはラバブルないい背中を持つ人間にならないといい結婚が出来ないよ。ラバブルないい背中を持つ為にはこの習ってきたボランティア活動とか、今まで勉強してきた事を実践せな駄目。いい事を口でばかり言ってても駄目、実践せな。ロータリーが先ず世の為、人の為にシカゴに公衆便所を作ったんですが、こんな所に便所を作ったらあかんと反対した、反対同盟があった。それはレストランと百貨店だったんです。その頃おしゃこしたくなったらレストランへ行ったんです。百貨店へ行ったんです。帰りに買い物する、その為にレストランと百貨店は反対したんです。皆さんがこれはいい事だ、しょうと思っても反対がありますね。でもその反対は押しのけてする事です。私は戦争中8年間中国におりました。中国では総力をあげて日本に反対しました。壁に色んな絵が書いてありました。「有力出力」力のあるものは力を出せ。「有錢出錢」金のあるものは金を出せ。「有知出知」知恵のあるものは知恵を出せ。いい言葉でしょう。先程の講義を聞いておりましたら、論語の如、キリスト教の黄金律等、コミュニティの本当の神髄は愛であって、思うだけでは駄目でやらんといかん。力を出すか、知恵を出すか、何かある。そして無財の七施が出てきました。

目で、或いは顔で、言葉で、席をゆづる、なんでもやろうと思えばやれるんです。そういう事をやって下さい。そしていい相手を見つけて素晴らしい結婚をして、素晴らしい子供を3人以上作って下さい。

### 第17回 R Y L A セミナー

ディーン 安平 和彦

この3泊4日いかがでしたでしょうか。本当に毎日皆さんお疲れになったと思います。私は開校式の時にロータリーでは“Enter to learn, Go for to seave”という風な事を言うんだと申し上げました。皆さん方はこのR Y L Aセミナーに来られまして素晴らしい先生方の講義を聞かれ、受講生同士の中で本当に沢山の事を学ばれたと思います。我々R Y L A運営委員会のスタッフが喜々として喜んでお世話をしているのも私達自身がこういう素晴らしい先生方のお話を聞きし、皆さん方と話が出来、又ロータリアンの皆さん方と心を交わす事が出来る、これが何よりも楽しみというか、うれしさであるという風な事で毎年楽しみにして、このR Y L Aに参っているのです。皆さん方は沢山学ばれたことを地域に持って帰って頂きまして、Go for to seave ご奉仕頂きたいと思います。又開校式で私はロータリアンはその命が終わる日まで自己研鑽の努力をしなければならないという風に言っているという事も申しました。そして皆さん方も一緒であるよと。我々人間夫々本当に一緒に思います。学ぶということは自ら学ぶ姿勢がなければ知識を吸収する事も出来ませんし、学ぶことも出来ないと思います。皆さん方が眠気と戦いながら講師の先生方のお話を集中されていた事、これが自ら学ぶ気持ちだと思います。本当に貴重なものだと拝見しました。お元気でお帰りになりまして、今後ますますご活躍されることをお祈り申し上げて最後のディーンの挨拶とさせて頂きたいと思います。



## A 班



A班カウンセラー 中島 万里

来て、見て、良かった。カウンセラーも初めてながら存在として体内に残った。講義について考えることも、ボランティアというものの理解、福祉の有り方 etc — そして自分自身 どう アプローチ出来るか。受講生の若者達の中でいて、自分の座標軸の中に定まった位置が見えた様な気がする。「禅」はいつも自然であれと呼びかける。先ず自分の位置からとらわれずに、そっと始めればよい。グループの中にいて一緒に行動し、自分を確かめていく。カウンセラーの位置も自分の位置も落ち着いた日常の意識で誠実に対処する。セミナーの進行につれて、ゆっくりと楽になっていくのに我ながら驚いた。自分自身が日頃やっていることに結びついていき、自然になれた。毎時毎分が触発であり、目的意識を持てずに始めたカウンセラーも実際の目的が自ら体現出来たように思う。素直に対処すれば素直に返ってくる。セミナーの内容を個々に述べるよりも体感した事を大事にしたい。

人にも社会にも全てに「優しい」セミナーである。もう私の日常の中にライラは位置を占めてしまった。私が構えることなく自然に出来ることから、継続的にライラとつきあって行きたい。カウンセリングの内容については、私の力不足は勿論だが、能力のある若者達だから助けられた。皆本当に素晴らしいだった。

震災のすぐ後の、このライラに意義と復興への希望が見えた。一つの糧にならんことを！

カウンセラー 水谷 淑子

余島は春です。震災から2ヶ月半、神戸では私は春を見つけていませんでした。ライフラインもたたれ、私は花が咲きだしているのに気がつかず、気持ちにゆとりがなくなっていたのです。昨年のライラの受講生達と須磨浦公園でお花見をしたのが夢のようです。その須磨浦公園にも避難所があります。今年は桜の花がひっそりと咲くでしょう。でも新しい街を作る為にもボランティアが必要だと3回の講義で実感しました。若い人達もこれから何をすべきかがきっと見えてきた事でしょう。

思いやりと愛、第一歩のまずボランティアに関心を持つことから.....私もはじめます。

中尾 勝志

さいしょはこのセミナーに行くのがすすまなかった。でもこんなに若者達がよいことを話、いろんな意見をもった子がいてよかったです。

キャビンのこと

僕達A班はほんとうによいチームワークでした。僕たちA班チームはどこかでまた会います。またきかいがあったら、こういったセミナーに行きたいです。本当にロータリーのみなさまありがとうございました。 END

木村 尚樹

この度このような有意義でレベルの高いセミナーに参加させていただきまして誠に有難く思っております。

まずよかったです今井パストガバナー、新野先生、野尻先生のような一流の先生方の講義を聞かせていただいたことです。「がんばらなければ」という気持ちが胸にこみあげてくるようなすばらしいお話をしました。

それと多くのすばらしい人々にめぐり会えたことがよかったです。受講生、カウンセラーのみなさんはやはりそれぞれ志のある人ばかりで、語り合うことのできる友人がたくさん得られました。

地元に帰っておもいやりの心をもち、さらに多くの友人達と語り合いたいと思っています。また5月の神戸でのロータリーハウス作りを始め、様々な奉仕活動にも参加させていただこうと思っております。本当に有難うございました。

木田 敦子

私にとってライラセミナーは4泊5日の長い出張でした。仕事で来たはずだったのですが、ライラセミナーの運営委員会の方々のはからいでセミナー開始日の朝、受講生として参加をすすめていただきました。そして私の受講生3泊4日のセミナーが始まりました。

参加する事に決めたものの、受講生としての心構えなど何もなく、うまくとけ込めるか不安もありましたが、徐々にみんなの顔と名前も一致していき、バズセッションではとても有意義な時間が過ごせました。特にみんな率直で素直な意見を堂々と発表している姿を見て感心しました。こんなに真剣に考えている若い人達がたくさんいるなんてびっくりしました。自分にとって良い刺激になりました。リフレッシュできた4泊5日（みんなより1日早く来ていましたので）でした。ありがとうございました。

島崎 裕友

私は常日頃高知県高知市において社会教育関係団体「ヤングジェネレーション高知」という勤労青年で組織された青年団で活動しています。今までセミナーやフォーラム、様々

な研修に参加してきましたが今回はロータリークラブの青少年リーダー養成研修であるという事で今までとは異なった研修になるのではと心をふくらませて参加しました。

初日、ロータリークラブの歴史や概念を今井先生から教えて頂き、その中で「ロータリーは時代の変化に応じて変化していかなければならない。その為にも青年の役割は大切なのだ」という言葉が印象的でした。また神戸が大変なこの時期に、お金をかけてセミナーを開く事に対する反対の声もある中、こうしてセミナーを開催したその思いを聞かされ、しっかり学んで帰らねばと心の引き締まる思いがしました。

2日目、新野先生の話の中でまず歴史から入って環境、エネルギー、理想の社会、市場経済の限界等我々をとりまく様々な問題についての説明からそういう状況の中でこれから整備していかなければならない事として、連絡網の整備やボランティアリーダーの重要性、専門職のボランティア組織の結成等、今現在自分が活動している地域でも必要性を大変感じる事が話されました。

3日目には「地域社会の創成と青年の役割」というテーマで班ごとに話し合い、フォーラムでそれを発表し合って、深川先生がその中でテーマを絞って参加者全員で話し合いが持たれました。その中で私が感じた事は若者達がボランティアやまちづくり、老人問題についてある程度の問題意識をもって自分に今何ができるかを考えているという事でした。私自身はボランティア活動には様々な形があってボランティアをする事によって何を得るかはそれは個人の自由であり、無理に概念としてまとめる必要はないのではないかと感じました。

最後に今日「福祉社会とボランティア」というテーマで野尻先生のお話を聞かせて頂きました。その中で前日にも今井先生が話されていた様に、社会構造が高齢化によって現在とはまったく変わったものにならざるを得ない今日の状況で今後は国だけが社会保障を考えるだけではなく、共同体（コミュニティ）を再形成して平時のボランティア組織を作っていくなければならないという事と、ボランティアによって人間に決定的なもの（思いやり、愛）に触れるという事が心に残りました。

最後に4日間のこのセミナーに参加して率直な感想を述べたいと思います。短い間でしたが16名と一つ屋根の下で共に語らい、交流がもてた事は大変有意義でした。また余島の自然も充分満喫させて頂きました。本当に素晴らしいセミナーだったと思います。

今後私は自分の地域社会に戻り、常に思いやりをもって、青年にまちづくりの重要性を説明し、組織を強化して、様々な地域社会の問題について考え、それを実際に解決していく、そのような団体に今自分が所属している団体を育てていきたいと思います。最後にこのセミナー開催に携わった全ての方にお礼を申し上げて終わりとします。どうもありがとうございました。

## 藤本 弘子

ライラセミナーを終えて、今、思うことは「出会い」の素晴らしさを実感できたことです。もちろん出会いを求めて参加しようと思い、過ごしてきたのですが、出会いのありがたさ、不思議な部分を再認識できました。

私が今回出会えたことは人であり、ことばであり、自然であり、物であり、考えであり、気持ちであります。そしてそれにプラスもマイナスも含めて幾通りもの出会いがありました。その中で人それぞれ、色々な思いや理想と現実の間で葛藤しながら頑張っていらっしゃることに少し安心しました。今回どんなことを得ることができたのか、これから的生活でもっと実感し、考え方進んでいくのだろうと思います。

私はロータリーが求めているリーダーには仲々近づけないように思います。残念ながら先生方のお話もすべて吸収しきれていないと思いますし、常にすべて頭において生活していくことはできません。しかし今回の出会いは私の心に強く残ると思います。何かの機会に思い出したり、役に立てることができる信じて、時間を大切に、一生懸命（しかし無理をせず）歩んでいけたらと思っています。貴重な時間と出会いを与えて下さり、どうもありがとうございました。

## 内田 真生

私は住んでいる加古川で子どもたちとキャンプをしています。子どもが好きでキャンプも好きで、大学に入ってからずっとキャンプをしてきました。子どもたちの将来や成長していく上でぶっかかる問題を考えるということはありましたが、地域社会や老人の問題をこんなに真剣にとりくんだことはありませんでした。また、地域や生活の環境の異なる人たちとセミナーに参加するというのは初めてでした。講義の時間だけでなく、キャビンタイム、食事の時間など刺激を受けることがたくさんありました。普段聴きなれない言葉が多く、少し疲れましたがよい経験になりました。

これからもたぶん子どもやキャンプに関わっていくことが多くなると思いますが、私がよいと思ってやっていることに対し意見を持つ人もいるのだということがわかりました。時間のたくさんある青年の今、たくさんの子どもだけでなく、人に会って、いろいろなことを体験し、考えていきたいと思います。私の力が微々たるものだからというのではなくて、今できることを一生けんめいやつていったら地域にも還元できるような気がします。

いろんな人に会ってたくさんの刺激をうけることができてよかったです。  
ありがとうございました。

## 小林 直之

今回のRYLAセミナーを受講して私は今大変大きな時代の激動期のまっただ中にいるのだなあと改めて感じました。それは国際的には社会主義、自由主義の崩壊そして日本で

は高齢化の問題や地震で初めて大きくクローズアップされる様になったボランティア活動についてなど社会が大きく変わろうとしています。やはりその激動期の中で私達青年は大きく今後の将来にかかわってくると思います。私一人ではどうにもならない問題ばかりであります。ですがボランティアの組織づくり、すなわちコミュニティを作ることができれば大きな力になり解決につながると思います。そもそもコミュニティというのは人間が本来持っている形態であると思います。そこで必要とされる人間性、人のぬくもりというのはすべての人に与えられた能力であると思います。今回のRYLAセミナーで色々な人と出会い交流することができました。そしてテーマのBe a friendということを通して、人のぬくもりを改めて感じることができました。この様な人間本来の心というものを大切にもち、これから自分の住んでいる地域に帰っても忘れずにいかすこと。それはボランティア活動にもつながることだと思います。RYLAで思い感じた事を社会の一員として貢献できるようこれからも努力したく思います。

#### 鶴田 尚樹

私は小学生のころ1度このYMC A余島キャンプ場におそらくロータリーの方々が企画されたのだと思いますが来て、およそ3日ほど生活をしました。当時のことを少しづつ思い出しながら島を歩いていました。その時に自分の心の中に思い出されて来たことは、カヌーに乗って楽しんだことや、YMC Aのお兄さんお姉さんがやさしく接してくれたことでした。この時の人の暖かさがすごく印象に残っていました。

ボランティアにおいて本当に大切なことはこの部分ではないかと思っています。つまり野尻先生が言われた“思いやり”この言葉がすべてを語っているように思います。他にも学んだことは多くありますが、あまりにも多くの事なのでまだ頭の中までまとまりきっていません。この事は年がたつにつれ、少しづつ私の心の中で整理されていくものだと考えます。

私にすばらしい知識と友人を与えてくださったロータリーの方々、先生方、余島キャンプスタッフのみなさんに心から感謝いたします。そしてこの経験を今後の生活で生かすと共に仲間達に語って行こうと思います。

#### 能又 美智代

今回、初めてこのライラセミナーに参加させて頂きましたが、今この3泊4日を振り返ってみると、同じ班になって初めて顔を合わせた新しい仲間と過した楽しい時間、真剣な意見交換などの本当に有意義な体験が出来たことをうれしく思っています。それぞれに年齢も違い立場も違った人達の中で様々な意見を聞くことができ、考え方の違いや視点の違いなどに気付き、私自身の考えも深めることができました。私がこのセミナーに参加させて頂くことが決まった時はここで勉強させてもらおうと思っていたのですが、みんなと意

見を交換していく中で、ボランティアについての考えを深めることができるようにボランティアであるという考えが生まれこれからもどんどんボランティアをしていこうと意欲も燃しています。この素晴らしい時間や友人に別れを告げなければならないのはとてもなごりおしいのですがまたいつかどこかでお会いできることを期待しています。また機会があればライラセミナーにもう一度参加させて頂きたいなと思っています。

皆さん、いつまでもお元気で。

### 森下 朝洋

このライラセミナーに参加したきっかけはボランティア活動というものがいったいいかなるものであるかなどという素朴な疑問からはじまったように思う。自分が所属している大学内のローターアクトクラブにおいてボランティア活動部というものを経験したことはあったが、その理念を正確に理解していませんでした。このセミナーの目的はリーダーとなる青年の育成というものであり、自分がこれからボランティアというものに一生かかわっていくうえで非常に重要な経験になったと思います。

またこのRYLAに参加することで、いろいろな職業の人々や他の大学の学生、ボーイスカウトなどのいろいろな経験の持ち主と友人になることができ、自分が考えていた方向とは違う別の角度からの意見や体験したものにしかわからない貴重な意見を聞くことができました。日頃自分は大学の中で狭い視野でしか物事を考えていないことに気づかされ頭の下がる思いをしました。

このセミナーの講義は日頃接することのできない、つまり自分が学んでいる学部とはかけはなれた分野における貴重な話を聞くことができ、難しくて理解しにくい部分もありましたが自分の視野がかなり拡がったような気がしました。

ライラの四日間を通して体で感じたことはボランティアというものは自然発生的、つまり自発性を持ち、社会に対して行う活動のことであり、それをやるかぎりは自分自身で必ず責任を持つということです。つまりこれが理念だと思います。それと自分とは異なる考え方を持ち、異なる角度から物事をとらえる人と接し、自分の視野をひろげたり、偏った考え方を矯正することによって、すなわちこのことをふまえることによって本当の意味での友達をつくることができました。これがすなわちボランティアを行うにあたって非常に重要なことだと感じました。

これから自分自身が地域社会にかえり、このセミナーで培った体験を通じてみせかけだけのつまり形式だけのボランティアではなく、自発性のすなわち自分で責任を持って行えるだけの本当の意味でのボランティアを実践していこうと思います。

楽しかった。

3泊4日のセミナーで知り合った人達、とくに同じ班の人達と過ごした4日間はさまざまなカラーをもった男女が3日前に集まりスタート。自然に囲まれた中で講義を受け、考える時間をいただき、各々が思っていることを言葉にしてしゃべり。すばらしい先生方からロータリー、ボランティア、政治他各方面からの講義を聞かせていただき自分の中に情報として取り入れることが出来た。今から先ぜったいに役に立つだろう。でもこのこと以上に自分はとくに同じ班の人達、又カウンセラーの方とコミュニケーションが取れたことが最高の喜びである。ボランティアを例にとってみてもやはり人間同志のふれあいが基本となっていることは違いない。

数時間後には皆この島を離れまた自分達の生活にもどっていくが、又日本のどこかで世界のどこかで再び会えることを楽しみにRYLAセミナー終了。

### 福田 幸児

今回3月30日から今日4月2日までの4日間のRYLAセミナーに参加した訳ですが今回のテーマ「ボランティア」について私が感じたことを書いてみたいと思います。

まず、1月の阪神・淡路大震災という大きな出来事があった訳ですが、テレビ新聞等で様々なボランティアを見てきました。その中には食事の世話、老人の世話等多種多様なボランティアがありますが、テレビで見ていた限りでは他の地域から来たボランティアの方ははじめに自分の事としてボランティアをしていました。

私もボランティアとは呼べないとは思いますが救援物資の収集等を自分の地域で行ったのですが、その時はそんなにボランティアについて深く考えませんでしたが今回のセミナーでの今井先生の講義の中でボランティアの事を「自分が決意して自分がやる事がボランティア」「自分がある目的の為に責任を背おうことがボランティア」という言葉が心に残っています。だれかに言われたからするのがボランティアではない、自ら進んで又他人だけでなく自分に対しても行なうことが大事だと思います。また地域での青年の役割についてボランティアと一緒に考えると、地域との関わりを普段からしていくというのはとても大事な事であり、そのつながりをつくることも青年の役割ではないかと思う。またバズセッションでも出て来た事ですが、自分の住んでいる街も自ら魅力的な街にするということは広い視野で考えると、よりよい世界をつくっていくことになると思いました。

最後に「思いやり」をいつも忘れず「人を思いやる」ということをたえず心がけてこれから的人生をすごしたい思います。本当に楽しく、有意義な時間をすごせた事を感謝したいと思います。本当に楽しく有意義な時間を過ごせた事を感謝したいと思います。また、ゆかいで素敵な仲間に出会えた事がとてもいいおみやげになりました。

## 福田 一子

3泊4日の日程と若者たちのセミナーという事で、不安やとまどいがありましたが最年少(?)の私を受け入れて下さり楽しく、アッという間に過ぎてしまいました。高名な先生方の高いレベルの講義と余島の豊かな自然、若い人達やロータリアンの方々との交流など日々仕事や家事に追われゆとりのない生活をしていた私にとってたとえようのない毎日でした。又自分自身を見つめなおす時間が持てたという事は意義のあることでした。ロータリーの心に触れ社会の一員である自分の立場を考えこれから少しでも枝葉をのばして行き実践につなげたいと思います。401キャビンの藤元さん、能又さん、お母さんを忘れないで下さい。又いつかお会い出来るかもしれませんね。カウンセラーの水谷さん、中島さんお世話になりました。そしてロータリーの皆様、すばらしい経験をさせて頂きどうもありがとうございました。この思い出は人生の1ページに残しておきたいと思います。

春がすみ 燃える思いの 講義かな

## 中瀬 弘晴

Be a friend! をテーマに四国地区と兵庫地区から自然に囲まれた余島に集まったこの3泊4日間、最初は何も知らない同志とまどうこともありましたが、キャビンタイムでの語り合い、そして「地域社会の創成と青年の役割」というテーマを与えられての4時間にも及ぶバズセッションまたレクレーションの時間のアーチュリーやソフトボールを通じて互いを少しづつ理解することが出来るようになりました。今年のRYLAセミナーは阪神大震災の影響もあり、ボランティアのあり方、コミュニティとは、NPO等の言葉が講師の先生の口からよく聞かれたが、同世代の人達とバズセッションでもその事を中心に話をする機会があり大変よかったです。また四国地区や兵庫地区の人達と知り合うことができ、最終日のキャビンタイムでは「又皆で会いたいネ!」と誰もが口にするようになる程うちとけることができよかったです。

このすばらしい機会を与えてくれたロータリークラブの方々また神戸YMC A余島のスタッフの皆さん大変ありがとうございました。

## 長谷川 幹人

私はこの「ライラセミナー」に参加して二つのことを学びました。

まず一つ目は人生経験が豊かな諸先輩方や先生方の話を聞けたことです。今井、新野、野尻先生方の講義は最近向上心、勉強心を失いかけていた私にとってとてもよい刺激になりました。またユーモアあふれるロータリアンの人たちには人生の楽しみ方を教えてもらったりがします。そして今井理事エレクトのバイタリティをみて、人生は一生勉強しなければならないと感じました。

二つ目は多くの仲間たちと出会えたことです。初めて顔を会わせた者同志がいろいろな

プロセスを得て一つにまとまっていく。一つのテーマに本音で話し合えたあのキャンピングタイムは私にとって忘れられない時間となりました。

最後にこのようなセミナーを開催して下さったロータリーの方々、個性味あふれる中島カウンセラー、いつも陰で支えてくれた水谷カウンセラー、そして受講生のみなさんと素敵な時間を共有できたことを感謝しています。

### Robin Foster

I feel very fortunate to have been given the opportunity to experience this RYLA seminar. I have only been studying the Japanese Language for six months, therefore I found the lectures very difficult to understand . this has at times been very frustrating and tiresome, however, still a very good experience. Eventhough I was un able to understand all that was being said at the Campfire, I found it very moving I was able to feel what was being said when I couldn't understand I can say that I have been impereal to become more involved in my community.I feel it is very important to help and care about others, for at some time you yourself, may be the one in need At times I feel American people care too much about themselves and their money. I hear minds become clouded and they forget the things that are really important in life... people and peace.

I am also thankful for the opportunity to make so many new friends. Everyone has been extremely nice, understanding, and helpful. I have had a wonderful time and am glad I was able to come. I would like to thank Rotary for giving me this wonderful experience. I am only sorry I am not able to express my feelings in Japanese. Perhaps someday I can attend another RYLA seminar when I have a better understanding of the Language.

どうもありがとうございました。

## B 班



B班 カウンセラー 猪野 恵一郎

皆で一のものを作り上げる時の青年達の顔の輝きはいつの時代にも変わるものではありません。フォーラムで見せた発想にも驚かされました。ここで会った青年達がその素直さ 正義感 明るさをどんどん失ってしまわないような社会であったかどうかは私達に多くの責任があるでしょう。

何十年か生きてくると、遠くを見ていた目の視点がだんだん近づいてきて、今自分の目の前に横たわっている小さな問題ばかりを見ている事に気付きます。どのように遠く、広い範囲を視野に入れて考え、行動している人達がまさにここに居られる。年齢の問題ではないことを今さらながら実感させられました。

青年達に与えられたこの余島はたぶん彼ら以上に私が学ぶべき場所であったと思います。

カウンセラー 山路 喜代子

美しい自然の中ですばらしいB班のメンバーと出会い過ごした4日間 …… 立派な講師の方々の講義を受け、ゆっくりものを考えることもしなく（出来なく）なっている私に、若い人達と交わり、語り合う一時を与えて頂き、有意義な4日間でした。有りがとうございました。

皆からもらった活力を明日からのエネルギーにしてまた一步ずつ歩んで行きたいと思います。

人と出会い 神と交わり 愛の火のもえるところ

余島に思い出をいっぱい残して … …

又B班のメンバーに会えることと 余島に来れることを 皆の健康と活躍を祈りつつ …

## 関 朋世

3月30日雨。荷物は重いし、雨にはぬれるし 周りは知らない人ばかりだし。行き先はよくわからないし。私のライラセミナーのはじまりは気分的けっこう重いものであった。けれどこの4日間の何と短かったことか。2日め以降は初日の天気がウソのようにすがすがしく晴れやかであった。たくさんの情報と提案を得た講義、全く知らない人同士だったとは思えぬような本音を出し合うキャビンタイム 久しぶりに自分から体を動かしたレクリエーション 初めて経験する静かなキャンプファイアー 一人で黙々と島を縦断した思索の時間 ああでもない、こうでもないと議論をたたかわせたバズセッション みんなでアイディアを出し合い盛り上がったフォーラム 充実した食事 何もかもが楽しくもっと話してみたい もっと こうしてみたい と思う瞬間が何度もあった。

「ライラセミナーは絶対いいから是非行っておいで」とは聞いていたものの、今つくづくとそれを実感している。そして「本当によかったです」だけではなく、この経験をどう生かしてゆくか これからがスタートなのにそこが全く白紙の状態なのである。このメンバーみんなでこれから行動を共にすることが可能ならば、何でもできそうな気がするのだが ……

須之内先生が「大いに生き生きと戸惑えばいい」とおっしゃった。キャビンタイムやいろんな話の中で「問題に気づくことが第一歩だ」ということができた。このことを私はしっかりと胸に留めて考えていこうと思う。ありきたりな感想しか書けないことをとても残念に思う。またお世話になったカウンセラーはじめロータリークラブの諸先生方 野外活動センターのスタッフの方々 そして仲間になれて本当に楽しい時間をくれたB班のみんな（これまたありきたりではあるけれども） ありがとうございました。

## 松井 昌志

あわただしい生活から抜け出す様に参加しました。普段考えることのなかった多くの事を教わりました。最後にはボランティアの本当の意味を悟ったつもりでいます。だけどもしかして僕はまたあの忙しい日々の中で思いやりの心も やさしさも 愛も 忘れてしまうかもしれません。生きていくことがせいいっぱいの時に 自分の間近な友達の事ならまだしも まったく知らない遠方の人や ましてや育った環境も違う老人の事を自分の傷のように痛みを感じ、何かをすることが自分ではできるだろうか。

ボランティア 福祉に対する認識も浅く、無関心であった僕はそんな疑問だけが残ったまま この島を離れようとしています。

ただ このセミナーを受けなければ確実に僕はボランティアも福祉の意味も知らず … 知ろうとせずにいたでしょう。

地域密着を唱えながらも企業はいつしか利潤の追求に走ってしまいます。一企業人として利益を考えない、企業と消費者の関係は可能なのだろうかと考えてしまいます。僕等は

会社を中心に生活が流れています。その中で出来るボランティアを考えるのです。今会社をとびだして神戸の被災地に行くことが出来ません。今自分の生活を崩すことが出来ません。今ここにいる僕達の出来ることは何故か自己満足の様に思えて仕方がないのです。被災地を訪れその場面を目あたりにしていない僕のする彼らのための奉仕活動はなんだか義務のようでむなしい気がします。心と心のつながる地域社会の話をうなづきながら聞く僕は実は心の中で人との関係をうざったく思うムジンな人間なのです。

もっともっと考えなければならない。無気力な若者を悩ませる程の機会をもっともっと作らなければなりません。一緒に悩むことの出来るサークルを作ることぐらいが僕の最初のステップなのかもしれません。

答えを探してみたいと思います。

### 石丸 和枝

このセミナーのお話しを受けた時に私が青少年リーダーなんてとんでもない、大変な事だと思いました。正直なところ島に着くまで不安で3日間の講義を受けるのは自信がありませんでした。しかし、受講生の方と一緒に過ごし、共に勉強し、共にスポーツができたことを今終わって大変良かったと感じております。日頃では聞けない高度な内容の講義を年齢に関係なく皆が一つになって真剣に取り組むことができたことはすばらしい経験となりました。一つのキャビンで世間話をしたり、同和問題について議論したりしました。大震災について話したりもしました。なごやかな雰囲気の中で初めて会った人とそれぞれの職種の違う方と本音で本当の自分の気持ちを正直に話せたことはめったにないよいチャンスでした。

講義の中で学んだことはボランティアは相手にしたあげるのではなく自分が勉強させてもらっている、自分が豊かになるということが私の心の中に残りました。これから我々若者達がしていかなければならないことがたくさんありました。それを全部していこうと思えばとてもできることではありません。ボランティアは何事も関心からだと言われておりましたが、周りのものに疑問をもちながら自分の身近なところ少しずつ豊かになっていくよう努力したいです。このようなセミナーに参加させていただき自分がひと回りもふた回りも大きくなったような気がします。先生方ありがとうございました。

### 田渕 有一

私は多くの不安を持ってライラセミナーにきました。しかしB班の人々を見てその不安はどこかに消えてしまいました。それはみんなすばらしい人達だったからです。又、先生方もとてもすばらしい人なので私自身このセミナーによって大きな変化があったと思います。この大自然に囲まれた環境の中で友達が出で、又先生方のすばらしい話を聞くチャンスを与えてくれた方々にとても感謝しています。このライラセミナーで私が得たものは私

に出きることを進んでするということです。もう一度家でゆっくり一人でこのセミナーをふり返ってもう一度自分を見つめなおしたいと思います。最後にすばらしい友達と会えて本当によかったです。

### 清家真由美

ライラセミナーに参加して一番考えさせられた事は「教育とは」「ボランティアとは」という事です。

新野先生の講義で、教育とは活力 勇気 感受性 知性を持った人間をつくることであると言われて果たして自分はどうであるかと考え、ほど遠い位置にあると感じ、新たな志しを持つことができました。

またボランティアに関しては今まで何度か講習を受け実際に老人ホームなどに訪問した事もありましたが、常に私のボランティアは自己満足にすぎないのではないかと感じていました。口では老人ホームに訪問してお年寄りの方から学ぶとは言っていても心のどこかに「訪問してあげる」というのがあったことも事実です。本来のボランティアとは自発的なところで思いやりの気持ちを持って、人のために何かをさせて頂くというのが今の私の考え方です。行動する時に私自身の心がどのようにかわっているかまだわかりませんが今後も自分にできる事をやっていきたいと思います。

3泊4日の短い間でしたが様々な立場の受講生やカウンセラーの方々と語らうことができ大変刺激を受けることができました。

最後になりましたが、RYLAセミナーを運営された人々 本当にありがとうございました。

### 川辺 雅士

このセミナーに出席させて頂くまで自分自身の今までの考え方は今の世の中を生きていく為には正しい事だと思っていました。思っていたといっても、その考え方は最初は抵抗があったのですが、社会人になり教えられた事なので正しいと思っていたのですが、このセミナーの先生方が言われる事の中で最後に「どんなに頭が良く、仕事ができても思いやり、愛がかけているとその人は人でない」と言われドキッと思ったのがその言葉でした。自分にはそれがかけていて、人は信じてはいけない、いたいめにあうという考えがあったからです。自分は人間ではない生活を送っていたという事です。この事だけでもこの四日間知らない人達の中で助けてもらったり、仲良くしてもらった事が自分の心の洗濯になっただ気がします。この気持ちを忘れず、これからまず人間になります。人間になってやっと人を思いやり世の為に生きていきたいと思います。本当に先生方どうもありがとうございました。

田口 隆司

B班の皆様 3泊4日の共同生活、大変楽しくすごさせていただき深く感謝いたします。一世代二世代もちがうあなたたちと過ごした楽しい一時は決して忘れません。

又、お世話いただいた猪野先生、山路先生ありがとうございました。

何かの機会で小豆島にご来島の折りには是非ご連絡いただければ幸いです。

皆様方のご健勝とご多幸をおいのり申し上げ、今井先生を初め、ロータリアンの皆様にお礼を申し上げ筆をおきます。

中村 雅人

このセミナーを受講して地域社会やボランティアの事を生まれて初めてはじめて考える時間を与えられました。今私は青年会議所や商工会青年部などに所属しておりますが、ただなんとなく所属しているだけで自分で考えてはしておりませんでした。被災地にうどんの接待をしに行った時も、ほんとうについていっただけでボランティアとしては失格だったと思います。この講習をうけ少しは私にも知識ができたと思います。地方にかえりましたら自分から積極的に考え方行動し、友といっしょに頑張っていきたいと思います。

岩浅 宏

ライラセミナー4日間とても楽しかった。この楽しさは友人とバカな話をしている時の楽しさとは全く違ったものでした。今まで自分が深く考えることのないことを知り、考え、今まで自分が考えていたことを人に話し、意見を聞く。まさに共生の第一歩であったと思います。さてみんなといろいろ話すとどんな問題もそのシステムを変えることが必要だと思います。でも私達はそのシステムを変える為、何をすべきか。政府を変えるなんてとても無理だと思います。意識改革、共生をもって学習する。それもできるだけ多くの人が。私達はそのリーダーにならなければならない。始めはほんの少しの人数からあせらずあわてず人として思いやりをもって、みんなの知識を教え合い、意見を交わす。そんな自主学習グループを作ろう。今日ライラに参加して強く感じたことは以上の内容です。しかしつくさんのこと学び自らが大きく成長したと感じています。ライラセミナーがいつまでも続き、もっともっと多くのリーダーが生まれることになればすばらしい社会、地球を取り戻すことが必ずできる。

ロータリアンに心から感謝し、なお一層の活躍を期待します。もちろん自分もやるべきことをやらねば。

中家 亨

今まで高齢化社会や阪神大震災、またボランティアの問題などテレビや新聞で見聞きすることはあっても、ただなんとなく眺めているという感じであった。しかしRYLAに参

加することによって初めて、そういう問題に対して真剣に話を聞いたり、考えたり、討論することができて大変有意義であった。

また他人の事のようにとらえていた問題が実は自分自身の問題なのだという事に気付き、何か行動を起こさなければという意識を持つことができた。しかし、具体的に何をすれば良いのか全然見えず、手さぐり状態の自分がもどかしい。

でも私にはRYLAで知り逢ったたくさんの仲間ができ、みんなと過ごした日々は大変楽しく、また彼らを知ることによって自分の世界も広がった。最後に大変有意義な4日間を過ごす機会を与えていただいたRYLAの関係者の皆様に感謝いちします。本当にありがとうございました。

### 森 美由紀

初日は何か変な宗教的なものかと思い、とにかく不安でたまりませんでした。一日目の夜のキャビンタイムでは皆がそう思ってたみたいで「分かる、分かる」とうなづいてしまいました。このセミナーに参加する前に地元のロータリーの方から「がんばって勉強してください。」と言われ「はい」とはいったものの主旨も分からぬまま出発しました。そしていま4日間が終了し何か満足感をもっています。何でも最終的に「よかったなー」と思える行動をするような心がけていますが、今回は本当に自分にとって良い勉強になりました。プラスになった点、自分の中で見つめ直す点など沢山ありました。ふだんあまり考えることのないボランティアの地域のこと等も見つめ直すきっかけとなりました。そして私にとってこのセミナーで一番よかったことはこのセミナーに来なかったら出会うこともなかつた人と出会えた事です。特にB班は個性的な人が多くてみんなが仲良かったのでとても楽しく過ごせました。こうして出会えたことに感謝したいと思います。

### 岡本 美紀

ライラセミナーに参加することに対し、何をするのかという疑問と3泊4日はながいなと思っていました。

実際セミナーを体験して今井先生、新野先生、野尻先生のお話を聞き、本当のボランティアがどういうものなのかという事が少し理解でき、たくさんの人との出会いがあり、4日間という日々があっという間に終わってしまいました。まだまだ勉強しなくてはならない事、体験してみなくてはわからない事がいっぱいあると思います。

4日間でしたが大変貴重な時間を過ごす事ができ良かったと思います。  
ありがとうございました。

### 加藤 康昭

海と島、豊かな自然に囲まれ、昔読んだ冒険小説の舞台のような余島において、この

ように素晴らしい内容のセミナー 講座・仲間・レク に参加させていただきこの上ない幸せを感じています。

3日目にはバズセッションではB班全員が各々の技術、役割りを把握し、一つの物を作りあげる喜びを再認識しました。（ただし内容がテーマの解釈に対して有効であったかは言明をひかえます）ボランティア活動においても基本である「相手の立場に立ち、自分のしてほしい事を相手にしてあげる」という心を知った時は分かっているが表現出来ない（？）目からウロコの気持ちでした。私は生涯学習施設に勤めていて「仏作ってタマシイ入れず」真にその通りでもっと自分の不勉強を恥じました。

キャビンタイム等、青年や先輩と深夜まで仕事のこと地震のこと社会のこと様々なことを思い切り討論できた事は私の人生経験において素晴らしい1ページになったと思いますロータリーの皆様、スタッフの皆さんそして受講生の皆さん、いや余島で会ったたくさんの友達に心からありがとうの言葉を贈りたいと思います。「ありがとう」そして「がんばろう」

#### 山内 昭典

ライラセミナーというのはどういったものなのか どんな事をするのか 全く分からないうま参加しました。はじめて来たこの余島で多くの人達と交流し、いろいろな事を学びました。日常生活ではあまり関心のなかった地域社会について改めて考え直さなければならぬ事を実感させられました。こり余島での経験を地元に帰って、青年団活動にいかしていきたいと思います。また今後のロータリークラブの手助けができる機会があれば積極的に参加したいと感じています。

#### 萬山 晴彦

このセミナーに参加して今までの無学さ、無関心さを実感しました。というのも諸先生方の講義はもちろん、受講生同士の話に感心することばかりであったからです。この四日間で学んだことはここで表現しきれませんが、今まで体験したことのない楽しさを味わいました。この楽しさをこれから一人でも多くの人に伝えたいと思います。

## C 班



C班カウンセラー 加藤 拓

天候に恵まれ、3泊4日のライラセミナーがひとまず無事終えることが出来た。余島邸の庭前に桃花がかれんに咲き始めている。咲く桃花が予知するように青年のはつらつとした姿に未来と希望が感じられる。21世紀に向けてそれぞれの専門の学識により時代の方向性を示唆され、確かな目標が定まる人間性回復のコミュニティ確立の為に実行あるのみ心豊かな社会と言われて久しいが足元にある小さなことからでもいい、その火を燃し始めなければいけない。人間としての尊厳を心して、勇敢に……

これ等の準備又ご講義いただいた諸先生方に感謝申し上げたい。参加いただいた受講生の無限の可能性を進じ健康で明るくすこやかを祈るばかりである。

カウンセラー 池田 登子

今年はじめてカウンセラーとして参加させて頂きました。カウンセラーの先輩方からご指導頂きながら常に「顔施」を目標に努めて來たつもりでございますが結局は至らぬカウンセラーであっただろうと反省しております。

今井先生始め講師の先生方の素晴らしいご講義に感動し、受講生の皆さんからも多くを学びながら四日間はあっという間に過ぎてしまいました。受講生の今後の活躍を希いつ私もこのライラセミナーに参加させて頂きましたことを誇りに新たな観点を以て日々を過ごして参りたいと存じます。このような機会を作って頂きまして本当にありがとうございました。

永井 克典

今までボランティア活動をはじめ、社会問題、それに対してどうすればいいのかなど正

直言って真剣に考えてみたことが無かった。他の参加者の皆さんのお意見や体験など話を聞くと自分がいかに無知であるか、無関心であったか恥ずかしい気持ちになった。そんな自分がいきなりフォーラムで発表しなければならなくなり、余計に真剣に考えたと思う。このRYLAセミナーで何かしら学んだことがこれから的生活の中で生かせるようにがんばりたいと思う。3泊4日の短い日程でしたが友達になった（と思う）C班の皆さんどうもありがとうございました。

#### 郡嶋 妙子

私は最初セミナーに対してあまり期待していませんでした。講義にしてもきっと寝てしまうのではとちょっと思っていました。しかし、この4日間は予想以上にすばらしく貴重な時間を過ごしたように思います。

特に講義は社会福祉の学科の学生として為になるものばかりでした。コミュニティについて野尻先生はコミュニティとは心のかよい合いであると言われました。今までどんな授業を受けてもただ地域社会としか訳されていなかったこの言葉にこんな意味があると知つてなるほどと思いました。なぜならやはり1つの小さな地域社会の中で何の交わりなしで助け合うことは出来ないだろうし、関わりをもってこそ相手を理解し思いやることが出来る=心の通い合いなしでは地域福祉は成り立たないとつくづく思ったからです。しかし、又逆にこういう地域での共同体のプライバシーの崩壊や村八分的現象が起こるのではないかと心配であります。それを防ぐ為には自分の住んでいる地域には様々な人がいることを認識することが大切だと思います。バズセッションの時にも言われていたようにみんなが同じ意見になることは無理だと思いますし、違うのが当たり前であることをふまえて関わりを持つことが大切だと思います。

3日目のバズセッションの時に自分に何が出来るかを考えました。私は今大学で社会福祉を学んでいます。将来福祉の現場で働くことになります。ですから私は思いました。私に出来る事はこのライラセミナーで学んだことを活かしながら福祉の現場でリーダーとしてがんばることだろうと思いました。

最後に私にとってこの4日間は久しぶりに真剣に物事を考えることの日々でした。又2日目にヨットに乗ってとても楽しかったことと、朝夕聞こえる波の音がいい思いでとなりました。

#### 太田 豊

この余島という小さな島でござした3泊4日短い期間のセミナーでしたがいろんなことを学びまたたくさんの人と知り合うことが出来ました。キャビンタイムの初日はお互いのことがよくわからずあまり打ちとけませんでしたがソフトをしたりバズセッションではいろんなことを話し合い、最後のキャビンタイムでは大いに盛り上りました。又今井先生

を始め各先生方の熱のこもった講義を聞かせてもらってありがとうございます。

出店 典彦

四日間、非常に有意義でした。今回はこれだけですが、5年後、10年後にはもっといろいろな事が書ける様な立派な人間になっているでしょう。

北村 信樹

4日間の短い期間ではあったが多くの事を教えてもらい頭の中では理解出来たが、実際に行動出来るかが一番問題であると思うので、今後は考える前に小さな事からでも「思いやり」を持って活動していきたい。

高山 裕史

1995.3.30~4.2 神戸Y M C A余島野外活動センターにおいてRYLAセミナーを受講した。新居浜を出発し小豆島に入り、余島にわたった。余島を見て「え！こんな島で？」と思った。考えていたのはどこかのホテルでの開催であった。「しかたがないか」とあきらめ室にはいるとなんと「テレビ」がない。文明の力がない。まあ、そのおかげで参加している人達と話のできる時間がたくさんできよかったです。

講義についてはたいへんよいお話を聞いてよかったですというあたりさわりのないようにしておこう……まあ全体的には参加する意義があるのか？と思いながらやって来た余島。帰る今になっては参加してよかったですと思っている所をみると意義があったと思う。

紀伊 弘貴

来る時にどんな事をやるとか、ほとんど聞いてなかったから、ここに来てから、今井先生の話を聞いて、えらいとこに来てもうたなあと思った。4日間えらい先生方の話を聞けたんもよかったですけど、毎晩のんざわいで、新しい友達が出来たことが一番収穫やったなと思った。

前田 知鶴

私は桜の花が大好きで、満開の花が春の風にちる姿にいさぎ良さを感じます。今回セミナーに参加して桜のなえ木はとても小さく(他のに比べて)しかも枝が途中から横にまがっていました。私はこの弱々しい曲がっている木が本当にこれから育ち美しい花を咲かすことができるのか？たよりにならないナアと思いました。

3日目の思索の時間に植えた場所に一人でみに行ってみると、竹のそえ木が横にあって、曲がっていた枝も真っすぐにしてもらいました。(Y M C Aの方ありがとうございました) その姿をみた時、ホッとし、きっとこの桜はまっすぐ大きく育ついつか花を咲かせ

て私たちをなごませてくれると思いました。

今回のセミナーに参加し、人の生き方も同じ様に思いました。この小さななえ木の様に私もまわりの人にささえられ、育てられながら生きてきたんだと。生きていく上で曲がたりくじけたりすることがあります。その時々にあの竹のように自分をささえ、成長させてくれた人がいました。今回そのことをあらためて考えさせられ、感謝の気持ちをもちました。いつか自分がささえられ育てられた様に私もだれかのささえになれたらと思います。

最後にいつか又この余島に来てあの桜の木を見るつもりです。

### 井関 義親

今までボーイスカウト活動を通して、各種のボランティア活動に何となく習慣的に参加してきましたが、このR Y L Aセミナーでボランティアの本来の意味を勉強させてもらい今後は考えて積極的にボランティア活動を続けて行きたいと思います。

### 経塚 環

私は本来ならばR. I. 第2680地区ガバナー事務所の職員としてこの余島に来たのですが三木委員長から突然「受講生にならへんか」と言われて、正直言って迷いました。「仕事が忙しいのに」とかそういうのじゃなく、部屋の条件が悪くなるし、それに本当に参加してもいいのか不安でしたけどいざ参加してみると全然知らないもの同士が輪になってまじめな話やおもしろい話などをし、もしこれが学校の友だちだったらそれもまたおもしろいとは思いますが、初対面だから「自分はこういう性格なんだ」というアピールができるからまたそこで新しい友だちが出来るということに楽しさやうれしさがみちあふれるのだと思います。最初はテレビもないし遊びに来てるのではないから4泊5日はながいなあとと思いましたがあっという間の5日間でした。あのC班の仲間だったらテレビなんかいらない。また機会があればC班の人全員と同窓会なんかをしたいです。本当に楽しかったです。

### 鈴木 健一

4日間という限られた期間ではありましたが、今井先生、新野先生、野尻先生という第一級の先生方の講義に始まり、バズセッション、フォーラム等大変密度の濃い経験の出来た事をまず感謝致します。

おそらく普段の生活を考えると出会い語らう事のない同世代の若者との出会い。異なった立場、環境から生まれる違った角度からの物の見方と共に認識、想いそして同じテーマでの討論。この一期一会の出会いともいえるかけがえのない新しい輪を壊すことなく故郷へ持ち帰り更に大きなサークルを生み出していきたいものです。

今回のセミナーで経験した事は今すぐには自身で消化できないものですがじっくり自分の事とするつもりです。

最後になりましたが我々の為に忙しい中、講義して頂いた今井先生を始めとする先生方、RCの方々の今後の更なる御活躍と御健勝を祈念し、そして地元Y M C Aの方々の暖かいもてなしにお礼を申し上げます。

#### 藤野 文子

この余島で過ごした3泊4日を振り返ってみると、普段の生活では出来ない事をすることで、少しでも広い視野を広げることができました。すばらしい自然の中で共に学び、考えそしてレクリエーションでは班の人とソフトボールをし、その中でチームワークということを学びました。とても楽しかったです。

これから地域に戻り、私がやらなければいけないことがたくさんありました。今、私が何を出来るかを考えて、まず小さな事から身近に出来ることからボランティア活動を行っていきたいです。最後にこのすてきなセミナーを開設していただいた運営委員の方々そして余島の自然に感謝します。ありがとうございました。

#### 楠瀬 道子

仕事を辞め家事手伝いをしている私にとって、このセミナーはマンネリ化している日々からの逃避がしたくて申し込みました。

何年かぶりに机に向かって講義を聞いたり、夜遅く迄友と語りあったりと、年齢、性別、地域等全く関係なく、本当に充実したまた楽しい時間を過ごせました。

日頃あまり深く考えたことのないボランティア活動のあり方や高齢化時代、国際化時代等これから私たちの世代がどんなに重要な責任を負っているか？いろいろと考えさせられる事の多い講義内容でした。3泊4日という期間でしたが。

カウンセラーの加藤さんや池田さんまたC班のみんなに恵まれて、特に最後の夜はとても楽しくいい思いができました。地元に帰りまたすこしずつですが社会の役に立つ様な活動に参加したいと思います。

#### 竹田 憲司

貴重な体験を経験したことは今後の人生において必ず参考になるものと確信しております。一つ一つの体験、時間にすれば1秒1秒が無駄のない時間がありました。言いかえれば非常に内容のあるセミナーであったと思います。何をするにも深く考えさせられ、様々な意見を聞くごとに深く感じました。

今まで長いモノトリアムの中にいた私は今回のセミナーで自己のアイデンティティを確立することができました。それは今まで考えていた理想とは全く異なるものです。まず第一にボランティアの重要性を改めて知ることができましたし、第二に“BE A FRIEND”というテーマで各地から來たりーダーの方々と友人になれたこと。第三にその方向におい

て権威でいらっしゃる先生方の講義を聞けたこと等新しい自分が発見できました。

最後になりますが、今回の貴重な体験を与えてくださったロータリーの皆様に感謝してお礼の言葉とさせていただきます。

### 宮崎 修次

今回は今治北ロータリークラブの御推薦をいただき、この17回RYLAセミナーに参加させていただき大変感謝致しております。これ迄ロータリークラブという言葉は知っているけれどもその活動状況は全く知らないのが現状でした。しかしこのような各職種から集合した同年代の人達と知り合いになり、多くの先生たちカウンセラーの方の御指導を受けられたことを嬉んでおります。

わずか3泊4日の間で学んだことは多く、筆舌に尽くしがたいとはこのことだと痛感いたしますが、その中でも三人の講師の先生方から頂いた講話は私のこれ迄の無気力な生き方を反省し、新たな方向性と自信を植え付ける原動力となりましたが。日本社会の今後の動向は予測し難く、地域社会の変ぼう、経済界の異変、国際環境の親密化などが要因となって、ますます住みにくい時代が訪れることだけが明白となっております。そんな中で我々20代の若者がどう生きるべきか、何を考えるべきかを、史実、現状、21世紀への展望をもとにした具体案で満ちた御講話の中で見いだすことができました。現在の若者の悪い面は何かの示唆がなければ動けないと考えています。しかし今回、目から鱗の落ちるような話の中での数多くのプレゼンテーションを有り難く頂き、これから職場、地域社会にフォードバックしたいと考えます。

最後に私は老いをこれほど美しいものと感じたのは初めてです。短く太く生きればいいという私のこれまでの考えは長く太く生きたほうがもっといいという考え方方に変わったことでも今回のセミナーで得た収穫だと思います。できたらまたこのような人たちの集まりに参加したい 思います。みなさまお疲れさまでした。

### 島田 奈津子

雨の降りしきる中、大部につきバスのストライキで運行せずどうなるのか不安と講義など受けてもという気持ちの中で、余島野外活動まで小豆島の人に途中助けて頂いて来ました。1日目はとりあえずあいさつし、緊張していましたがやはりそこはボランティア活動をされている方ばかり、講義が終わった後、植樹をし、レクリエーションではテニス、ソフト、カヌーと遊びを通して緊張がほぐれていく様子がよく分かりました。もともと人のつきあいは苦手なのですが、自然と相手を思いやる大切さをあらためて教えられた様な気がしました。仕事ではどちらかと事務的、儀式的の様な会話が続いていたのではないか、相手を思いやるというのも義務的に行ってきつつあるのではないだろうか、どちらちら思いました。それから震災を通して「ボランティアとは何だろう?してあげるという

気持ちでもなく、自然と出ているのがボランティアなのでは、そして相手もさせてもらっているという気持ちがある以上それはボランティアなのだろうか？」と疑問に思いながら最初の受講、今井先生のお話をしを。ロータリーとは？から始まり歴史でのかかわり、飽食の時代の中、情報技術社会の中で何がよいのか、何が悪いのか、何が大事、大切なのか、自分たちの役割というものを考えさせられました。キャンプファイヤーはおごそかな中の始めての体験をしました。1人の青年の話は心に残りました。どう書き出していいのかわかりませんが、自分の役割、相手の思いやりの行動、死がまじかにせまっているのに、自分ならそこまで出来るだろうか。自分は責任の重さに嫌気がさして、ボランティア活動から逃げ出しているのに、そこまで持続出来るだろうか。それはとても疑問だなあと思いました。新野先生も歴史とのかかわり、社会の中での思いやりを、野尻先生は高齢化社会についての話を、自分の中でとても大切なものを頂いた様に思いました。

本当にありがとうございました。

## D 班



### B班カウンセラー 赤穂 哲

ライラには過去何回か見学ロータリアンとして参加したことはあるがカウンセラーとして参加したことはなかった。不安と緊張の中で3月29日カウンセラートレーニングを受けた。松山南ロータリー、ロータリアン夫人、有光洋子さんと一緒にD班を受け持つ事となった。3月30日受講生出迎えで受講生の顔を見て、いよいよ始まるのだなと思った。幸いにして有光さんは去年もカウンセラーを経験しておられ、安心してチームを組む事ができた。第一回のキャビンタイム15人の受講生、2人のカウンセラーが104号に集まり、自己紹介となった。みんな初対面でぎこちない。しかしビールの缶が空になるにつれて、私も受講生も緊張の糸をゆるめていった。3月31日今井先生の講義を聞いた後、レクレーションを済ませた頃になると班のふんいきは一段と友好的なものとなった。入浴も受講生と共に入り第二回目のキャビンタイム。田内君の司会で前日よりも盛りあがった。午前1時就寝。4月1日新野先生の講義を聞き、バズセッション、フォーラムと内容のある

program の後、第三回目のキャビンタイム。谷岡君の司会で又々もりあがり午前4時まで話し合った。閉講式を終えて、振り返るとキャビンタイムイーコール今回の私にとってのライラであった。

### カウンセラー 有光 洋子

美しい余島で昨年に続き今年もカウンセラーをさせていただきとてもうれしく思っております。昨年の感動が又よみがえり楽しみにしていました時、阪神大震災で2680地区のロ

一タリアンの皆様も大変な被害に会われ、今年は開催が無理かと心配いたしておりました  
が実行していただき皆様方のご苦労に感謝致します。

セミナー前夜のカウンセラートレーニングにおける今井先生のお話には大変感動し身の  
引き締まる思いがしました。又新野先生、野尻先生と私など生涯聞くことが出来ないよう  
なすばらしい先生を近くで拝見しながら若者といっしょに聞かせていただき感動の連続で  
す。又三日間若い受講生と寝食を共にし、夜もおそらくまで若者の考えを聞かせていただき、  
最後の日は朝の5時まで語り合い、身体は大変疲れておりますが何か目に見えない素晴らしい  
エネルギーを受け、私自身明日から又何かが出来るような気がしております。

今回のこの感動をいつまでも消すことなく、思いやりの心をもって生活してまいりたい  
と思います。大変すばらしい体験をさせていただきロータリアンのスタッフの皆様に重ね  
てお礼申し上げます。

#### 山内 知恵子

私はこの研修に参加してすべてをやり終えて、2つの事に改めて考えさせられました。  
まず1つはボランティアについてー。

我が班の鳥羽さんが不幸にも被災にあわれ、貴重な体験を告白して下さいました。その  
時にでてきたボランティアについて各おののの意見がで、キャビンタイムで話し合う事  
になりました。私は（主に2タイプの考え方がありあげられたのですが）どちらとももの意  
見ではなく、自分にとって私はボランティアというものを間違っていたとその時痛感致  
しました。それは私自身のボランティアとは今まで一番思ってはいけない事ー「してあげ  
る」という気持ちを持っていたことです。そして同情をしていました事です。結局は神戸へ炊  
き出しのボランティアへは行かなかったのですが、もしそのままの気持ちでいっていたら  
ものすごく失礼な、もしかすれば誰かを傷つけていたのかもしれません。だから私はあの  
時いかなくてよかったのかもと思ったりしています。

そして2つ目は地域社会についてー

この話し合いになった時はまず私は地元の青年団の事を思いました。私の町の団は活発  
なことは事実です。しかしそれは結局は自分たちが遊んでいる事ばかりなのです。確かに  
活発にあそんでいれば年下の子たちも羨ましがり将来入ってくれるかもしれません。が最  
近は何かおそれている様な気がしました。帰って今後の団活動の予定を検討してみたいな  
と思いました。お世話になりました。

#### 黒島 康司

今回初めてRYLAセミナーに参加して感じたことは予想していたよりボランティアに  
ついて考えさせられたということです。福祉社会がテーマでしたし、また大震災もあった  
からだと思います。私は自分自身がボランティアだと思って活動に参加したことはありま

せん。好きで子ども会活動をしていたし、好きで小学校で人形劇をしていました。人からみればボランティアやと言われるかもしれません。けど、こんなに押しつけがましいボランティアはないだろうし、第一私はボランティアという言葉に抵抗を覚えます。こんな私がこの4日間で考えたボランティアなどについてのことを書かせていただきます。

まず、講義についてですが、3人の先生とも、まだ見ぬ21世紀には社会におけるボランティアの役割がさらに重要になるということをおっしゃっていることはよく分かりました。が私には3人の先生方それぞれのボランティアに対する考え方の違い（少しですが）が感じられました。また私のそれとも違っていました。正直私の考えはあまり変わりませんでしたが（ロータリーの考え方だと、そんなことは重要でないはずですよね？）3人の先生方のお話が聞けてたいへん参考になりました。が、失礼ですが一番楽しく勉強になったのは同じD班の連中とキャビンタイムやバズセッションで話したことでした。その日の講義のことやそれぞれの地域社会のこと、そしてボランティアのことなどはとても良かったです。私には一人一人の考え方の違いなんてものは関係ないその考え方を受け入れることが大切なのだというのが、この年になってようやく分かったような気がします。私の考えはまだようやく分かったような気がします。私の考えはまだまとまってないので今から家に帰ってキャビンタイムで話したことを考えていくことを思っています。

最後に今回のセミナーに参加させていただき感謝いたします。私もリーダーとしてがんばっていければなあと思っています。このセミナーがもっと若者が意見を述べられる場として、これからも続していくことを祈っています。

### 佐野 卓代

桜の花のつぼみがまだ堅い雨の三月三十日、初めてのこの余島を訪れました。そして今あちらこちらで花の咲き始めた桜の木の前で写真を撮りながら長いようで短かった四日間を改めて振り返っています。波の音、風の音が気になって早くから目覚めてしまった朝もありました。それなのに今はその音全てを身体全体で受けとめても受けとめきれない程、名残り惜しい気持ちでいっぱいです。

いったい何がそのような気持ちにさせるのでしょうか？今四日間学んだこの講義室にペンを走る音だけが響きこの名残惜しさを感じているのは私だけではなく、ここで学んだ七十名余り全ての想いではないだろうか、そんな気がしてなりません。

四日間得たものは本当に数多くその意味ではぜいたく極まりない時間を過ごさせて頂いたと思っています。その数ある中で特に私が胸にかかえきれない程沢山得たものといえばやはり月並みですが人々との交わりあい、人との触れあいではないかと考えます。これらは余島の風と波の音と一緒にいつの間にか私の身体に入りこみ、いつの間にか快いものにしてくれました。本当にごくごく自然に ゆっくりと やさしく 大きく まさにとけこむといった具合です。一つ一つの情景を想い浮かべながら、私に投げかけられた言葉が又命を

与えられて胸の中に広がっていくような何ともいえない幸福感 満足感 充実感に浸っています。できればこの想いがいつまでも消えてしまわない様に、真綿でそっとくるんで持ち帰りたい気持ちです。

とにかく今日一日はこの素敵な気分にどっぷりとつかってみたいと思います。そして又明日からはこのテキストを広げ講義内容を見直し、自分自身のビタミン剤としてゆきたいと思っています。

お世話を下さった多くの方々 お二人のカウンセラーの方々そして四日間数々の想い出を下さった15名の仲間達に改めて心から御礼を述べてペンをおえたいと思います。

### 高室 理恵

春の香でいっぱいのこの余島で素晴らしい空気の中、高いレベルの講義を聞かせていただき、多少ついて行けない内容等もありましたが、自分の能力で理解出来る範囲で勉強させてもらいました。今まで何げなく生活をして、ボランティアとは何かと深く考えた事は無かった私にとって今回のセミナーで長い時間をかけて話し合い考えた事はとっても大きな意識改革になりました。そして先生方のお話しに感動する毎日でした。全ての話に感動しましたがボランティアとはする方もされる方もお互いに幸せでなければいけないというお話しに当然の事でありながら気が付いていなかった様な気がしました。私の参加しているサークルでもう一度ライラで考え合った事を問いかけ、考え合いたいと思いました。このセミナーで他にも多くの事に気付いた様に思います。本当に参加させて頂いてありがとうございました。大変お世話になりました。

### 依馬 弘忠

R Y L A の 4 日間は私にとって新発見の連続でした。初日、私はとても不安な気持ちで余島に渡りました。顔を全く会わせたことのない人々、下は 20 歳から上は 40 台の人々まで幅の広い年齢層、多種多様な職種、私はこの様な大勢な人々と話し、議論し、又うちとけられるのかと思い不安でした。しかし、初日のキャビンタイムでその気持ちは吹き飛んでしまいました。初日の段階で私達は初対面とは思えない程に打ち溶け合いました。又 3 日目のバズセッションではキャビンタイムで馬鹿さわぎしていた人が的を得た真面目な意見を出すなど、キャビンタイムでは見ることのできない一面を垣間見ることができました。この 4 日間の R Y L A セミナーを通して得られたことは、たった 4 日間の期間であっても、腹を割って様々な議題について語れば、年齢、性別、職種、民族を越えて理解することがきれい事でも美辞でもなく、本当に可能であるということです。

### 米倉 裕一郎

長いようで短かった 3 泊 4 日のセミナーを終え、感じた事思った事を書いてみたいと思

います。今回セミナーに参加されておられる方は大学生から社会人まで実に数多くの種類の方が居る事に大変驚きました。しかしお互いに色々な事を話し、討論し、学んでいくに従い、ともすれば同じ職種や環境の中で固まってしまいがちな自分の考えを改め、又10人居れば10人分のさまざまな思いや考え方を吸収し、またそこから新たに考えて行くといった普段の日常ではなかなか体験する事の出来ないいい経験が出来たと感じています。

今回セミナーの会場であった余島には昔見た事のある「潮だまり」が海岸のいたる所に有り、中には魚や貝やその他さまざまな生物が一生懸命生きていました。私の住んでいる街にもさまざまな人たちが居て、色々な生活をしながら暮らしています。その中で自分達が出来る事、又今からやっていかなければならない事を少しづつ（何をすればいいのか、正直まだバク然としていてはっきりと見えて来ないんですが）考えながら生きて行こうと思います。ただ人間にはどこにでも動ける「足」が有るので、さまざまな考え方、生き方を見聞きしながら、又答えに困った時はこの余島で学んだ事、過ごした事を思い出しながら、一步ずつ歩いて行きたいと思います。

最後に今回のセミナーでお世話になりました先生方、スタッフの方々、カウンセラーの皆様、そして4日間と一緒に過ごした皆様本当に有難うございました。そしてこの出会いとなつたつながりをこれからも大事にしていきましょう。 また会いましょう！

#### 照下 博之

今回のセミナーに参加することになり、余島に来るまで少しの不安を持っていた。というのもロータリークラブにつきよく知らなかったうえ、初めて会った人と議論ができるかどうかということがあったからである。しかし班割りされその班で少し話している内に「初めて会った人」という感じはまったくくなってしまった。又講義の主体である“ボランティア”について震災の事を細かく聞かされ、自分が今まで他人事のように見ていたことがはずかしくなった。それにボランティアとはどういうものか、今まで簡単に使っていたこの言葉は考えれば考えるほど難しく、また自分にある種の使命感をあたえるものになったと思う。キヤビンタイムでは時には笑いながら時には真剣に今までの私には体験したことのないものすごく充実した時間であった。4日目でみんな昔からの友人のような気がするようになり、あっというまの4日間であった。最後に私にこのようなチャンスを与えて下さったロータリークラブの先生方に心から感謝いたします。

#### 肥塚 和昌

ライラセミナーに参加できた事、感謝の気持ちでいっぱいです。日常において、人の存在、人の輪の中に入ると、ほっとできるし、人の中で自分自身が生かされているのだなあと思います。でも、もう一方では人というのはむづかしいなあと思います。これから私が生きていく上でさまざまなアドバイス、方向性のヒントを見つける事ができそうな、さま

ざまな立場の方々と出会い本当にうれしく思っています。これからもよろしくお願ひします。

### 谷口 祥規

最初「ライラって何だろう」というのが一番最初に考えたことでした。ライラセミナーに参加して下さいと言われ、参加しますと返事はしたものはどういった内容なのかも分かりませんでした。事前の参加案内で概要みたいなものはわかりましたがそれでもどういった人が集まるのか、何をするのか不安でした。

しかし、このセミナーを受講して、今まで浅くしか考えていなかったこと、特にボランティアについては今までより深い考え、意見も聞くことができ、自分でも考えることができたと思います。今まで自分がやっていたことはボランティアなのだろうか、自己満足ではなかったのか、いろいろな問い合わせが自分の中で生まれました。このような自問自答も日常の生活では特に考えることもなく、また考える時間もありませんでした。この三泊四日のセミナーでいろいろな問題を考え、また違った意見を聞くことができ、大変よい経験ができたと思います。

また普段では聞くことができない、講師の先生の話などはこれから自分達がやらなければならないことを教えてくれたのではないかと思います。

そして一番このセミナーでの発見は同年代のいろいろな職業、学生の友達ができました。その中でみんなの意見を聞くことができたのは今までの自分から一段階進んだような思いです。これから自分のできることは小さなことかもしれません、このセミナーで学んだことを生かしていきたいと思います。

最後にライラセミナーの関係者のみなさん、ありがとうございました。  
またこの島に桜を見に来たいと思います。

### 谷岡 洋平

今回RYLAセミナーを受講して、本当に貴重な体験をさせていただきました。様々な世代、職業、立場におられる方々が集まり、普段の生活ではあまりすることのない話をお互いにすることができました。受講生皆が何らかのプラスの要素を持って帰ることができたのではないかと思います。ロータリーの皆様とも親しくお話をさせていただき、貴重なアドバイスをいただきました。最終的にはロータリーの方々、受講生が一つの community を形成していたように思います。この精神的なつながりを自然消滅させるのではなく何らかの形で存続させていくことがまず第一のハードルになるのではないかと考えています。

大震災の折、ロータリーの方々の負担も大変なものだと思いますが、この様に貴重な体験をする場を設けていただいて本当に感謝しております。この経験を無駄にしないよう小さなことから一つ一つ活動をしていこうと思っておりますのでこれからもお力をお借りで

きたら幸いです。本当にありがとうございました。

### 田内 将人

何も知らずにこのセミナーを受講することになってしまったがすばらしい講義を聞くことが出来、たいへんうれしく思いました。

このセミナーに参加しなければ一生知り合いにならなかつたであろう人々とも気がるに話も出来、語らいもすることが出来た。特別なルールがあるわけでもない、自由に出来たこともひとつの理由なのだが、みなすばらしい若者たちである。私は年齢的にずいぶんと年上であったが、知り合った若者の話を聞くとまだまだ日本はだいじょうぶだと思う。だいじょうぶというより、未来の日本がたのしみに思われてくる。無感動とか無関心とかいわれがちの人々だが、そんな面などカケラも見てこない。きっとこの若者たちが必ずやリーダーシップを取り、たしかな道を導いてくれるであろう。

この研修で私が考えさせられたのは「ボランティア」のことである。私は今まで1度もボランティアをやったことがない。恥ずかしいことだと思う。---というより何がボランティアであるのか、解らないと言った方が正しいであろう。それでも自己満足とよべるほどでいいから、自分が出来るやりたいと思うことを小さなことでもいいから何かをやってみようと思う。

### 羽藤 敏弘

この大自然に恵まれた余島での四日間はこれから社会生活、会社生活のうえで大変役立つ重要な時間でした。このセミナーを紹介していただくまでRYLAはおろか、ロータリークラブ自体あまり理解していなかった自分は今になって思うとすごくはずかしくなります。講師の先生方の講演、バズセッション、キャビンタイム、普段の生活ではあまり気にしていないことを班のみんなで話し合いとても貴重な体験でした。それから、野尻先生ゴメンなさい。講演の途中で二度程席をたってしまい、トイレへ走っていったのは私です。

D班のみなさんどうもありがとうございました。すごく楽しい四日間でした。今後それぞれの場所や立場に戻りご活躍されることと思いますが自分もみなさまに負けないようセミナーで学んだことを発揮していきたいと思います。またカウンセラーの赤穂さん有光さん本当にありがとうございました。あの胃薬とてもきました。

とりとめのないことばかりですが、みなさんこれからもお元気で、また会う日まで。

### 鳥羽 勅存

ライラセミナーに参加して色々な先生方の色々なお話が聞けて本当に勉強になりました。どれがではなく、すべての事が+になったのではと思っています。 またいくつかの悩みも消えました。

キャンプファイアにはまいりました。まさか自分がスピーチをする事になるとは思っていませんでした。上手に話すことが出来ず「ボランティア」の意味に関して皆さん気持ちを複雑にしてしまったこと後悔しています。ボランティア＝義勇兵が話題の中心になり、1人歩きしてしまった事は1番の失敗でした。もっと気持ちを上手に話すことが出来ればと思います。

2日目からは天気もよくD班の皆さん、先生方も仲が良く3泊4日があつと言った間でした。ありがとうございました。

### 濱田 親秀

僕は友達をつくるのが得意な方ではないので、場の雰囲気を和らげるというつもりでおしゃられました。僕はこれでよかったです。みんなと友達になれてほんとうにうれしい。僕をRYLAセミナーに誘っていただいた先生にとても感謝しています。

みなさんがそれぞれ自分の意見を言いあって有意義な時間を過ごせました。僕は自分の思っていることでもなかなか言い出せない損な性格ですので、みんながとてもうらやましく、又僕なんかよりも数段年上のように思えました。小学校、中学校のころには僕はおしゃられさえもできないほどのひっこみじあんでした。それが変な言い方かもしれません、おしゃらけるようになりました。自分で自分を改善しようとしたからできたのだと思います。だからこのセミナーでのみんなさんの意見や楽しく話をしたことをバネに今度このようなセミナーに参加できれば一度でも自分の意見を言うつもりです。

また僕は視野が狭く考え方も幼いことをはづかしく思いました。みなさんに御迷惑をおかけしてばかりだったと思います。赤穂さんと有光さんには本当におせわになりました。

### PAULA KELLY

It is difficult to express my thought about the RYLA camp will in Japanese, so I will try in English.

Coming to this camp and speaking with young Japanese people about things that are important to us made me realize once more that while many of our customs, our cultures and histories are extremely different, our fundamental way of thinking and the things we consider important are exactly the same.

Learning about Rotary and coming to appreciate it as more than just a gathering of wealthy men seeing it as a great world wide organization that is striving to make our world a better place was one of the things I learned and for that I am grateful.

Talking about the Kobe earthquake and discussing the true meaning of the word ボランティア made me take a look at my own life and I found myself

feeling ashamed at how little I do for others. When the Kochi eathquake occurred, I was on holidays with my friends and all we did was put some money in some tins in Tokyo. Sadder than the fact that we didn't go and help when we could have is the fact that it didn't even cross our minds we should.

This camp has inspired me to go more for others. I hope that in the future when it's possible for me to help other people in need, actually doing it will be my first move rather than considering in hindsight that I could have done something, but didn't.

Coming to such a beautiful island and enjoying myself while at the same time thinking hard about the future what as young people can do to make the world a place has perhaps the most beneficial 4 days for me as a person since I have come to Japan.

I will try to remember the things that I have learned in the camp put them into practice.

平成 7 年 3 月 30 日～4 月 2 日  
主 催 国際ロータリー 第2670地区  
国際ロータリー 第2680地区  
RYLA 運営委員会

開催地 神戸 Y M C A 余島野外活動センター